
そんな学園の日常

檜 楓呂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そんな学園の日常

【Nコード】

N0251F

【作者名】

檜 楓呂

【あらすじ】

とある学園に転校してきた少年、矢城功司。若干人見知りで何気に友達想いな彼と、転校してきた幼馴染みや悪友一号二号、よく分からないクラス委員や飄々とした担任と女生徒、どう見ても年下な先輩やらが織り成すドタバタした日々。そんな学園の日常は、いつまで続くんだろう？ …… って、これ微妙にあらすじじゃなくね？ (by 矢城功司)

第一章：初めまして（前書き）

パロネタが跋扈^{はつこ}しながら闊歩^{くわつぽ}しています（意味被^かつてるとか気にしない）。気をつけてください。あとたまに異次元的な事を口走^{くわさ}ったりしますが、仕様です。

第一章：初めまして

「初めまして。矢城 功司やちゅうこうじです」

自己紹介の基本として、まず当たり障りないことを言った。それからどこから来たとか、趣味とか、これからの抱負（いや、これはなんか違うか）を続ける。

（さて、他に何か話すことはあるかな……）

およそ三秒の思考時間を経て、まあこんなもんだろうと結論。予め考えておいた台詞も言えたし、この緊張の極致で俺はよくやったよ。自分を褒めたいね。いやもうこの際だから褒めておこう、心の中で。

——さて、俺は今教卓の隣に立っている。そう、あの教壇の上に必ず存在する木でできているかどうかは場所によって違うだろうが生徒の机より多少大きいあの机だ。そんな説明いらないって？ まあそう言うな。俺も緊張してるんだから。

そしてクラス中の大半の人から好奇の目を向けられている。俺の顔に何かついていているかね。それとも、あまりの美しさに見惚れてるとか。

……それはないか。

まあ、無理もないだろう。俺もあいつらの立場だったら（興味深い奴限定で）好奇の目を向けているだろうからな。

ここまで言えば俺がなんでこんな状況なのか、どういった立場なのかは分かるだろうが、一応言っておく。

俺は転校生だ。

決して何かをやらかして見せ物にされてる訳じゃないからな。

ちなみに今日は一月十日。外の空気も身を切るという比喻がピッタリと当てはまる程鋭くて冷たく、教室内も暖房器具がフル活動していて、その音や匂いがこの空間を闊歩している。

「さて……お前の席だが……」

年齢およそ三十後半位のやけにチヨビヒゲが似合う、身体中から飄々とした雰囲気醸し出す担任の……確か室見 成二先生は、顎に手を当てて考える仕草をした。しばらくの沈黙を経て、教卓の真ん前の席を指し、

「特等席だ」

——そう言つて笑いやがった。

「いや、普通転校生つて後ろの方の席なんじゃ……」

というもつともな抗議をしたところ、

「いいだろ？ 早く先生方に覚えてもらえるぞ」

と返してきた。

「いやいや、そんなに気を使つてくれなくて結構ですよ」

というかは是非とも遠慮したい。ありがた迷惑だ、実際。

「フム……そうか……」

室見先生はやけに残念そうに溜息をつくと、窓際の後ろから二番目の席を指した。

「じゃあそこ」

……なんかいい加減じゃないか？ それにさっきの考える仕草は一体……。しかもなんか微妙な席位置だし……。ていうかなんで空席が二つあるんだ？ 新学期早々休む奴はそうはいないが……。いやきつと誰か休んだんだよな。うん、きつとそうだ。

その後、教卓の真ん前の席の後ろの席の奴がその室見先生お気に入り（だと思われる）の机を片付けるのを見た。何となく悪い気がしたので、俺はそれを見てない事にした。

それはさておき、俺は新しい学園での暮らしに不安と期待の混ざった何とも言い難い気持ちで、これから3月後半までお世話になる机へと歩きだして――

「のわっ!？」

何もないとこでつまずいた。しかもまるでそこでヘッドスライディングでもかまそうとするかの如く勢いよく。

その割にはやけにスローモーションでタイル張りの床が迫ってくる。ヤバイ、何とか受け身を――!!

「ぬおおあつ!？」

俺はよくあるあの現象によつて飛び起きた。そして俺の目に映つたのは白い壁。そこにはクラスメイトの顔や暖房器具の音、匂いなんかもなく。

「はぁ、はぁ……夢、か？」

うわぁ、夢とはいえなんて恥ずかしい事をしちゃったんだ俺は。

転校初日にみんなの前でヘッドスライディングかます夢見るなんて……。

一つ溜め息をつき、周り……というか自分の見慣れてきた部屋を見回す。東に面した、カーテンが開いている窓からは気持ちのいい朝陽が差し込んできて、俺の左の横顔を眩しく照らす。それは睡魔を呼び寄せて、眠くなるような日射しだ。

「とりあえず、今何時だ？」

いくらあんな恥ずかしい夢によつて起こされようが、眠い事に変わりはない。俺は枕元に置いてある、お気に入りの曲を奏で続けている携帯を手取る。

とりあえずうっさいので携帯のサイドボタンで曲――アラームで流れていたようだ――を止めて、時間を確認してみる。

「現在時刻、七時三十分……」

誰だ春休み中に大した用事もないのにこんな時間にアラームをかけたやつは。

なんて自分に愚痴りつつ、俺はアラームのスヌーズ機能を切つて、

再び布団にくるまった。そしてそのまま麗かな春眠に――

……落ちていった俺がバカだったようだ。

~~~~~

耳元で妙に休符のアクセントがいい曲が流れている（ついでにやかましい振動音も右耳に）。ああ確かこの曲は一月くらいから目覚ましに使ってる曲だったけなあ。

「ん……」

何事かと目を開けてみると、目の前にまたもや曲を流し続けている携帯が。

……二回目のアラーム？ という事は今日は何か用事がある日だったわけ……？

そう思い、アラームを止めずに寝惚けた眼で携帯のディスプレイを見た俺は一発で目が覚めた。同時に昨日俺が何でアラームなんかを設定したのも分かった。いや、思い出した。

ディスプレイに表示されている時間は四月二日（水）八時二十二分。

同じくディスプレイに表示されているアラームのメモには『今日から新学期』。

このディスプレイに写されているものが意味するのは……

——ここで冷静かつ客観的な状況分析を試みよう——

このディスプレイが写し出しているものを誰もが正しいと言うのなら、今日は新学期。俺も晴れて一月に転校してきた秋葉学園しゅうようがくえんの二年生になる。転校当時は変によそよそしかった俺もクラスに馴染みあつという間に春休みになり、何をするでもなくぼんやりと過ごしてきた。

で、そのぼんやりと過ごした春休みも、どうやら昨日を以て終わってしまったていたらしい。

ということとは……つまり――

段々と嫌な予感がしてきた。冷や汗もダラダラと、それはまるでナイアガラの滝の如く。

「いや、まさか……それはないだろう」

意味もなく笑ってみた。ただ、全てを否定するように。

しかし、

「功ちゃ〜ん。学校、遅れちゃうよ〜」

下の階から現実をつきつける母さんのおっとりな声が聞こえてきた。その、まったりのんびりした声を聞くかぎり遅刻などしなさそうだが、そういう事なんだろう。カーテンが開いていたのもきつと母さんが起こしに来て開けたんだろうな。

——と、いうわけで、

「行つてきます!!」

俺は無言のまま猛スピードで上履きくらいしか入っていない鞆をもつて着替えて家をでた。当然、飯など食べている余裕はない。

俺の家から学園までは歩いて約二十分。走ったって十五分くらいはまずかかるだろう。そして現時刻は八時二十五分。俺の脳内メモリの情報を引き起こすと、確か今日は八時四十五分からホームルームだったと思う。まさにギリギリだ。始業式じゃなかったら遅刻は確定。

「ったく……こんな間に合うかどうかの微妙な時間が一番嫌だよな  
あ」

なんて愚痴っけていても時間は戻らない。俺は運動不足の体を叱咤して走り続けた。

流石に新学期早々遅刻はなあ……。

あの時起きていれば……と後悔し、後悔先に立たずという言葉と春の麗かな陽射し、それと暖かくなってきた風を全身に感じながら

見慣れてきた通学路を駆け抜ける。いつも寄り道する駅前の商店街――布由木通り、次いでゆるゆる長々と続く階段と坂も疾風の如く駆け抜ける。そして学校の近くにある住宅街へ突入した。

――ここでパンをくわえた俺と限りなく似た状況の美少女（転校生で実は同じ学校、加えて同じクラス）と曲がり角で正面衝突でもしたら面白いよなあ。食パンでもくわえて。それで性格は少し強気で、「イッターイ！ もう、ちゃんと前見て走ってよね！（美少女）」  
「あゝごめんちよつと急いでて……」（俺）「私も急いでるの！（美少女）」  
「だからごめんって。それより君、怪我はない？（俺）」  
「ないけど……」（美少女）「そつか、ならよかった（俺）」  
「って、あんた怪我してるじゃない！？（美少女）」  
「ん？ あゝ本当だ（俺）」  
「自分の怪我に気付かないなんて、あんたバカ？ ほら、診せてみなさい（美少女）」  
「いやこんくらいなんともないさ。それよりも、急いでるんだろ？（俺）」  
「あ、そうだった！（美少女）」  
「そういう訳で急ごう（俺）」  
「そうね（美少女）」  
「で、走り出す二人。」  
「……」（俺）  
「……」（美少女）  
「なんで着いてくるんだ？ 俺に惚れた？（俺）」  
「んなわけないでしょ！ 学校がこつちだから。そういうあんたも、なんで私に着いてくるの？ 惚れた？（美少女）」  
「ああ惚れた。君可愛いから（俺）」  
「（顔真っ赤にして）なっ！？（美少女）」  
「冗談だ。俺も学校こつちだから（俺）」  
「冗談、か……」（美少女）  
「ていうか、その制服、よく見たら秋葉？（俺）」  
「そうよ。私は今日から秋葉学園に転校してきたの。学年は二年生（美少女）」  
「へえ……俺も秋葉の二年生だけど（俺）」  
「あらそうなの？ 世界は意外と狭いものなのね（美少女）」  
「俺、矢城功司。もしかしたらクラス一緒かもな（俺）」  
「そうかもしれないわね。私は――（以下略）なんて事に――いや、今時そんなベタなイベントはないな。」

「なんて考えてる場合じゃないか……」

俺はそんな長ったるい妄想を振り払って走り続けた。

依然としたマラソン状態で住宅街を駆け抜けて、学園までほとん

ど一直線に続いた並木道に差し掛かる。この並木道は、しっかりと道がレンガで舗装されていて、さらに並木道は歩行者専用で、公園と直結している。加えて今は中々幅が広い道の両脇に植えられた桜が見事に咲き誇っていて、散歩するのには適切な道だ。しかし、現在の俺には桜を楽しむ暇など全くない。

そんな並木道を走り続けて、ようやく学園が見えてきた。

ある程度の都会に建っているくせに敷地面積がやたらと広い我が学びの園、秋葉学園。ちなみにどれくらい大きいかというと、とりあえず校庭がやたら広い。某ドーム球場が一・三個くらいは入る程だ。学園の外になるが、この学園の理事長の所有地に、こちらも大きめの公園を建てている。それは普通に一般人も使えるようになっていて、先程の並木道とも直結している。その他にも、部活の合宿などに使う寮とかがその他色々ある。まったく……. どんだけ金持ちなんだ、この学園の理事長は。

そんな説明をしているうちに校門に到着。そして現時刻は八時四十一分。

（よし、この分ならまだ間に合うかもしれない！）

微かな希望を見出し出した俺は、潰れそうな肺と壊れそうな足に喝を入れて走り続けた。

そして某ドーム球場一・三個分くらいの校庭を左に見ながら、一体いくら掛けたのかわからないしっかりとレンガで舗装された、校門から校舎に繋がっている道（こちらもなかなか広く、両側に所々ベンチがある）を駆け抜け、校舎の真ん前に作られている噴水がある広場（本当にいくらかけてんだ？）を通り過ぎて昇校口を目指し――って、そーいや新学期だからクラス変わったのか。

俺は噴水がある広場に慌てて戻って、そこに立ててある掲示板を見た。そして二年生のクラス割をA組から見っていく。

えーと……俺のクラスは、と……あ、あつたあつた。よし2・Cか。

目指すべき場所が分かった俺は、今度こそ昇校口を目指した。

——それにしてもこの学園は広すぎないか？　まあ狭いよりはましなんだが……。

さて、2・Cの教室だが、果たしてこれは四階にあった。どうやら神様は俺を徹底的に鍛えたいか苛めたいらしい。

息も絶え絶えに、自分の教室前についた時には、すでにHRは始まっていた。

間に合わなかったか……。うゝむ無念だ。

しかしここで過ぎ去りし事柄を悔やんでいる場合ではない。次に俺に課せられた事はどうやって教室に入るかだ。

……さて、どうしようか。ここはやっぱり後ろからこつそりと……。いや、もう開き直って堂々と前から……。いやいやここはウケ狙いでむしろ窓から侵入……。はやめよう。流石にそんな勇氣は俺にない。

……。よし。後ろからこつそり行こう。

と、いうわけで俺は遅刻した時の常套手段で行くことにした。

音をたてないようにそつとドアを開けて……

「今頃ご登校か？　矢城」

「のわっ！？」

……教室に入っつてすぐに桐垣に声をかけられて俺は思わず情けない声をあげてしまった。

それよりなんでこいつはこんな所（二枚ある引き戸のドアの開かない方の前）にいるんだ？

その疑問はどうでも良い（冷静に考えると良くない）が、そのせいでクラスの大半以上の奴らがこちらを向いて、笑いを堪えている。当然、担任の先生——また室見先生かよ——もこちらを見て何かを言いたげだ。

クツ……何故に俺がこんな状況に陥らねばならないのだ。神様は意地悪だ。そもそも桐垣があそこでいきなり声をかけてこなければ……。ハア……。いつもコイツのせいで色々厄介事に巻き込まれるよなあ……。

ちなみに声をかけた奴——桐垣 秀知きづかひらは俺の……一応は、親（というよりも悪？）友。第一印象はやけに古めかしい名前だという点。本人はこの名前を気に入ってるらしい。成績は文武両方にたけていて、天才と言っても差し支えない。ここだけを見ればな。

天才と言いきれないのは、こいつのやることなすこと考えることが全てに置いてくだらないかつ厄介かつ迷惑で、生粋のトラブルメーカーだからである。俺も何度か奴がおこす騒動に巻き込まれ、散々な目にあつたが思い起こすと非常に長くなるので割愛させていただく。

さて、今はこいつの事より、この現状をどう切り抜けるか、だ。

こつちを見ている室見先生になんて言い訳しようか。

曲がり角でいきなり女の子と正面衝突……。いや、パターンの王道化は避けよう。

とすると……。

あゝでもないこゝでもないと考えてくちごもつていると、ふと教卓の隣に人が一人立っているのに今更ながら気付いた。しかも、何故か見覚えがある。あの顔……。まさか……。いや、でも……。それも王道パターンだしなあ……。

どうやら、あちらも俺の事をどこかで見た顔だと思っているらしく、俺をジッと見つめている。

そして見つめ合うこと三秒程、室見先生のわざとらしいせきばらいが聞こえた。

「オホン。あゝ、つと矢城。何で遅刻したのは想像つくから、教えて、聞かない。で、そろそろHRを進行させたいんだが……。いいかな？」

「うっ——ハイ……」

自分の置かれた状況を見直して、死ぬほど恥ずかしくなった俺は大人しく従った。周りの奴らは遂に堪えきれなくなったのか、クスクスと笑い始めている。

……きっと今の俺の顔は真っ赤なんだろうなあ。

そう思いつつ、自分のであると思われる窓際の一番後ろの空席に向かった。

## 第一章：2 初めまして？

「初めまして。東 湊<sup>あずま</sup>亜<sup>じあ</sup>です」

教卓の横に立っている少女はそう言った。そして同時に男子から微かなどよめきが発せられた。

無理もないだろう。教卓の横に立っている少女——東湊亜の容姿は美少女と言ってもどこからも文句がこないであろう程可愛いのだ。身長は大体百五十後半、少し茶色の混じっている見るからにサラサラそうな髪はうなじの辺りまでのびていて、前髪は真ん中で少し分けてある。くせつ毛なのか、二本ほど触角のように飛び出ている前髪が、少し頭を下げた拍子にフワフワと揺れていた。猫でなくてもじゃれつきたくなりそうな感じに。更に歳より少し幼く見える顔に似合わないなかなかナイスなバディだった（何がナイスなのかは想像にお任せする）。そして、その姿は、俺の記憶にある人物とほとんどが一致している。

「さて、君の席だが……」そう言った室見先生の挙動を、教室中の男子が注目した（俺を除いて）。「そこに決定」

室見先生が指を指した先に、男子（俺以外）の視線が集まった。その場所は、教卓の前の机。俺は机についていた肘が滑り、軽くズッコケた。

またそこかい！ お決まりなのかこれ！？ ていうかいつそこに空席が！？

何故なんだーと頭を抱えている間にも、世界は俺を残して進んで行く。

「え、えつとお……」

美少女転校生、東湊亜は困ったように笑った。そして、何故か俺の方を一瞬見た。色々ツツコミたい事があったがタイミングが掴めず、事の次第を見てその機会を伺っていた俺は、そんな彼女としっかり目があってしまった。そしてそれを室見先生は見逃さなかつ

たようだ。

「ほほう……フム。なるほどなるほど」

先生は顎に手を当てて、何か納得したように二、三度頷き、ニヤリと笑った。……とてつもなく嫌な予感がする。

「さて、冗談は置いておいて、本当の席を決めるぞ」

にわかに沸く男子（しつこいようだが俺以外）。

「君の席は………」

しつかりたつぷりと勿体ぶらせて、

「そこだー！」

何故だか生き生きと室見先生が指した席は……俺の隣。ハイ予感的中。

クラスの男子から嫉妬やら羨望、約一名より殺気を感じた。予想通りに。

「というわけで決定。坂本、机頼むな」

室見先生に呼ばれた坂本は、無言のまま頷くと、教室を出ていった。

何故教卓の前の席は空いていて他の席は空いていないんだ？俺の時と違って……。ていうかその空いてる席使えよ。

後日友人に聞いた話だと空席は常備で、俺の時に片づけていたのは俺に罪悪感を感じさせるためだったらしい。……室見先生のクラスに三カ月くらいいたけど全く気付かなかった。

それはいい（あまり良くないけど）として、あの男共の血に飢えた視線をどうすればいいのだろうか。誰か教えてくれ、大至急。

そんな事を考えながらふと東を見ると、心なしか嬉しそうに笑っていた。

——男子からの嫉妬やら羨望＋三十%（当社比）。

そんな気がして、俺が明日からの学園生活について真剣に悩んでいると、また東と目があつた。その表情はどことなく寂しそうで、その姿からは『私が隣だと、嫌なのかな……』と、そういう感じの雰囲気かひしひしと感じられた。

ハッキリ言って、嫌なわけがない。あんな美少女が隣の席なら、なにかと休みがちなの創造主だって毎日学園に来たくなるだろう。むしろ俺の心の中の正直な部分はヒヤッフーとどこぞのヒゲオヤジ（赤）のような奇声を上げて喜んでいる。だが、俺の動物的な直感は危険信号をだしまくっている。それに、本当にあいつだとしたら……。

きっと寂しそうな雰囲気を感じられたのは、俺がそのこと（＋明日からの学園生活について）で難しい顔をして悩んでいたせいだろう。

いたいけな少女を心配させるのは心外なので、俺は似合わないと知っていながら軽く笑って手をヒラヒラとふった。すると東はこちらまでホツとしそうな微笑みを浮かべた。

——男子からの嫉妬＋羨望の五十％が殺意に変換（当社比）。

今日からの教訓：新月の夜には背後に気を付けよう。

ガラガラ——

そんな事を考えていると、無言のまま坂本が帰ってきた。机を抱えて。

「おうご苦労さん。矢城の隣に置いてくれ」

悶々と考えているうちに、いつの間にかに隣の桐垣が机一つ分遠くにいた。そしてこちらを見てニヤニヤしている。ちくしょう……あいつが憎い……。

桐垣を睨んでいると、その間を割って坂本が机を置いた。そして、東がその席に座って、こちらを見て微笑んだ。

「久しぶり……だね。功司君」

「あ……ああ」

（久しぶりってことは……やっぱりあの東湊亜、か。やっぱり奇跡の同名同姓そっくりさんじゃなかったか……）

およそ四年のブランクを感じさせない東に対し、俺は曖昧に返事をした。

そのまま無言で固まること二秒弱、

「そろそろいいかい？ お二人さん」

「ハッ！？」

また自分の状況を見直して赤面する俺。客観的にこれ見つめ合ってたのと一緒じゃん！

ちなみに俺の周りの状況で先程と違うことは、東がコロコロと笑っているのと、俺に降りかかってくる笑いの半分が殺意に変わったことだった。

「じゃあ、あとは校長先生のありがたい話を聞いてくれ。ありがたい過ぎて眠るなよ」

室見先生はそう言って教卓の席に座って、机に突っ伏した。……いやもういつもの事なので誰も突っ込まないよ？

ちなみにうちの学園は朝礼などは各クラスに設置されたテレビを使って放送される。それを自分の席に着いて見るだけなので貧血を起こして倒れる奴は誰もいない。代わりに真面目に聞こうとする奴もそうはいない。

というわけでいつも通りぼんやりと校長先生のありがたい話を聞き流して……っと、そうだ、どんな人がクラスメートになったのか見てみるか。

教室内を首だけ動かして見回すと、真面目にテレビの方を見ているか、机に突っ伏しているかの生徒達（当然俺は後者）がいる。さて、知ってる顔は……やっぱり少ないな。

まだ転校してきて三ヶ月くらいしか経っていない＋部活には入っていない俺は、同じクラスだったの人ぐらいの顔しか知らない（このクラスだと、桐垣、哉人、龍鶴、坂本、天笠さん、向塾、市橋、松田さん）。

こんなもんかな、ともう一度教室内を見回して――

「あつ……」「えっ？」

東と目が合った。そっぴや隣は東になったんだよな。つか何故こ

つちを見ている。校長先生は前のテレビの中ぞよ。

そして見つめ合うこと五秒程。

「……ねえ功司君」

「え……あ……ああ。何？」

「お願いがあるんだけど……いい？」

「え」と、何？」

先を促し、東の声に耳を傾ける。校長の話はまだ続いている。

「後で、学園の案内をしてほしいの。色々話したい事もあるし、ね」  
どこか甘えるような声でそう言う東。校長のありがたい話は終わる兆しを見せない。

「ああ、いいよ。別に」

「うん。ありがとう」

そう言う東はフワリと笑った。

「あ……ああ、うん……」

その時、俺の感覚から校長先生のありがたい話が消えてなくなった。ただ、ぼーっと東の笑顔に見入っていた。おかしいな。俺の記憶の中のこいつは、こんなに可愛いものではなかったのに……。俺も花も恥じらうお年頃なのか？

そんな思考をしていたからか、不覚にも桐垣がニヤリと笑った事に俺は気付かなかった。

「さて、今日は特にやることもないからこれにて解散。気をつけて帰るように」

ただただ校長の話聞き、また新学期新学年だからより気を引き締め学園生活を云々とやかましく言う生活指導の先生の話聞いただけのホームルームも終わり、室見先生のその一言で、生徒達は自由になった。そしてその直後に俺と東の周りに殺到する人、人、人。質問攻めされる東と――

「功司イイ！！ 貴様、淫亜ちゃんとはどういう関係なんだアアア

「……」

尋問される俺。つか襟首掴むな。苦しい。

「いや、どうもこうも単なる昔の知り合いなだけで……」

「嘘をつけエエエ！！　じゃあなんであんなに親しそうに見つめあったり話したり見つめあったりするんだアアア！！！」

ああもう本当にコイツはうるさいなあ。

今俺に積極的に尋問しているのは悪友の氷室　龍鵠<sup>ひむろたつや</sup>。先程真つ先

に俺に殺気を贈って来た奴だ。コイツはモテないくせに女好きの報われない男で、モテない原因は軟弱な性格、ひ弱そうな容姿その他諸々。ゲームの世界、自分の空間（妄想）の中のみでは恋愛の上级者であるその姿はある意味『漢』らしい。

このように、何故だか知らないが、俺の周りは悪友が多い。これも主人公に課せられた逆らえない設定……もとい試練なのか？話を戻そう。

「だからそれはただ単に東が人見知りする性格なだけであってそれに昔つつたって小学生の頃に家が近くてよく遊んだ位だし中学生になる時に俺は引越したからそれ以来会ってないし——」

「功司、ちよつといいかい？」

急に冷静な口調になって俺の言葉を遮る龍鵠。何だよ。

笑顔をヒクつかせながら、龍鵠はこう言った。

「世間一般ではそれを幼馴染みと言うと思うんだけどさあ」

「えっ？　いやまあ……確かにそう言えなくもないかな……」

龍鵠の顔に、何やら十文字の青筋が浮かんた。笑顔のまま。

「——よし、堕とす」

「は？　堕とすってどこに——」

「そんなの決まってるだろう？」

龍鵠は笑顔を浮かべ、段々と襟首を掴む力を強めていく。それは初めてみるような爽やかな微笑。

「ちよ——やめッ……ぐ、苦しい……」

龍鵠の手を叩いて振りほどこうとするが、この圧倒的不利な状況

では効果無し。

「さあ堕ちろ！！ 地獄にいいいい！！」

（あ、ヤバいマジで堕ちる……）。

俺が本気でヤバいと思いかけた時、天使は舞い降りてきた。

「あ、あの……」

いつの間にかに質問攻めから解放された東が、こちらを向いて申し訳なさそうに話しかけてきた。

「何だい？ 何か用かい？ 湊亜ちゃん」

その声を聞いた龍鵜は俺から即座に手を放し、今にも東に抱きつきそうな勢いでは振り返った。そして当たり前の様に彼女の手をとる。今しがた俺の命を摘み取るうとした微笑とは程遠い、とてつもなく緩みきったニヤニヤ顔で。

「ゴホツゲホツ……——ッ……」

一方のやつと解放された俺は激しく咳き込む。あゝ死ぬかと思っ  
た……。

「湊亜ちゃん、だよ。何処から来たの？ 彼氏いる？ 電話番号は？ 家はどの辺？ アイツとはどういう関係？」

「え、えつと……」

いきなり手をとられ、また矢継ぎ早やに質問攻めにあい、明らかに戸惑っている東。だが、そんな事を気にする龍鵜ではない。こいつは勇猛果敢———というか猪突猛進に質問を投げかける。

「この辺の事はあんまり知らないよね。何なら不肖、この氷室 龍鵜がご案内を——」

「えと、それはもう功司君にお願いしたから……その……ごめんなさい」

『グサッ』つと。

龍鵜に見えない何かが刺さったような気がした。

「やっぱり、君は生かしておけない存在のようだね矢城功司……！！」

そして、こちらをありとあらゆる負の感情をこめた目で睨んでく

る。……よく見ると、俺の周りに同じ様にいい感じに飢えた狼共がたくさんいた。きつと龍鵜と同じ事を言っただけだ。同じ事を言われたんだろ。

ともあれ、これ以上ここにいと命が危ないと俺の直感が感じたため、戦略的撤退をすることにした。

「ほ、ほら東。陽が暮れる前にさっさと行こう」

「あつ……」

東の手をとって、教室を出ていこうとし――

（ハッ!? し……しまった……）

自分が咄嗟にとった行動の愚かさに気が付いた。

この状況、端から見れば多少無理矢理東を連れだそうとしているわけで当の東は嫌がるどころか微かに頬を赤らめているわけで当然この二人を見ている飢えた狼共は

「グルルル!!」

半野生化しているわけで。

「……………」

俺は明日からの生活が平穏なものにはならないであろうことを感じたが、ひとまず脱出を優先した。

東は俺に手をとられたまま一緒に教室を出る直前に飢えた狼共にペコリと軽く頭を下げる。

俺は心の底から思った。これで少しは大人しくなってくれるといいんだけど、と。

そんな淡い期待を胸に、俺達は教室を出た。というか俺が東を連れ出した。

## 第一章：3 学園案内

我が学びの園、秋葉学園は先述の通り、ある程度な都会に建つて  
るくせにやけに敷地面積が広い。あの某ドーム球場一・三個分相当  
のグラウンドもそうだが、校舎自体もけっこう大きい。しかも生徒  
の教室がある棟、職員室や購買、食堂や保健室がある棟、音楽室や  
実験室がある棟と、三つの棟に分かれていて、各棟間の移動は渡り  
廊下を利用して行うことになる（ちなみに各棟の名称は、生徒棟、  
管理棟、特別棟）。この学園の主な三棟は、上空から見ると凹に近  
い形をしている。

「まあ一応この三つの棟に囲まれた中庭を通って移動できなくはな  
いんだけど……」

「なにか不都合でもあるの？」

「ああ、まあ……よく分からんものが……」

なんでか知らないが、中庭となるおよそ二十メートル四方の空間  
には迷路が作つてある。迷路の壁は、背の高い木（？）が担つてい  
て、その構造はかなり複雑。ナメてかかるとプチ遭難する。それ故  
ついた俗称が『箱庭』になるほどだ。この箱庭を説明しようと尽力  
する人もいたが、結局説明はされていない。ただ一つ分かったこと  
は、なんでも入る度に道が変わるそうだ。

「……そっちの方が時間かかるね……」

「ああ。そういう訳でこの箱庭を通路として使う奴は少ない」

桐垣は好んで使うけど。

「なんでそんな物が学園にあるの？」

「……七不思議の一つだと思つた方が精神衛生上いいと思うぞ」  
その曰く付きの箱庭は置いておいて、他の説明に入ろう。

この学園には、体育館は当然の事、この体育館とグラウンドの中  
点位のところに部室棟という物がある。この部室棟もなかなか大き  
く、各運動部やよく分からない同好会の部室として使われている。

「まあとりあえずはこんなもんだ」

東に学園全体の簡単な説明をして、その説明した内の生徒棟、特別棟を案内し終わったところで俺は一息ついた。

「ねえ」

「ん？」

「何で生徒棟じゃなくて特別棟から案内したの？」

ああそれか。確かに生徒の各教室がある生徒棟から説明した方が効率が悪かったな。だけどな、

「あの状態であそこにお前といると、俺の明日が危ないからだ」

「？」

簡潔に説明したが、東はあまり理解していないようだ。まったく……もしも桐垣にこの状況を見られでもしてみろ。俺の平穩なる学園生活がなくなるぞ。いや、既に危ないが。

「ていうかお前も転校して来てあまり経ってない俺じゃなくて他の奴——例えば天笠さん辺りにでも頼めよ」

「あれ？ 功司君も転校して来たの？」

「……………」

そついや言つてなかったつけ。そんな暇もなかったしな。

「それより、天笠さんって、誰？」

ん？ 何だか笑顔の東から微かな何かが……。何だこの感じは……？

「誰？」

東から放たれる謎めいた気に首を傾げながらも、質問に答えることにする。

「俺の前のクラスの委員長」

「どんな人？」

「ああ、えーと……髪がほんの少し紫っぽくて腰までとはいかないけど背中の真ん中位まであつて、そんでちよつとお節介。んで……良く分からないところとかあるけど、まあ中々いい人だよ」

俺の返答に、東思考中。恐らくはそういった人物がクラスにいたかどうかを思い出しているのだろう。

「……ああ。あの人ね。確かに案内してあげるって言われたけど……功司君に頼んだからって悪いけど断ったの」

そう言っただけで微笑む東。さっきはなんか様子がおかしいように見えただけど……気のせい、か。

「別に俺の事なんか気にしないでいいのに」

「だって……」

「ん？」

東が何かを呟いた気がした。が、良く聞こえなかった。まあいいか。

「さて、さっさと次行くか」

俺は東を率いて管理棟へと向かった。

管理棟には、生徒棟の西の端から繋がっている渡り廊下から向かう。途中に箱庭を通ってみるかと思えば東を誘ってみたが固辞されてしまった。

「一階が広大な食堂＆購買。購買の焼きそばパンは人気があるから気を付けろよ」

何か質問は？ と東に尋ねて、特にないようだったので二階へあがった。

「んで、二階は少々広大な職員室と生徒会室」

更に三階へ。

「三階は保険室とＡＶホール」

「普通保険室って一階とか低い階にあるんじゃない……」

「そういう質問はこの学園の理事長にしてくれ」

そう説明して保険室の前を通り過ぎようとした時、不意に世界が傾いた。

「うわっ」

どうやら俺の体は斜め左後方に力を掛けられたようで、そちらの方向へと引つ張られてしまう。バランスをとろうと、無意識に手を伸ばし、何かを掴む。

「きゃ——」

しかし掴んだものにも俺を支えるだけの力がなかったのか、そのまま斜め左後方——ドアが開きつぱなしかった保健室の中へ引きずり込まれてしまう。

——ドテッ。

俺は引つ張られるままに尻もちを着いてしまった。

——いたたた……誰だよこんな事するのは……。まったく、昼間つから男を保険室に引きずりこむ奴なんて——

「俺は一人しか知らねえ」

そう言つて振り返つた俺の視界に納まっていたのは……

「こんにちわ。功ちゃん」

「やつぱりあなたですか。白井先生」

予測通り、我が秋葉学園保健医にして癒されたい時に癒して欲しい人ランキング（桐垣調べ）一位の白井 由衣先生ゆいせいだった。この人は俺の母さんの妹で叔母に当たる人。実年齢不詳だが見た目はかなり若い。秋葉の制服を着ても違和感無しくらいに。性格は能天気、お茶目と、中身も結構若い。

「ああん、もう。二人の時は由衣って呼んでつて言ってるでしょ？」

それはともかく、なんでこの人はこういう誤解を招くような事を言うかな。まったく……そのせいであの時桐垣に……。

「あらあら。功ちゃんたらこんな可愛い子を保険室に連れこんじゃつて〜」

本当にこの人は自分の立場つてものをしっかりと……つて、え、なんだつて？

言われてみてから初めて気付いたが、どうやら俺はとつさに東の手をとつて保険室に連れこんでしまったらしい（多少語弊有り）。

「あ、い、いや、これは事故であつて不可抗力な訳でして決してわ

ざととかじゃなくて……」

「こ・う・じ・君」

俺の必死の弁明を遮った笑顔の東から、また例の気を感じた。先程のヤツとは比べ物にならないくらいに。ちなみに笑顔も先ほどとは比べ物にならないくらいすさまじいですよ？

「ハ、ハイなんでしょうかッ！？」

「ふふふ……だあれ？」

そのたった二文字の言葉の中に怒りを感じたのはきつと気のせいじゃない。

「誰なの……？」

再び答えを吐かせるためのもてつもなく甘い声で言う東。

「え、と……この人は俺の叔母さんにあたる人で——」

「まあ、功ちゃんたら酷い……男子生徒が夢中になっちゃう麗しきお姉さんに向かっておばさんだなんて」

よよよ、泣き真似をして白いハンカチ口元に当てているを白井先生を、俺は目だけでを制した。質問からして東が何に対して怒っているかはよく分からないが、ここは大人しくした方がいいと俺のシックスセンスが叫んでいるからだ。

「だあれ……？」

再三そう促す東からダークサイドが広がっていくのを感じる。非常に危険だ、俺の生命。

「さ、先程言った通りこの人叔母——つまりはうちの母親の妹な訳でして、特にやましい事とかはない……のですよ？」

焦りのあまり、ついおかしい日本語になってしまう。

「本当に？」

「本当に……ですよ？」

「そう……」

東から感じた妙な殺気じみたものが、段々と小さくなっていく。とりあえずはおさまったようだ。

「初めまして。東 湊亜といいます」

元に戻った東は、そういつて白井先生に頭を下げた。

「あ、どうも初めまして。功ちゃんのお母さんの妹の白井由衣です」  
叔母っていいなよ、という言葉はもう言わない。会う人会う人に  
こう言うから、ツッコむものにも疲れたからである。そんなに叔母さ  
んって言われるのが嫌なのかねえ……。

「あの……失礼ですけど……お幾つですか？」

絶対聞くだろうと思っていた質問がやっぱり発せられた。そりゃ  
そうだよな。俺の母といい、白井先生といい、若いを通り越しても  
はや幼いだもんなあ。

「二十七よ」

その質問に、人差し指を立てて、笑顔のままでそう答える白井先  
生。これも会う人会う人の聞く事に返す答えだ。

「確か四年前に聞いた時もそうだったような……」

と、事実を思わず本当に小さな声で呟いた。蚊の鳴く位での声だ  
ったはずだ。

「こ・う・ちゃん」

しかし聞こえていたらしい白井先生は、相変わらずの笑顔で俺の  
肩に手を置く。……その笑顔の裏に何かとてもヤバイモノを見たよ  
うな気がする。

「世の中にはあ……」飽くまで笑顔の白井先生。その微笑みが怖い。  
「知らない方が良くいことも、あるのよ」

……確かに、このままだと俺がこの後どうなるか知らない方がい  
い気がするというか知りたくない。

というわけで、

「失礼しましたー!!」

東の手をとって戦略的撤退。

「え、ちよつ、功司君!？」

東はかなり慌てていたが、俺の命の為にきてもらった。と  
いうか有無を言わず連れだした。本日二回目。命の危機は本日一  
回目……いや、二回目か？

命からがら保険室から脱出した俺は、ほっと胸を撫で降ろした。

「ふう……危なかった……」

主に俺の生命が色んな意味で。

「悪いな、東。無理矢理連れだしちゃっ……て？」

何故だろうか、うつ向いた東の顔が赤い。まるで夕陽を浴びているトマトの様に。

疑問に思った俺は東の視線を辿ってみる。

「あ……」

そこで、東の手をこれでもかかってくらいに握っているのに気付いた。そんなに必死だったのか俺は……。いや、今はそれよりも僅かでも弁明を試みてこのエマーゲンシーな状態をどうにかしなければ！

「あ……と……いや……これもなんとかいうか事故……みたいなものでして……えっと……その……ごめん！」

俺は慌てて手を離れた。

「う、ううん。いいの。私も……その……」

更に下を向いて、更に顔を赤くさせモゴモゴと呟く東。

——何だその生々しい反応は。そういう恥じらい反応をされると、なんというか気まずい。寧ろはつきりとけなしてくれ。あつ、勿論変な意味じゃないぞ。ただその方が後腐れがないからであつてだな……。

俺の心の弁明はさておき、この後はなんか……本当に気まずかった。俺のそっけない案内にただ頷く東、黙ったままでお互いをなるべく見ないように歩く……などの状況が暫く続いたのだ。しかし、それも校庭や体育館等を案内しているうちになくなっていき、校門を出るときには二人はすっかり……とは言わないかもしれないけど元通りの状態になっていた。

「まあ学園の案内はこんなもんだ」

一通り簡単な説明を終えた俺は、校門でそう言った。辺りは昼過ぎの穏やかな陽光に包まれ、暖かな風が時折桜の木々を揺らす。

「うん。ありがとね、功司君」

校門から桜並木に歩きだしながら、東はそう言って笑った。

「別に大した事じゃないさ」

本当に大した事じゃないよな。

「ところで、さ。お前の家ってどっち方面？」

桜の木々が見上げる空を狭めている並木道で、何となく尋ねた。別にやましい気持ちで尋ねたんじゃないぞ。本当に本当だぞ。

「ん〜と……あっち」

指した方向は住宅街の方。

「方向は一緒だな。なんなら途中まで一緒に帰るか？」

「うん」

東は特に迷うでもなくそう言った。朝とは違い急いでないので、今度はゆっくりと桜を眺めながら歩いた。

こんなところを桐垣に見られたら俺の明日はどうなるんだろう…

…。

そんな事を考え、東と他愛のない話をしながら歩いていると、すぐに住宅街に差し掛かった。

「つと、この辺でお別れだな」

その言葉に、キョトンとした感じの表情で東はこう尋ねてきた。

「え？ 功司君の家ってこの辺なの？」

「いや、もつと遠い」

こんだけ学園の近くに家があれば苦労しないって。今日だってあんな醜態を晒して恥かく事も……。

「じゃあなんで？」

「お前ん家ってこの辺じゃないの？」

学園の正門方面の人は、大抵この住宅街に家がある。もしくは電車通学で駅に向かう人。だから、正門方面で家が遠い人はあまりい

ない。というわけでそう思ったのだが……。まあ俺はそのあまりいない内の一人なんだけど。

「私ももつと遠いよ」

どうやらここにも、もう一人あまりいない奴がいたらしい。

「まあいいや。ならさっさと帰ろうぜ。腹へってきたし」

「そうだね」

俺達はまた並んで歩きだした。

んで、十五分くらい歩き続けたわけだが……

「なあ、俺、家……着いちゃったんだけど」

俺の目の前には、少し慣れてきた自宅があった。

「……………」

東はなにやら驚いた顔をして一時停止している。

「どうかしたか？ 誰かに一時停止のボタンでもおされたか？ ないかな。直ぐ様再生ボタンを押さないと」

えっ？ 再生ボタンの位置？ おいおい、俺にそんなことを言わすなよ。

「功司君の家って……ここ？」

スルー。流された。見事に。くそっ、俺のボケを流すとは……。

中々やりおるな。……というかなんか寂しい。

「そうだけど……」

寂しくなりながらもそう答えた俺の言葉に、更に驚く東。

「私の家……こっち……」

驚いている東が指さしたのは、最近できたばかりの俺の家の向かいの家。表札を見てみると、確かに『東』と書かれている。

「……………」

「……………」

お互い黙る俺と東。

なんというか……家、近っ。

## 第一章：4 逃走、のち邂逅

「じゃ、行つてきます」

昨日とは違って、俺は大分余裕をもつて家を出た。今日も空は憎い程に快晴で、麗らかな日差しと時折吹く暖かなそよ風がなんとも気持ちがいい。

「ふわあぁっ……ふー」

こんなに穏やかな天気だとやっぱり眠くなるよな。欠伸をしつつ今日は睡眠学習になるかな、いやいやもとより授業ないか、今日はなんて事を考えながら家を出た――

「おはよう。功司君」

足が一步目で止まった。何故か家の玄関の前に東がいたからだ。

「……あ、ああ、おはよう。……何でお前はそんな所に？」

「一緒に学園行こうと思って」

そう言つて、麗らかな春の陽気のように柔らかく微笑む東。いやそりゃ構わないけど、一つだけ疑問がある。

「お前、いつからそこにいた？」

東は顎に手を当てて少し空を見るような考える仕草をして、

「大体十五分くらい前、かな」

とか言つてくれた。

俺はがつくりと肩を落とした。そしてため息も一つ。十五分ついたらもう学園に着くころだぞ？ 平均的なカップラーメンを一つずつ作ると五つも作れるんだぞ？ それに、平日の朝の十五分っていったら通常の三倍以上の大切さがあるんだぞ？ まさかお前……世界という名のアレを使えるのか？

「さ、学園行こ」

「……………」

ツッコミ兼ボケはまたも流され、俺は連行された。

「それにしても、だ」

通学路も半ばへと差しかかり、住宅街も視界に入ってきた頃、俺は東に話しかけた。東は「何が？」と、キョトンとした表情で俺を見た。

「お前、変わったな」

「え、そう？」

「大分変わったと思うぞ」

そう、俺が昨日コイツと再会してからずっと思ってたんだ。再会してから今までの東は、ちょっと大人しい系で思わず守りたくなっちゃったりしないでもない感じがするのだが、昔の東ときたらお転婆で、どこことなく、なんというか……腹黒かったし。あとまあ顔はあんまり変わってないくせに体つきだけは大人に……ってどこのエロオヤジだよ俺は。

「功司君は変わってないね」

「そうか？」

「そうだよ」

東から見た俺は、曰くぶつきらぼうで面倒な事が嫌いでボーッとしているらしい。んで、何かに夢中になると周りが見えなくなって、時折見ている方が恥ずかしい位の勘違いをする、だそうだ。

「それと、興味無さそうな顔をしていながら、実は可愛いものが好きなのところとか」

俺の鞆についている、とあるゲームの猫のマスコットのキーホルダーを指してそう言った。

「べ、別にいいだろ」

コイツはなあ、スゴいんだぞ。何がスゴいってお前、語ってたらもう政治家の言い訳よりも長く流暢に、本にしたら二百ページを超える長編になっちゃう程なんだぞ？

まあその話はまた今度ゆっくりとするとして、女の子にそういう所を指摘されるって、なんか恥ずかしいというか照れくさいという

か。まあそんなわけで、俺は照れ隠しに早足に歩きだした。思春期ってムズかしいね。

「フフ……功司君、可愛い」

更に恥ずかしくなったので三倍の速さにスピードアップ。これも思春期が成せる業か。

ていうか、何故に朝からこんなこそばゆいやりとりをせにやならんのだ？ これでは世にはこびる悪の権化にして象徴、バカップルではないか。冷静になれ、冷静になるんだ、矢城功司！

そう、こういう時は悲しい事とかを考え——ああちよつと待ったー！ そこは触れてはいけない俺の過去です！ こんな所じゃまだ明かせませんって！

「ああもう……まってよー」

そんなどうでもいい事を考え、無事にクールダウン成功な俺に駆け足で追いかけてくる東。そして、俺の横に並んできたので、俺も東に歩調を合わせる。

「それにしても、なんか懐かしいね。こうやって学園に行くの」

「まあな」

うん、確かに俺と東は昔も家が近くて、よく一緒に学校に行ったものだ。あれ……でも昔もこんなだったっけ？ こんなちよつぴり思春期の匂いを醸しだすやりとりをしてた記憶がないのだが……。やっぱり、俺ももうそういうお年頃なのか？

「本当、久しぶり。懐かしいなあ。昔はよく一緒にお風呂入ったり同じ布団で寝たり……」

「……………」

俺は一度空を見上げた。青空に転々と浮かぶ雲がのんびり泳いでいる。今日は雲量一の快晴かな。そんな事を考え、視線を下ろして一つ呼吸を置く。

「東」

「ん？」

「それ絶っつつ対桐垣や龍鶴やその他諸々の男子の前で言うなよ」

「言ってほしくないの？」

「ああ」

俺がもれなく天国or地獄への片道切符を渡されるからな。行き先は九九%地獄だろうけど。

俺のその言葉を聞いた途端に、東は悪戯っぽく笑った。

「……フフフ。どうしよっかなあ」

あ、まずい、あの顔は何かを企んだ時の顔だ。十中八九、俺を何かしら困らせる事を。

「……何が目的だ」

「ん……とりあえずお昼一緒に食べよう」

ぐおっ……こいつの性格上、このパターンはおごらせる気だ。遠慮も容赦も無しに。

「いや、今日昼飯食う前に帰るんだが……」

「言っちゃっても私は別に構わないけど」

「……………」

俺は朝から二度目大きなため息をした。やっぱりこいつは昔と変わってなかった……。

学園に近づくにつれて、段々と同じ制服を着た人が増えてきた。そしていつもの桜並木。いつもどおり見知った奴らと軽く挨拶を交しているんだが……

「なんだ……このヒシヒシと俺に伝わってくるこれは……」

なにか視線を感じる。いや、視線以外にも色んな何か（主に殺気とか嫉妬とか）を感じるのだが……。

「どうかしたの？」

「い、いや……別に……！？」

うわっ！？ 強くなった！！

何なんだと辺りを見回した俺の目に写るのは、ほぼ獣人化している男子生徒諸君。彼らからは、それはそれは強烈熱烈な、なにか知

らない方が幸せなものを感じる。元凶はこやつらか。

「おい矢城」

「のわつ。……なんだ桐垣か」

周りにビクビクしながら歩いていると、いつの間にかに後ろにいた桐垣が俺の肩に手を置き話かけてきた。何用じゃ。

「……………」

何かしてくるのかと警戒していたが、奴は無言のまま。

「おはようございます、えーっと……………」

「桐垣 秀智です。おはよう。東さん」

桐垣は東に自己紹介＋挨拶をすると、

「フツ。どうやらお邪魔のようだな。お先に失礼」

そう言っただけでさっさと学園へと歩いて行ってしまった。

「何がしたいんだ、アイツは？」

桐垣がわけわからんのは今に始まった事ではないが、今日は一段とわけわからんな。

——ゾクゾク——

そんな事を考えていると、この暖かい陽気の中だというのに悪寒を感じた。

「?」

風邪でもひいたかな？

でも体調は悪くないしなあ、と首をかしげつつ、俺は東と学園に向けて歩きだした。

……そもそも、嫌なことのきつかけっていうのは必ず決まっているものだ。それはありきたりなものはず。だから、簡単に回避できる。だってそれはきつとお約束に入る部類だから。そう思っていた矢先が……

これだもんなあ……。

さて、何故俺は今こんなところ——生徒棟一階の階段の下の薄暗い倉庫の片隅——で体育座りをしているんだろう。……いや分かってるさ。ただ少し現実から目をそらしたいだけさ。

というわけでこんなところにいるに至るまでの経緯をどうぞー。

きっかけは、そう。もうお約束な感じに桐垣。コイツのやらかした事。それは——

学園に着いた俺と東が見たのは、噴水広場の人ばかり。さて、何をしてるんだろー？ と近づいて俺はそれを見たと同時に俺の時間が止まった。

噴水広場の掲示板にどでかく貼り出されている記事。内容は、

『美少女転校生と2・C矢城功司のイケない関係！？』

………またありきたりだな。

記事を良く見てみる。下の方には昨日の俺達の様子が激写した物が貼られている。いつの間に撮ったんだ一体。気付かない俺も俺なんだけど……。

そして、一番でかく貼られているのは……

『衝撃の瞬間！ 保健医は見た！』

俺が東を保健室に引きずり込んだ瞬間（多少語弊あり）。

『担当の保健医のS先生（本名明かせや。隠す意味ないだろ。ちなみにこれ俺のツッコミね）はこう言います。「うーんいきなり二人して入ってきたら慌てて二人して出て行ったわね」（……確かに事実けどさあ……そりゃないぜ）。あつ、でもKちゃん（いやさっき思いつき俺の名前書いてたよね？ 一番上にでかかど書いてたよね？）が引っ張って行く感じだったわねえ」とのこと。ちなみに矢城 功司氏は、この美人と評判の秋葉学園の癒されたい人ランキングと罵られたい人ランキング、イケない関係になりたい人ラン

キング共に第一位(当新聞部調べ)のS先生と妖しげな噂がたつていた事も記憶に新しい人である(いやまて! あれは勝手に桐垣が……)というか学園側はそんなランキングの集計を許しているのか! ? )  
『

ふう……リアルタイムでのツツコミは少し疲れるぜ……。それはいいとして、俺の明日は一体どっちだろう?

「フフフフ。どうだ矢城よ。この記事は」

「やはりお前の仕業か、桐垣よ。一体、いつ撮ったんだね」

いつの間にかに後ろにいて、愉しそうに笑っている桐垣に聞いてみた。

「フツ……お前等が朝礼の時に楽しそうな事を話していたのを聞いてね。後をつけさせてもらった。あの程度の尾行に気付かぬとは、まだまだ甘いな」

この後気を付けるんだな。そう言っつて桐垣は生徒棟へ向かって行った。気を付けるとか言うならやるなよ、と思っつたが敢えて言わない。言っつたところでどうにもならんからな。

今はそれより、

「フ——!!!!」

後ろの方で野獣と化した親友、悪友、その他e t c……をどうするかだ。

考えてみよう、僕の未来を。

どうする? 話し合うか? しかし今のアイツらには言葉は通じないような気がする。蹴散らす……のは無理だな。なんかヤバイ数いるし。というか案外俺も冷静だな。……………(思考中)……

……よし逃げよう。(↑結論)

今回の指令は『生きろ!!!』だ。

「東、悪い!」

「えっ?」

あまり状況を飲み込めていない東を置いて、俺は一先ず生徒棟へと駆け出した。

「逃がすかあああ！！！！（悪友A）」

「俺がお前を討つ！！（友達A）」

「フオオオオ——！！（知らない人）」

少し遅れて一体何人いるか分からない獣達が動きだした。俺という獲物めがけて。先頭にいるのは俺の悪友A（氷室龍鶴）だな。暇人め。

かくして第一次秋葉合戦、春の日差しと嫉妬の嵐。舞い散る桜と飛び交う血しぶき（命名桐垣秀知）が開戦した。テストに出るぞ。ここ。

俺の勝利条件：時間まで逃げ切る事。

敵の勝利条件：時間までに俺を捕える事。

捕まってたまるか！！

で、今に至る。外ではドタバタと人の足音が絶えない。

「ハア……… かつたりい……… 何で俺がこんな目に………」

ばやいてみた。が、虚しくなった。誰もいるわけないもんな。

「う………ん」

と思つた俺は甘かつたらしい。人いたし。つか誰？ 声からして女の子だが……。

俺は警戒しつつ薄暗い、何か色々あつてごちゃごちゃしてる倉庫の奥、声がした方へ近づいてみた。そこで俺が見たものとは——！！

「う………ん」

「ごちゃごちゃと何かが積んである上に、マットを敷いて器用な格好で寝ている少女。……… さあどうリアクションしようか。

とりあえず俺の友達Aが言っていたこういう場合の一般論。おつと、何故そんな話を話していたかについてのツツコミはNGだ。野暮ってもんだぜ。

「そついう時はやさしく添い寝だろう」

続いて悪友A。

「愚問だね。無防備な状態って事は……（R18指定）……という事さ。ハアハア」

……違うな。どっちかと言うと一犯論だな、二人とも。

ちなみに悪友Aはこの後女子に引かれまくっていました。

まあ常識的にここは起こすべきだな。

「おーいお嬢さーん」

呼びかけてみる。が、効果なし。それにしても可愛い寝顔だな。

少しあどけない感じがするし、一年生かな。入学早々こんなところで寝るとは太い精神だ。

ちなみに、その娘は無防備な格好で、制服のスカートから綺麗な足がのびている。つかなんか見えそう。イカン、ダメだ、と俺の中の天使が叫んでいるが、やはり悪魔と仲良しなお年頃。つつい目がついて、ハッ！  
！これでは奴ら（我が友）と同じではないか！！ちよつとへこんだ……。

「うゝ……むゝ……誰かいるのか……？」

俺が一人で傷ついていっていると、寝ていた娘が起きた。

「んゝ……」

と思ったが、まだあちらの世界にいるようだ。

少女は寝惚けた顔で、目を擦りながらこちらをボーッと見ている。そして、その姿を見た俺は驚いた。

まず、制服。うちの学園は、男子が普通に深い茶色のブレザーと深い茶色のズボンに淡い黄色のネクタイ。女子もほとんど同じで、男子と違うのはYシャツの上に同じく深い茶色のベストを着用している事。

さて、俺が何に驚いたかと言うと、ブレザーの左胸についているワッペン。

この学園は、入学する年ごとにワッペンの色が違う。その色は三色あって、卒業した三年生が使ってた色が、新一年生にあてがわれる。そして、今しがた微妙に目を覚ました女の子のワッペンは赤。

赤は昨年度二年生がしていた物。つまり彼女は年上の三年生。そして、もう一つ驚いた事がある。それはその娘の容姿だ。

まず髪型。今はリアルにあるかどうかも疑わしい、髪の毛を頭の左右に束ねている髪型——要するにツインテール。

顔は、寝惚けているからかも知れないが、その髪型が見事に似合うほど幼い。

身長は、座っている所を見ても、大分低い。

結論として、自分より百%年下だと思った女の子は年上だった、という世の中の神秘に驚いているわけだ。ちなみにスタイルは身長を除いて平均的な高校三年生と同じくらい。

『反則だな……色んな意味で』

どこかからそんな悪友の声が聞こえた気がした。とりあえず黙っていてくれ。

「ん……」

一方、少女(?)は眠そうに目を擦っている。またその仕草が子供っぽくて、微笑ましい。どうやら彼女はまだあちらの世界の住人になっているらしい。さて、どうするか……

色々考えた挙句、結局起こすという結論に至った。まあ当たり前だよな。さて、どうやってこちらの世界に戻すかな。

パターンA：声をかける。

パターンB：衝撃を与える。

パターンC：悪戯する。

待った。少し待とう。タイムお願いします。

どんな事をするのかを一高校生として考えてパターンCは犯罪だろう。いたいけで無防備な汚れなき少女(外見幼女)にそんな事ができるわけ……

不意に、目に入る少女の姿。乱れた制服。そこから出るスラリとした足。小さいけれども、出てる所はしっかり出てる身体。まだ眠いのかどこか遠くを見ているボーッとした表情。

できるわけが……

こちらをキョトンと眺めたあと、再び船を漕ぎだす姿。あまりにも無防備なその格好。

……………頑張れ俺。

ここで負けちゃダメなんだ。そう、きつとこれは試練なんだ。永遠という名の物語（物語は英語でテイルズ「tale(s)」）だって、試練の果てに極光の力を手に入れたじゃないか。きつとこれは神様がうさばらしか暇つぶしにやっている事なんだ。それに俺はロリコンじゃない。断じて。

だからここはじっくりその姿を鑑賞……

ジ——

じゃないだろうが！！これでは空に散った悪友達と同じじゃないか！！（死んでません）だから大人しくパターンAで……

パターンA：悪戯する。

変わってるし！！じ、じゃあパターンBで……

パターンB：添い寝。

なっ！？か、変わつとる……

誰だ？一体誰の陰謀なんだ？

——フツ……陰謀なんかじゃない。それは君の願望さ……。

どこからかそんな神様の声が聞こえた……気がした。

ふざけるな。そんな神様、世界は必要としていない。かの運命の第二章の物語（物語は英語でテイルズ「tale(s)」）で、父親のDNAを忠実過ぎる程に受け継いだ彼も言ってた。もう神はいらないんだ、と。だからここは何もせずに鑑賞——

「ハッ！！」

そこまで考えて、俺は我にかえった。危ない危ない。何を考えているんだ俺は。

あやつくあっちの世界へ旅立つところだった。あっちの世界というのは深く追求しないでくれ。

（ん……？）

あれ、なにか視線を感じる……？

ジ――

俺をチクチクと射している視線を辿ると、少女が眠りから覚醒して、こちらを警戒しながらジト目で睨んでいる――つもりなんだろうが、全くそうは見えない。むしろ可愛い。

「お前、そこで何をしている？」

外見通り幼く、それでいてよく通る声で、そしてそんな声が似合わない口調で少女は言った。きっと、ロリコンな伯爵さんがいたら連れて帰っちゃうであろう感じに。

「いや、何って……」

どう説明すればいいんだ？ ただ、朝から桐垣のせいであたひと騒動に巻きこまれて悪友とか知らない奴から追いかけてられていつもどおり学園秘密通路を通っていったら女子更衣室に出ちゃったけど幸い人がいなくて良かったような残念なようなで食堂を走ってたらバナナの皮に滑って転びそうになったりしてとりあえずこの倉庫に隠れてる、と言ったところで果たして信じてくれるだろうか？ 無理だよなあ……。やっぱりバナナの皮はありきたりすぎるもん……。

「まあ……色々あるのさ」

という訳で曖昧にお茶を濁しておいた。

俺は普段、初対面の人とはあまりわだかまりなく話せない。要するに若干人見知りなのだ。子供のころは人見知りと顔見知りの違いが分からずよく誤用していたものだ。

それはさておき、むしろこっちが何をしているのか、とか色々含めて聞きたい。まずは……年上かどうか、かな。それによって話かたが変わるからな。

「そういう君は……」

「年上を君と呼ぶのか？ お前」

あつ……質問の一つが自然消滅した。日本じゃありえない飛び級かと思っただけ……やっぱり年上なのか。

「えーと、それは失礼……しました」

でも、やっぱり抵抗あるなあ。

「少し、質問いい……ですか？」

「なんだ？」

何だか警戒してるみたいだが、あっさりと許可がおりた。聞いた事は山ほどあるが、さてまず何から聞こうか……。うーん………よし決定。

質問開始。

質問1：何歳ですか？

「見てわからないのか？」

外見でいくと十歳以上十四歳以下。

「……ふざけているのか？ 制服を見てみる。どう考えてもお前より一つ年上だろうが」

見えません（心の声）。

質問2：何をしているんですか？

「寝ていた」

………。

質問3：何故？

「眠いから」

………。

「というかお前。人に質問してばかりだが、お前は誰だ？」

次は何を聞こうか、と考えていたら、そう言われた。そーいや名乗ってなかったな。

「フツ……俺はこの学園の二・Cの生徒。名前は……名乗るほどの者ではないさ（キラーン）」

という訳で勇気を振り絞り、一度言ってみたかった台詞を言ってみた。うん。我ながら似合わない。そして、言っただけだが、彼女の名前をまだ聞いてなかった。

「そーゆーあなたは？」

「別に名乗る義務も義理もない」

確かにそーですね。でもなんか損した気分……。

「ところで名乗るほどではない者よ。お前、一体いつからそこにいた？」

呼び方が何か引っかけたが、普通に答える事にした。

「え〜と……」

ブレザーの内ポケットから携帯を出して、時刻を見ている。そこには八時二十二分とでていた。それは奇しくも昨日俺が目覚めた時刻だった……。あっ、八時二十三分になった。

それはどうでもいいとして、えーと……五分くらいか。

「では、」

コホン、と一つ可愛らしい咳払いをしてから彼女は続けた。

「その五分間、何をしていた？」

彼女の言葉が刺々しく感じられるのは何故だろうか。分からない。

「何を、していた？」

少し口調を強めて彼女はもう一度問う。

「隠れてたら、あなたが寝てたので、観察していました」

爽やかに、言い切った。やってやったぜ俺。そしてこの後どうなるかなんて考えてないぜ？

「ほう……では、私の寝顔を見ていたということだな……？」

「はい。そうなります」

彼女は顔を伏せ、プルプルと震えだした。顔の前に出して、握り締めている拳もプルプル震えている。チラリと見えた頬が、恐らくは複数の理由で赤くなっていた。そこがまた子供っぽくて微笑ましい。が、今はきつとそれどころじゃない。

「うわっ……と」

彼女はいきなり俺に殴りかかってきた。しかしながら、目の前から突っ込んでくる彼女の体は小さく、見た目通り力もないので、痛みを殆ど感じなかった。しかし、それでも彼女は俺を押し倒し、殴るのをやめない。

「いきなり何を――」

「うるさい！！ 普通寝てる女の子を眺めたりする!？」

顔を真っ赤にして怒ってるんだか恥ずかしがってるんだか分からない様子で彼女は言った。というか反応遅いな。起きた時にそういう反応するだろ。普通。

「馬鹿！ 変態！ ひとでなし！！」

「ちよつ——待て……それは……」

ドガツ！

不可抗力だ——と言おうとしたら、顔を蹴られた。流石にこれは痛い。つかスカートの中見えてるぞ。そこを恥じらえよ。

「見るな！！　そしてそうゆう事を言うな！！」

スカートを押さえて若干遠ざかる彼女。ふう……ひとまず助かったな。流石にあれ以上殴られるとギャグで流されなく——

「！！」

と、俺は倉庫のドアの向こう側に、人の気配を感じた。とっさに隠れる場所を探して倉庫内を見回す。そして、隠れるのに最適な場所を見つけた。

「ちよつと来て！」

若干離れている彼女の手を取って、無理矢理掃除用具が収納されているロッカーに入った。そのロッカーは、どこにでもある灰色の鉄製で、扉が二枚あるやつだ。中には大掃除の時にしか使わない掃除用具が入っていて、少し広くできているが、二人で入ると流石に狭かった。という訳で自然と密着する体と体。

……先に言つときまずけどべつに狙った訳ではないのですよ？

ただあそこに彼女が一人していると危ないかなあーとか告げ口とかされたら俺も危ないかなあーって心配しただけであって合法的な理由をつけてこういうシチュエーションに持っていた訳じゃないのであつて俺はロリコンじゃないしつまりは成り行きな訳なのですよ？

誤解するのはよろしくないね？

ともかく。

「な、何を——！！」

「いいから静かに！！」

声に出さず叫んで、扉を閉める。そうすると、光は僅かにしか入ってこなくなり、ロッカーの中は大分暗くなった。そして腕の中にはいたいけな少女。……なんだか犯罪者になった気分だな。

「何をする気!？」

「隠れるだけ!！」

「何で!？」

「色々あつて追われてるから!！」

互いに小さく叫びながら言いあつた。彼女は惘然としていたが、静かになってくれたので好都合だ。そしてこのまま彼女の体を——  
つて俺のバカ!

少ししてから、倉庫のドアが開く音と、数人の足音、話声が聞こえた。

俺はその様子を息を殺して、ロッカーの扉の上の方にある横に細長い穴から見ていた。ちよつとしたソリッド・スロークな気分だった。

それにしても、だ。

俺は男達の拳動を気にしながら思った。今、自分の腕の中にすっぽりと収まっている、機嫌が悪そう(↑当たり前)な少女。女の子特有の柔らかさと、シャンプーか何かのいい匂い。それが、現在これでもかというほどに俺に押し付けられている。……はつきり言つて、非常に危ない。俺の理性が。彼女は黙ったまま、俺に抱き締められている。不機嫌そうに。ヤバいな……この状況……。何がヤバいかは一口に言い切れないのだが、

敗北条件の変更：敵軍に捕まる↓敵軍に捕まる+俺の理性の崩壊  
って感じだな……。くそつ、早く消えてくれ! 名も知らぬ男達よ! そして謂われなき俺を追いかけて回すのは止めて!

男達は、しばらく倉庫内を見回して、特に詳しく探す事もなく出ていった。それから十秒程、俺は神経を研ぎ澄まして気配を探る。

……どうやら大丈夫なようだ。

そう判断した俺はロッカーの扉を開け放った。そんなに明るくは

ない倉庫の中が、若干明るく見える。

そしてロッカーから出た俺は、

「すいません」

開口一番、謝った。

「本当にすいません真面目にすいません全力ですいません」

謝り通した。常々紳士でありたいと思っている俺は必死だ。それと同時に、覚悟もした。先程のあの行動からするに、また殴りかかってくる筈だ。俺はそれを甘んじて、むしろ進んで受け止めよう。勿論ながら変な意味じゃなく。

「……………」

彼女は黙ったままである。

——沈黙が痛い……。

「……………」

まだ、黙っている。

「……………」

俺も頭を下げたまま、黙っている。さあ、どうくる？ 名も知らぬ少女よ。

「別に……………いい」

時間が止まった気がした。世界という名のアレを彼女が使ったのかもしれない。

そして、時は動きだす。

「……………はい？」

「だから、別に、いいってこと……………」

殴られたり辱められたり罵られると思っていた俺にかけられたのは、許しの言葉だった。

思わず顔を上げて彼女を見た。彼女は、どこか恥ずかしそうにそっぽを向いて、赤くなっていた。

「悪気は……………なかったんでしょ？」

頷いて肯定。

「なら……………いい」

「ああ……うん……。ありがとう……」

——何だこの反応！？ 何か、すっごく生々しいぞ！  
？ 何かの策略か！？ ハッ！！ ……そういえば昨日もこんな状態があつたような……。

東の顔を思い浮かべ、すぐに打ち消した。俺は一体何を考えてるだろうね。

「……………」

「……………」

暫く沈黙の時間が流れた。

実際には一分にも満たない時間だったであろうが、今の俺にはその軽く10倍には感じられる。

「……来宮 梢きのみや しほえ」

「……はい？」

その静寂を破った声に、俺は大分間の抜けた声で返した。

「私の……名前」

……………。

えっと、色々言いたい事は、あると思うんだ。二人とも。きっと彼女は色々あつて混乱しているからそんな事を言ってきたんだと思う。そう、だからそれに対して、俺が言う言葉は一つ。

「何故に今頃？」

これが世界の選択だ。少々パニック状態に陥っている彼女を冷静にさせる為の。

そして、そんな彼女の様子を伺った時、見えてしまった。なにやら来宮さんのスカートのポケットから刃物の柄のような物がはみ出ているという事実を。

（——ッ——！）

そこで、俺は一つの可能性を思いついた。

彼女、きつと俺を殺る気なんだ。お互い正々堂々名乗った瞬間、俺はきつと彼女が隠し持っていたナイフでグッサリと……。そして俺の体は解体され、臓器とかは海外デビュー。名前と顔写真つきで、

きつと高値がつくんだろうなあ。

「べ、別に何だっていいでしょ！？　ただ……そう、その、気が変わっただけなんだからね！！」

怒っている。当然か。気が変わったって言うのも、俺を殺る気になったっていうことだろう。

さて、これに対し俺はどう動くべきか。少しでも俺が生き残る為には……。

——キンコンカンコン……

そんな事と一応辞世の句を考えていた俺の耳に、HRの始まりを告げる鐘の音が聞こえてきた。

「あつ」

その声は来宮さんのもの。

「えつと俺の名前は矢城　功司です」

好機と踏んだ俺は早口で名乗り、

「じゃあ、時間おしてるんで」

と言って神速で倉庫を後にした。

「あつ……」

後ろから何か言いたそうなオーラとボイスを感じる。が、振り返らない。きつと、振り返ったら最後、デッドエンドと救済コーナーみたいなものが俺を待っている筈だ。俺はまだ死ぬわけにはいからね。

## 第一章：5 罰ゲーム？

ふう、今日もギリギリだったぜ。

いやに律義というかなんとというか俺討伐軍の皆様はチャイム着席は守るといふ信念をもっているそうで、体育倉庫から教室まで誰かに襲われる事はなかった。

そんなこんなで教室に到着。怠惰な室見先生はまだ来ていない。というわけで、俺は無事に自分の席に着けた。いや、今日の朝も大変だったよ。生きてるって素晴らしい。

今日の激闘をハイライトで振り返っていると、程なくして室見先生がやって来た。そして、一通りの朝の挨拶を済ませる。

「おはよう。さて、今日の予定は、委員会とか決めておしまいということで。とりあえずクラス委員長は天笠。異論がある奴は、後で天笠にでも愚痴ってくれ。じゃ、あと任せた」

室見先生は眠たげにそう言う、あろうことが教卓に突っ伏して眠りやがった。

何て教師だ。ある意味憧れるよ。

「えー、室見先生は眠ってしまったようなので、委員長に指名された私が進行を務めます。異論ある人は？」

そんな事にもう慣れてしまったのか、天笠さんが前に出て仕切り始めた。その事に異論はないらしく、クラスの面々はそれに従う。

それを確認した天笠さんはこう言った。

「では、先ず委員会ですが、その前に、委員長補佐兼副委員長兼庶務兼書記兼幹事を決めたいと思います」

長いよ。漢字十九文字の仕事ってどんだけだ。絶対やりたくないよな。まだ馴染んでいないクラスだけど、皆のシンクロー率は七。％を超えてるだろうな。天笠さん以外。

「完全指名制です。この人こそ、と思う人を挙げてください」  
シンクロー率上昇。

つか、なにこれ？ 嫌がらせを合理的にできるゲームか何か？  
そんな思いを胸に、挙げる人いるのか？ とか考えていたら、  
「はい」

ちゃんと挙げる勇者が存在していた。その勇者の名前は桐垣 秀知。

「はい桐垣君」

「矢城に一票」

いや一票もくそもないだろう、この場合。つか俺かよ。コイツ、  
絶対に面白がつてやがるな。ニヤニヤしてるし。

「他には？」

「はい」

俺も負けじと手を挙げる。彼奴を指し返してやる。

「指された人に指し返すのは反則です。それでもはい矢城君」

「桐が——つて、何い！？」

なんてピンポイントな攻撃をしてくるんだ！！ まさか天笠さん、  
読心術を心得ているのか！？

「あ、え〜と……」

桐垣と天笠さんが仕組んでいるか、天笠さんが心眼を会得している  
としか思えない攻撃に怯んでしまう。くっ……こうなれば……仕方  
ない、奥の手だ。

「龍鵜を指名します」

苦し紛れのその言葉を聞いた途端、天笠さんの顔が少し嫌そうに  
歪んだ。そりゃそうだろう。俺も龍鵜が自分の補佐兼……え〜と……  
まあそうだったらとりあえず嫌だもんな。

そんな事を思っただけで龍鵜の方を見ると、何故か俺に向かって親  
指を立てて「グッジョブ！」何て言ってきた。

何故？ と思ったが、すぐにあいつは妄想のプロだということを知  
り出す。きつと奴は今、そういうシチュエーションでの妄想を繰  
り広げているんだろう。可哀想な男だ。

よし。せつかくだから俺のきつと百八個ある特殊能力の一つ、『

思念具現化』を使って龍鵠の妄想を覗き見してみよう。良い子は龍鵠みたいなものにはともかく、普通の人にやるなよ。プライバシーの侵害だからな。

さて、と。

俺は少し目を細め、だらけたにやけ顔をしている龍鵠の前頭部付近に術祖をかける。そして目をつぶる。するとラジオの周波数を合わせるが如く、真っ暗な俺の視界に段々と明瞭な世界の形が具現化される。

ああ、龍鵠の妄想が見えてきた……

——時は、夕暮れ時。オレンジ色の光と黒い影が織りなす幻想的なコントラストに包まれた教室。外では部活動に勤む野球部の声や、家路を辿る男女の楽しそうに弾む声。それもあまり届かぬ空間に、とても美化された龍鵠と天笠さん。二人は、机と机を隣同士にくっつけて、何やらクラスメートに押し付けられた仕事をしているらしい。

「まったく……私達だけに仕事を押し付けて帰っちゃうなんて……」  
少し紫がかった黒髪が夕陽に映える天笠さんはブツブツと文句を言う。そして、

そんな彼女の右隣に龍鵠。

「そんな事言っちゃって。本当は二人きりになるために皆に頼んだんじゃないのか？」

何て爽やかに言ったその言葉に、  
「な、何で知ってるの？」

顔を夕焼け空よりも赤くして、とても可愛い反応をする天笠さん。  
「ハハハ。まったく、いけない娘だ」

キラッと歯を白く輝かせて笑い、そつと天笠さんを引き寄せる龍鵠。

「そんな悪い子には、お仕置きが必要だね……」

「あつ……氷室君……」

そして、ゆっくりと、重なっていく――

――ブツ。

テレビの電源ついたままコンセント引っこ抜く感じで接続解除。

……ああもう見ていられないよ。なんていう妄想なんだ。桁が違いすぎる。もう妄想を抱いて溺死しろ、龍鶴……。

「えー……却下します」

そして、そんな全て遠き理想郷を見ている龍鶴に、現実を突きつける声が届いた。

「ハヴァッ……」

変な声をあげてくたばる龍鶴。受けた傷は互いに深い。そんな君と僕に、送れる言葉はたった一つ。

『甘えるな』

さておき、指名を却下するとは……そんなに嫌だったのか。なんか、悪いことしちゃったな……。

「矢城君、私、傷付きました」

ああやつぱり……。何か片言になってるし、相当な傷を付けちゃったんだな。

「責任、取ってくださいよね？」

取るしかないだろうな。男として。

「ああ解った。責任取って、俺がその、えーと委員長補佐兼、えー

……うん。になる、よ……？」

あれ、何だろう？ 右隣からものすごい熱量が襲ってくるよ。

何でだろう？ 俺、とても怖い。

恐る恐る右を見ると、

「……………（ニコッ）」

笑顔＋無言で、なにか物凄い炎をオーラみたいに纏った少女が一人、こちらを向いています。

……これは死亡フラグなのか？

「はい。それでは、矢城君を委員長補佐兼副委員長兼庶務兼書記兼幹事兼文化祭委員補佐兼体育祭委員補佐兼修学旅行委員兼生徒会委員補佐兼その他諸々私が関わる事の補佐委員に命じたいと思います。反論ある方は室見先生まで」

……何か増えてない？ 軽く三倍くらいに。つか途中まではまあ許せる範疇だったけど、生徒会つてところからなんかもうこのクラス関係ないような……。

ていうか熱っ。何か俺の右半面だけこんがり焼けそうだな。何でだろう？ ——いや、分かってるさ。

「それと、矢城君には相手になる文化祭委員と体育祭委員を決められる権利が贈呈されます」

ああもう何か全てが面倒くさいな。本でも読んでよ。

そう思い机の中に手をつ突っ込む。まだ教科書とかが入っていないそこには、

「何だこれ？」

自分の本と、何やら手紙っぽいのがあった。

その手紙は、簡潔だけれどもさりげなく女の子が使うような可愛いらしい模様が入ってたりするものだった。

これは……いわゆる一つの……いや、それは早計だ。この十六年ちよつとの人生で初めての事だ。落ち着くんだ俺。

と、とりあえず中を――

『こんにちは。いきなりこんな手紙を見て、戸惑ってるかもしれないが、私の用件を述べます。』

今日の放課後、体育館裏で待ってます。雨が降ろうと雪が降ろうと学園が火の海になると、貴方が来るまで待っています。』

――新手の脅迫か？ そう思える文章が、とても綺麗な字で書かれていた。

これは、どう捉えるべきなんだ？ そもそも、名前が書いてないって事は悪戯かもしれない……。いや、でももしこれが本当だとしたら、この人は俺が行くまで永久に待ち続けそうだな。そんな事

をしているかと思うとナイーヴな俺は夜寝れなくなってしまうしな……。

「矢城君」

どうすればいいんだ。ここは誰かに相談するべきか？

「矢城君」

するとしたら誰に？ 桐垣……は駄目だ。龍鶴も却下だな。え、  
そうなる……

「矢城君！」

「えっ……あ、はい」

自分と呼ぶ声で我に返った。

「今の話、ちゃんと聞いてた？」

「あー、ごめん」

「まったく……」なんて呟きながら、天笠さんは俺をジト目で睨んできた。ヤバイヤバイ。考え過ぎてて周りの事、見てなかったぜ。

「で、矢城君を生徒会副会長補佐に任命したから  
はい？」

「それと、坂上さんと東さんが体育祭委員と文化祭委員になったか  
ら」

え、ちよっ……

「だから、しつかり二人を補佐してあげてね」

「いやちよつと待った」

何故にこんなにも事態が進行しているんだ？ 俺は認めるとは一  
言も言つてないぞ？

「だって、二人でいいかって聞いたらうんうん言ってたじゃない」

それは世間一般では唸っていると言っただつ。

「功司君」

そんな反論を試みようとした俺の右から、推定1オクターブ高い  
ヴォイス。僕の名前を呼ぶのはだれ？

「いや、分かつてるさ……」

最早髪が焦げだす程の熱量をもって、俺を見ている東。その表情

は鮮やかな笑顔。

「私の補佐役は……」

主に「私の」の部分を強調して、ゆらあつと彼女の左手が動く。

「い、や、な、の？」

そして俺の右肩に手を置いて、飽くまでも笑顔＋猫撫で声な東はそう言ってきた。

——まずい。ダークサイドが広がっている。このままでは殺られてしまう。

「い、いいえそんな滅相もございませんよ嫌なわけないじゃないですか光栄ですよ東さんと仕事が出来るなんて」

命の危険を機敏に感じとった俺は、とっさにそう答えた。

「そう。ならいいけど」

そしてまたゆらあつと手を引つ込める東。その手が置いてあった所からは、何やらブスブスと煙と香ばしい香りがほとばしっていた。

今日からの教訓二：火の元には気を付けよう。

はあ……これで今日は何回生きていられる喜びを噛み締めたんだ？

「坂上さんの方は？」

「認めますよ」

最早投げやり気味に言う俺。今日はもう早く帰りたい……。

## 第一章：6 呼び出しは苦勞の予感

「では、この一年間の委員等はこれで行こうと思います」

黒板に所狭しと規則的に書き並べられた文字を指し、天笠さんはそう言った（ちなみに黒板の三分の一くらいを埋めているのは最早罰ゲームとしか思えない俺の役職名）。

やっと終わったか……。俺はそう思ってた。たりした。

何故なら、いつまでたっても委員とか決まらないという無限に近いループに突入して、少しでもボーツとしようものなら「矢城君、聞いている？」とか速攻で天笠さんのツツコミが入るし、その度になんか右隣の御方が（あらゆる意味で）核爆弾級の破壊力を誇る微笑みを投げかけてくるしその度に髪の毛がチリチリしたりするし、更にまたその度に殺気とか嫉妬とかが飛んでくるしで……。嗚呼、俺の平和な学園生活はどこへって叫びたくなるような状況だったのだ。それに加えて謎の手紙ときたもんだ。

（はぁ……）

溜め息の一つもつきたくなるよな。

本当、早く帰って寝たい。現実から目を背けたい……。がそうにもいかないのが人生。このまま帰ったら、俺はノイローゼになるだろう。ナイーヴだからな。

という訳で体育館裏へと急ぐ俺。

この学園の体育館は、敷地の南東の端に作られていて、こちらもグラウンド同様それなりに大きい。

で、その体育館裏とは、説明するまでもなく学園の敷地と敷地外とを区切る壁と体育館との間のスペースの事である。普通はそんな所に呼び出されたら、思春期真っ只中の男子高校生の妄想を駆り立てるに十分なシチュエーションを期待するが、そこにそんなものを

求めちゃいけない。何故なら、そこは日当たりがこれでもかというほど悪く、年中ジメジメしているような陰気さを漂わせているからであり、まるでロマンスとは無縁な雰囲気醸しだしているからだ。

生徒棟昇校口から靴を履き替えて噴水広場に出て、生徒棟とグラウンドとの間を歩いて行く。この学園は何気に緑が豊富で、レンガやアスファルトに舗装された道以外には芝生やら木やらが結構植えられている。

そんな人工的な自然という言葉の意味的に微妙なものが溢れる道を歩き、体育館の正面に来た。中からは熱心に部活動に励む生徒達の声が聞こえてくる。いやー青春してるねえ。

なんて年寄りくさい事を思いつつ、正面入口の左側へと周りこみ、体育館裏と呼ばれている空間に足を踏み入れる。途端に影の色が強くなり、湿度が少し増したような感覚に襲われた。というか実際にここは湿度が高いだろうけど。

「さて、そんな俺を待ち構えていたのは……」

口にだしながら辺りを伺う。

誰もいない。

少し奥の方へと行ってみる。

誰もいない。

……どうしよう。まだ来てないだけなのかな……。

少し待ってみる事にした。

……。

……。

……。

段々不安になってきたぞ？ はっ……もしかこれは俺を陥れる罠

だったとか！？

「失礼」

有り得ん話でもない。昨日からいろんな恨みを買ってそうだし。俺を亡き者にする為の作戦は、先ず絶対に気になる手紙を俺の机の

中に仕込む。あの文面だ。行く以外に選択肢はない。

「おーい」

来たらそこで待ち惚けを喰らわせる。帰ろうかと思うが文面を思い出してそこに留まる。待ち続けるのは俺の方だったというのか!?

「お——い」

行かなかつたらそれはそれで手紙が本当の物だったかも……と悩みまくるに違いない。なるほど……俺のナイーヴな心を上手く突いた作戦という訳か! これほどの策士がこの世におろうとは……。

孔明も真つ青——

「無視するな、矢城功司!!」

「つて、え?」

今俺を呼ぶ声が聞こえたような……。

「やっと反応したな」

まったく……と呆れた様子で俺の目の前に女の子が一人。どうやら空耳ではなかったらしい。

「あれ、君は……」

どこかで見たことあるような……それもついさっき。えーと、う

ーんと……誰だっけ?

さかがみ かある

「……坂上 薫だ」

……坂上 薫さん? あれ、どこかで聞いた事あるような……。

「ああ、同じクラスの……」

「やっと分かったのか」と呆れた様子で溜め息をする坂上さん。うん、俺も自分の記憶力に呆れてるよ。

さて、そんな彼女の容姿だが、まず目につくのがその髪の毛。夜の闇をそのままもってきたような綺麗な黒髪は、大体腰の辺りくらいまでのばされている。体つきはスラリとしたスレンダー、身長は東よりもほんの少し高いくらい。そこから、体格は全体的に均等のとれた印象を受ける。顔立ちは凜としていて、可愛いというよりも綺麗と称されるだろう。肌の色はほんの少し白く、まるでその姿は、男なら誰もが抱くであろう大和撫子そのもの。絶対着物とか似合う

だろうなあ。

で、そんな方が一体何の用で？

「まあそのなんだ……」

何故か言い淀む坂上さん。何か言いにくい事でもあるのか？ は

っ……これはまさか……！？

「実は……私、前から貴方のことが……」

少しうつ向いたまま目づかいで紡がれた言葉は、

「好き、でした」

紛れもなく自らの想いを打ち明けるものだった。

「え、と」

こんな所に呼び出すくらいだから用件はそんなものだろうと思っ  
てはいたが、実際にそう言われると戸惑ってしまう。冷静に頭が働  
かない。

「あの、ダメ……ですか？」

上目づかいのまま、その瞳に不安の色を現す坂上さん。

「いや、あの——」

「やっぱりダメですよ……。こんな事をいきなり言われても、困  
るだけで……。それに、私みたいな魅力のない女の子じゃ……」

不安の色はやがて涙になって、彼女の瞳にたまっていく。それが  
溢れ落ちるのも時間の問題だろう。

だから、その涙が溢れ落ちてしまう前に。

「そんなことないよ、坂上さん」

「えっ？」

ゆっくりと彼女に歩みより、そっと、

「君は十分、可愛いよ」

「あっ……」

抱き締めた。

「どうやら俺も、君の事を……」

「あの、本当に私なんかでも、いいんですか？」

本当に、この娘はどれだけ俺のストライクゾーンをつくのだろう？

「“なんか”とか言うなよ。それと、君でいいんじゃないかって君がいんだよ」

その言葉に、彼女は涙を瞳の端に浮かべたまま安心したように微笑んだ。

「ん……」

そして、ゆっくりと近付いていく、二人の――

「だから無視するなつて！！」

「うえい！？」

お、俺は今何を！？ 何やら龍鶴の得意技を会得してしまったような感じがするぞ！？ 大丈夫なのか、俺！？

「まったく……君は何か考え事をすると周りが見えなくなるらしいな」

そう言つて、ジト目で睨んでくる坂上さん。

「あ、いや、その――ごめんなさい……」

とりあえず無視してしまっていた事を謝る。というか、なんか想像していた喋り方と随分違うような……。

「悪かったな。外見とそぐわない喋り方で」

そんな気持ち伝わってしまったのか、彼女はそう言い放った。

「えーと、その――ごめんなさい……」

何かさつきから俺、謝つてばかりじゃないか？ いや悪いことをしたつていうのは分かるけどさ。

一方の坂上さんを見ると、彼女は若干顔を伏せてうつむいている。長い黒髪で顔が隠れているため、表情は伺えないが……。ヤバイ、傷付けちゃったかな……。なんだか気にしてるみたいだったし。うん、そうだな。偏見で人を判断しちゃいけないよな。俺だつて、あんな風になった時は……。

他人にそんな苦しみを与えるなんて、俺は少しボケてしまつてい

たようだ。

ならば、ここで人として、男としてとるべき行動はたった一つだけだ。

大きく息を吸い、

「ごめん!!」

推定百ホンオーバーの大きな声で謝る。坂上さんは何事かと驚いたようだったが、お構いなしに続ける。

「いや本当にごめん! そんなに気にしてるとは思わなかったんです!!」

「は、はい?」

直もまくしたてて謝る俺に、最早呆氣にとられている坂上さん。

「許してくれとは言わない! だけど、悪気がなかったことだけは分かってほしい!」

言い切ったのち、静寂。今聞こえてくるのは、部活動中であろう運動部の声と体育館履きのゴム底と体育館の床が奏でるキュツ、キュツという音だけ。

「あー、その、なんだ……」一通り謝りとおしたそんな俺に、バツが悪そうに髪の毛をいじりながら言う。「別に怒ってもないし、傷付いてもない。はじめから気にしていないし」

「……え?」

なんですと? つまりそれは、君の心をそう受け止めたのに僕の勘違いという事か!?

うわぁおい恥ずかしすぎることにちゃったよ! 絶対トラウマになるよこれ!!

「………」

「………」

沈黙の時間が流れる。最近、同じ様なシチュエーションが多い気がする。

「……プツ」

沈黙の末、堪えきれなくなったのか、坂上さんは吹き出した。

「アハ、アハハ……」

そして一度吹き出したら止まらなくなったのか、声をたてて笑い始めた。

「わ、笑うなよ」

凜とした笑い声を聞きながら、顔が熱くなつていくのを感じながら俺はそう言う。

「アハハ、いや、悪い悪い。クツ……アハハ……」

坂上さんは謝りながらなんとか笑いを堪えようとして、それでも喉でクツクツと笑っている。

……何だか首を吊りたくなってきた。

「だから笑うなって……」晴れ渡った青空とは裏腹に、この体育館裏よりしく暗く消え入りそうな気持ちのまま、俺は早く終わらせて帰ろうと思って先を促す。

「……それで、用件は？」

「いやなに。ただ仕事に関わる人間がどんな人間性をしているのかを知りたくてね」

坂上さんは目元を拭いながらそんな事を言う。泣くほど面白いがこの俺の醜態は。つか学校の委員会ごときを仕事って……。

「……で、俺の人間性とやらはどうなの？」

「いやあ、君はとても愉快で面白い人だ」坂上さんは先程の笑っていたときとは違う笑顔を浮かべる。「これからの仕事が、実に楽しみだ」

……なんというか、笑顔が綺麗、もしくは可愛い人つてずるいと思う。東然り、この人然り。そんな笑顔を見せられたら、なんだか色々許せてしまいそうだ。

（ん？）

そんな笑顔をばーっと眺めながら、一つの疑問が浮かんだ。

（ここに俺を呼び出したのが坂上さんだとすると、あの手紙を書いたのも坂上さん……？）

こんなサバけた印象をしてる人が、あんな俺の心の柔らかい所を

突く手紙をか？

いやでも昨日人は見た目じゃ判断できんと学んだばかりだし……。ええい悩んでいても仕方がない。聞いてみよう。

「なあ、その手紙書いたのって……坂上さん？」

また笑いがぶり返してきたのか、あさつての方向を向いて笑いを堪えている坂上さんに訊ねる。

「ああ、それは私が書いた物だが、」ああやっぱり人は見かけじゃ判断できない——「桐垣に君を呼び出すにはそうするのが一番だと言われてやったものだ。私が単独で君を呼び出すのなら直接言って呼び出す」わけじゃないのね。

つか、やっぱり桐垣か……。あの手紙の原案。

（という事は……）

どこかで桐垣が見ている筈だ。新聞のネタにするために。

そうと分かった以上、俺がとるべき行動は一つ。

「え」と、とりあえず坂上さんの用件はもう大丈夫？」

言いながら、何気なく辺りを窺う。

「ああ。貴重な放課後に時間を取らせてすまなかった」

この辺りで身を隠しつつこの体育館裏を見渡せる場所は、体育館の屋根か体育館の正面入り口の面の壁の影だけだ。

「いや別に大した用事もなかったし、いいさ」

体育館の屋根はまず不可能だから、いるとすれば後者。

「そう言ってもらえると助かる」

そつと正面入り口の方を窺う。ほんの少し、学校指定の黒い手提げの鞆が壁の影からはみ出して見える。

「いいって。それじゃあ、また明日」

やはりか。ここから奴の所まで大体五、六メートルといったところ。この距離ならば奴を捕らえられる。

「ああ。また明日」

坂上さんの返事を聞くと同時に振り向き、一步目を踏み出す。あちらもこちらの行動に気付いたのか、見えていた鞆がフワリと浮い

た。

「逃がすかつ！」

小さくつぶやき、正面入り口へと続く角を曲が

「それはこっちの台詞です」

った所に、

「えっ？」

東がいた。しかも背後に黒いオーラをみなぎらせ、極上の微笑みを携えた状態で。

「えっ？ 何故にお前が——」

ここに、と続ける前にガシツと肩を掴まれた。

「功司くん」

そして猫撫で声。この上なく優しい声なのに、まるで地獄から響く唸り声のように聞こえるのは何故だろう？

「うふふふ……」

いや、今はきつとそんな事を気にしている場合ではない。この妖しく、恐ろしく笑っている東をどうにかすることが先決だ。

「な、なあ東。お前はこんな所で一体何を——」

「功司君こそ、こんな所で何をやっているんですか？」

とりあえず話しかけた俺の発言を遮って質問に質問で返す東。

「えっ、なについて言われても——」

「まあ、」

またしても俺の発言は遮られる。

「まあ、どうせ、大した用事もない、功司君のしていた事ですから、まともな用事ではないのでしょっけど」

…… なにか引つかかる言い方だな。

東は段々と俯いていつている。

「あの、東——」

「どうせ、久しぶりに再会した幼馴染みとの昼食の予定なんて、取るに足らないどうでもいい大したことのない用事ですものね？」

—— えっ？ 幼馴染みとの昼食の予定……？ あれ、なにか引つ

かかるような……？

「……あつ」

そこで突如、俺の脳内に激動の朝の記憶がフラッシュバックされる。たしか、東に昼食を奢る約束を（強制的に）結ばせられたような気が……。

東は俯いたまま大きく息を吸い込むと、

「どうせ！ 教室で功司君が戻ってくるのを待ってたり、構内を探して回ったの私の苦勞もぜ〜んぶどうでもよくて頭の片隅にも残らなくて全く取るに足らなくて一円の価値もないごみ屑同然の大したことのない事ですからね！！」

一息にそう捲し立てて、プイッとそっぽを向いた。

なにもそこまで言ってないんだが……。

とは思ったが、言わないことにする。多分、ここでその台詞をいったら俺の生命が消滅する。この世界から。だってなんかすごいオーラ纏ってるもん、この娘。どこぞの戦闘民族みたいに。

ともかく、俺が今しなければならぬ事は、謝る事だ。

「あゝ、その、東。すまん、約束の事すっかり忘れてた」

というわけで素直に頭をさげる。こればかりは俺が全面的に悪いからな。

一方のそっぽを向いている東は、肩越しにこちらをちらりと見て、

「……本当に悪いと思ってる？」

と一言。

「ああ。すまなかった。今回の事は俺がすべて悪い」

「じゃあ、」東はまだそっぽを向いたまま続ける。「今度の機会、街の案内をして」

ああ、それくらいならお安い御用――

「功司君の全面的奢りで」

じゃねえ。なんだ全面的奢りって？

「主に食事代とかその日に使うお金」

それを全面的に俺に持てと……？

「いや……それは……」

「功司君を待つてる時、すごくさびしかったなあ……」  
無理だろ、と続ける前に東がまたもや喋りだす。

「そのあと功司君を探してる時も、すごく不安だったなあ……」

「あの、東……？」

「まだこの学園に慣れてないから、すごく気を遣って疲れたし……」  
「おい？」

俺の言葉を見殺しして、淡々と話をする東。しかも時折鼻をずずつと囁く音まで聞こえる。

「なのに、功司君ときたら、私との約束なんて忘却の彼方で、楽しみにしてた私を弄んで……」

あ、なんかやばい予感がする。多分この付近にいる桐垣に聞かせたら、100%俺の明日が危なくなるような——そんな、予感がするんだ。

「私の踏みにじられた純潔を——」

「ストップ！ 東ストップ——ッブ——」

東の口を後ろから手を回して塞ぐ。

ヤバイ。今の台詞、桐垣に聞かれてないよな？ 聞かれてると非常に俺の日常が危ない。つかこいつを止めないと取り返しの付かない事になる。……よくよく考えてみると、この二人の立ち位置も大分危ない気がするが……。

「わかった、今度の日曜日、街案内してやる。金も全部俺持ちでいいから！ だから、頼むからそれ以上喋らないでくれ——」

東の口を塞いだまま、そう懇願する。

そして、東が頷くのを確認してから俺は口を塞いでいた手を取って離れる。

振り返った東の表情は極上の微笑み。

「それじゃあ、お昼食へに行こー！ あ、その前に功司君の鞆を取りに行かなくちゃね！」

さっきのめそめそとした口調とは打って変わってめちゃくちゃ明

るい声で喋る東は、さつとまた俺に背を向ける。そして「ふふふ…計画通り…」とボソツと呟いて歩き出す。

……やっぱり狙ってやってたのか、こいつは。俺は溜め息をして、そう思いつつ東の後を追った。

「ははは。本当に愉快な人だよ、君は」体育館裏に残っている薫は、肩を落として心底疲れた様子で淫亜にトボトボとついて行く功司を見ながらつぶやいた。「だからこそ、君も彼をネタにするのだろう？」

そして、先程功司が立っていたすぐ横の草むらに向かって話しかける。

「ほう、俺に気付いていたのか」

すると、そこからコンパクトなデジタルカメラを首から下げた桐垣がひょっこりと現れた。

「普通は気付くぞ、そんな所に隠れていたら」

「だが気付かない奴だっているぞ。矢城のようにな」

「つくく。それもそうだな」

桐垣が隠れていたのは、先程功司が立っていた所の、一步右に行ったところにあるすぐ近くの草むら。はつきり言って気付かないほうがおかしいくらいの近距離にいたのだ。

「鈍いな、矢城は」

「いや、それもあるがあいつは少し物事を重く考えたり深く考える癖があるんだ。恐らく俺が隠れているのは体育館の屋根か壁の影だと思っていたのだろう。よって、俺が隠れていた場所は奴の癖を読んだ上での絶対に見つかからない場所だったのだよ」

澄ましてそう言う桐垣に、薫は軽く笑った。

「よく知ってるんだな。矢城のこと」

「人間観察は得意なのだよ」桐垣は空を見上げ、明後日の方向を向く。「ま、それに一応以上でも友達というやつだからな。あいつは」

「なるほど、ね」

（結構好かれる奴なんだな。矢城は）

緩やかな風が吹いた。

薫はなびく長い髪を押さえ、目を細める。

（まあ、私自身もあいつのことは嫌いじゃないし。でも、）

自分には、やらなくちゃならない事がある。最後までやり通すと決めた事がある。

（難儀だなあ）

つくづく自分は不器用だ。そう再認識できた。

「それでは、俺はここで失礼させていただくよ。貴重なネタを撮らせてくれてありがとう」

桐垣はデジタルカメラを片手に、薫に向き直る。

「いや、こちらこそなかなか有意義な時間だった」

薫も考えるのをやめて、桐垣に意識を向ける。

「それでは」

「ああ」

それだけの簡単な挨拶をして、桐垣は薫に背を向けてこの空間から去っていった。

「ふう……」

一人体育館裏に残った薫は独りごちる。

「まったく、これからどうなることやら……」

一方――

「ま、待て！ それは流石に――」

「だって、さつき功司君いったじゃない。『全部俺持ちだから好きなだけ好きな物を食べな』って」

「言ってない！ いやホント一言も言っていないからねそんな事……」

時はお昼時、場所はある喫茶店兼ケーキ屋。値段は学生価格、

その割には十二分な味を誇るという学園の女子には人気のお店。で、そこに俺と東。

「あ、すいませ〜ん。あとこのモンブランとチョコシフォンを下さい」

「だから待てと——!!」

東は先ほどから本当に食べきれなのか？と疑ってやまない程のケーキを次々に頼みまくっている。たしかこのモンブランで合計8つ目だ。

「う〜ん、おいしい〜!」

俺の目の前には幸せそうにケーキをほうばる東と、机に積まれた空の皿と、次々に足されていく伝票。

「功司君は食べないの？」

もぐもぐと咀嚼しながら喋る東。ちゃんと飲み込んでから喋りなさい。

「じゃなくて!!」

いったいいつになったらこいつの腹は満たされるんだ？ お前の胃袋はブラックホールなのか!?

「あ、これもおいしい〜」

「人の話を聞けっ!!」

ああ、もう俺の財布の中身が東式胃袋型ブラックホールにケーキとなってどんどん吸い込まれていく! だれかこの人止めてえ!! 「ほおら〜。功司君も食べなよ〜。はい、ア〜ン」

ハヴァツ! ……ここで東の誘惑だとツ!? ばかな、ありえん——!! そんな事されたら……そんな恍惚とした表情に魅せられたら……。

「すいませ〜ん。このチョコレートケーキ下さい」

「もう好きにして……」

矢城功司、撃沈。記録、ケーキ九つ。敗因、東印の誘発式微笑み核爆弾。

そして次の日、第二次矢城功司討伐戦勃発。

燃え尽きたぜ……真っ白な灰に――

## 第二章：誘われて遊園地

五月六日、午前八時三十分。降り注ぐ日差しがとても穏やかで柔らかく、これこそ春だというような快晴の青空。吹く風も冷たすぎず暖かすぎずといったなんとも昼寝日和な温度。そんな休日の朝はゆつくりと惰眠を貪るのをポリシーとしている俺は、たった今春風駅に向かうため家を出るところ。

さて、何故にそんな俺がこんな普段なら絶対に起きないような時間に出かけようとしているかというところ、その説明はまたもや回想で語られることになる。

というわけで、回想へ――

「なあ東」

「ん？　なあに、功司君？」

件の第二次矢城功司討伐戦も過去の事となり、約一週間が過ぎた。戦いの傷が癒えるまでもなく体育の授業へと赴く度、明らかなる殺意を込めて俺にファールをしかけてくる奴ら。そんな事にも慣れてきてしまったのは果たして喜ぶべきなんだろうか、と悩んだ今日のバス<sup>バス</sup>テ<sup>テ</sup>体育も終わり、今現在三時間目と四時間目の狭間の休み時間。俺一人だけ早く着替え終わってしまい、更衣室から教室に戻るときに東に遭遇した。そこで俺は東に気になっていた事を尋ねてみることに。「お前、この前俺に街を案内して欲しいって言ったとき、次の機会に〴〵みたいな事を言ってたけど、それは具体的にいつがいいんだ？」

「そうだねえ……」

東はうゝん、と顎に手を当てて考える仕草をした。

「じゃあ、ゴールデンウィークの……五月六日は？」

「うん。その日なら俺も暇だし大丈夫だ。親には友達の家泊って

くるって言うてくる。」

そんな事を即答したのは俺ではなく、いつの間にか現れて何故か東の手を取っている龍鷓。

「……どこから湧いた、龍鷓」

「人を虫みたいに言うな」龍鷓は俺の方を振り返ってツツコミをいれると、すぐさま東の方へと視線を戻した。「で、ご両親にはどんなお土産を持っていけばいいかな？」

「色々言いたい事がある。その内の一つを問おう。いつお前が東の家に行って親御さんに挨拶したりしなきゃいけない関係になったんだ？」

「ちよつと。さつきからうるさいよ、功司」

いやうるさいもなにも、東を見てみる。お前のいきなりのキモ行動についていけないぞ。というかキモがつている。

「なあにを言うのさ功司。男の嫉妬は醜いぞ？ それにキモがつてなんかいないよね、涅亜ちゃ——」

東は、再度俺の方を向き、そしてまた自分に振り替えた龍鷓とあからさまに目を合わせようとせず、明後日の方向を見ている。

「氷室君……その、ごめんなさい。私には——」

宙空に向け叫んでいる龍鷓の事を飽くまで見ようとしなくて、現実を見ようとしないう龍鷓に向けて彼女は現実を——

「——私には、功司君という心に決めた人がいるの」

突きつけ——っておい。なんだその誤解してくださいと言っているようなセリフはっ。

「そ、そんな……二人は、もう——」

「ええ。功司君と私はもう親同士が顔を会わせ合う仲なの」

確かに、百歩譲って、確かに俺と東の両親はよく一緒に飯を食べたりする仲だ。それは認めよう。だが、お前の言い方はまるで俺達既に婚約済みみたいなノリだぞ？

東の一言を聞いた龍鷓は一瞬間停止。そしてその時間停止が切れると、ギギィー、という音を立てながら俺の方へと振り向く。変

なオーラ纏って。

「コノ男、モウ殺シチャツテモイイカナ？ ……カナー！」

「……男の嫉妬は醜いぞ、龍鵠」

さて、なんとなく流れに沿ってこのセリフを言ってみたのだが…  
…なにか、違う気がする。なんとなく、本当になんとかなくね？ …  
…俺、爆弾に火をつけてしまったのかも。

「そうは思わないか、桐垣……」

「ああ。お前は立派だったよ。……恐らく、そのセリフはいま東さんが言ったことを、お前の考えているのと違う意味で肯定していると捉えられている」

いつの間にかに俺の右隣に立っていた桐垣に尋ねてみたところ、俺の予感は見事的中。だってさ、なんかこの辺の空気違うもん。殺伐としていて、さらにドロツとしているような感じ、するもん。龍鵠を中心に。

「まあ頑張ることだな、矢城功司」

「死んだらお墓は海が一望できる岬に作ってあげる」

さらにいつの間にやら現れた坂上さんと天笠さんにまでそう言われた。

……俺の周りの人達って、なんでこうも神出鬼没なのだろう？

「ヨソミヲシテイテイイノカナ、矢城功司ヨ」

しかも前方になんか展開してる奴がいるし。

「フフフ、オソレテ声モデナイカ。ダガ、本当ノキョウフハコレカラダー！」

その喋りやめい。せめてカタカナで統一しろ。なんで微妙に漢字のところでカタカナのところがあるんだ？ 恐怖とか。

「喰ラエ！ 『妄想結界』、——無限ノ妄想——！！」

「聞いちやいねえし……」

龍鵠を中心に渦巻いている殺伐でドロオッとした空気が俺を取り囲む。その空気に体をなぞられた瞬間、まるで巨大な動物の舌で全身を舐められたような悪寒が走る。マジでキモい。

一方でそんな俺と龍鵜を華麗にスルーして話をしている他の面々。  
「ところで、矢城君となんの話をしてたの？」

「えと、今度街を案内してくれるって功司君が言うから、それをいつにするか話してたの。それで、ゴールデンウィークの五月六日にしようって決まったの」

天笠さんに問われ、返答する東に少し遠慮がちに話す坂上さん。

「……なあ、それに私も邪魔していいか？」

「え？ うーん……」

「あ、私も」

「（まあ、功司君とはまた別の日にでもいけばいいか）うん、いいよ。みんなで遊びに行こう」

天笠さんも加勢に入り、東は結局二人の同行を認める。

「ほう、ならばここに俺が独自のルートで手に入れた遊園地のフリーパス六人分があるぞ」

「じゃあそこに行こうか」

桐垣は自分が同行するのが当然のようにそんな提案をし、東が即了承。

「あ、でも待て。六人分って事は、私、東、天笠、桐垣、矢城で行くんだから一人分余るぞ？」

一同、頭を抱える。

「ボクハココニイルヨ」

「うーん、誰か呼びたい人がいる人？」

無視。

「ボクハココニ——」

「いや、特にいないな」

無視。

「ボ——」

「まあ、一人分くらいいいか」

更に無視。

「……………」

……運命は時に厳しい。

「チクシヨ〜〜！！　モハヤコノ傷ヲイヤセルノハキサマノ血ノミ  
！！」

「だからその中途半端な喋りをやめると言ってるだろう！　読みづ  
らいんだよ！！」

こうして、矢城功司VS氷室龍鶴（怪）の妄想の対決の火蓋が  
切られた。

「それじゃ、五月六日の九時に春風駅で」

こっちは平穩に約束された。

で、今に至る。

「ん…………くはあ」

俺は一度大きく伸びをして、暖かに降り注ぐ陽光を全身に浴びさ  
せた。いやはや、こんなに気持ちのいい日になら早起きしてみるの  
も悪くないな。

さて、それではそろそろ行きますかね。

そう思い、恐らく——というか100%東が待っているであろう、  
矢城家と東家に挟まれた道路へ出る。

「おはよ。功司君」

そして当初の予想通り、道路へ出た途端に声をかけられた。

「おはよう、東」

挨拶をしながら一つの疑問が頭に浮かんだが……まあ、こいつが  
どれくらい前からここに立っていたかはもう聞かない事にしよう。

きっと途方もない時間を言われるに決まってる。そして、それを盾  
に様々な無理難題を言われるに違いない。

「？　どうかしたの？　功司君」

「いや、なんでもない。ただ、今の考えが果たして自己中心的な考  
えかどうかを思考中だっただけ」

「ふう〜ん？」

東は俺の言いたいことがいまいち分かっていないようだった。ていうかこれだけの説明で俺の思考を読める奴はきつとエスパーだ。

「じゃ、遅れる前にそろそろ行こっか」

「そうだな」

俺は自分の考えについて思考するという行動をやめて、東の言葉にうなずき、二人一緒に歩きだした。

俺の家から現在の目的地、春風駅までは歩いて大体二十分くらい。学園とほぼ同距離だな。駅までの道も途中までは通学路と同じだし。

「なあ、東」

「なあに？」

そして高校生（とは言ってもこの辺りにある高校は秋葉学園だけだが）御用達の布由木通りにさしかかり、そろそろ通学路から逸れる所で一つの案を思いついた。

「今軽くこの辺説明するだけじゃ駄目か？ 街案内」

そう、先ほど東が言っていたのだが、なにやらこの娘はまた別の日に俺に案内を頼むというのだ。しかも当然のように全額俺持ちでそんな事は俺の都合（主に財政面）が良くないのでどうにかして避けたい。で、この疑問提唱を行った所以。

だが答えは分りきった事。

「だあめ」

そう、恐らく一万円相当のスマイルで言われてしまった。そんなスマイルを見せられた男は、ほぼ100%の確率で反撃不能&戦闘不能になってしまう。くっ……女ってずるい。そして男って哀しい……。

俺は溜め息と共にがっくりと肩を落とした。

「ふふふ……安心して、功司君。また別の日にたあ……っぷり付き合ってあ・げ・るから」

さて、ここで俺になにを安心しろというのだろうか。むしろそんな甘ったるい声でそんな事を言われると、別の意味で期待をしてし

まうのが漢という哀しい生き物なんだが。

俺はもう一度溜め息をつき、駅までの道程を少し早歩きで進む。

春の陽気を全身に吸収しきったと思われる頃、俺たちは春風の駅前に到着した。途中に遅れそうだと思っただので少し早く歩いてきたが、到着してみればまだ八時四十五分。約束の時間まであと十五分もある。

——今日の集合場所となっている、ここ奈津菊市にある唯一の駅、春風駅。それなりな都会にある駅なので、駅前にはバスのターミナルや喫茶店、駅ビルにファーストフード店など若者向けの施設が揃っている。そして休日の駅というのはほぼ例外なく混んでいるもので、この駅もその常識に外れずに混みあっている。休日、それも連休の真っ只中な今日。そんな天気もよく絶好の遊び日和な日柄のためか、俺たち以外にも待ち合わせをしている人が多いようだ。

「さて、この中からあいづらを探すのは少し骨が折れるかな」

それともまだ誰も来てないか？

と、周りを見回しながらそんな事を考えていると、ポケットから振動が。ポケットに手をつ込み、振動源の携帯を取り出す。

「えーと、電話か」ポケットから取り出した携帯のディスプレイを見てみると、知らない番号からの着信だった。「——もしもし？」

「あ、でた」

いや、普通電話がかかってきたらでるだろうよ。

「どちら様で？」

「私」

いや、私って……。でも聞いたことある声だな……。誰の声だっけ？

「私は私。天笠楓」

「ああ、天笠さん」

たしかに、電話特有のくぐもった声ながら天笠さんの声だな。で、何用？

「今どの辺にいる？」

え〜と、駅前……だけじゃ曖昧すぎるか。

「駅前の喫茶マザーズキッチンの前、かな。天笠さんは？」

「あなたの後ろ」

「うわっ!？」

突如後ろからかけられた声にマジでビビる。心臓は驚きすぎて激しく暴れだす。振り向くとそこには天笠さん。いつの間に俺は後ろを取られたんだ……？

「おはよう、二人とも」

当の天笠さんは何食わぬ顔で挨拶をしてくる。

「おはよう天笠さん」「お、おはよう……」

俺はまだ暴れている心臓をどうにか抑えるように努めながら少し震える声で挨拶。東はまったく気にも留めずに普通に挨拶。お前の心臓はジャングルか？

「いつの間に、後ろに……？」

「あなたが電話に気をとられてる隙に」

ちよつと待て。何故に隙を伺うのだ？ そんな命を狙われる事をした覚えは……あつ。もしかして龍鶴推薦した事まだ引きずってる？

「乙女心というものは男には理解できないものなのだよ、矢城」

「のわっ!？」

後ろから桐垣にいきなり話しかけられ、本日二度目の心臓タップダンス。つかマジでみんな気配消すの上手いね……。おかげで俺は寿命が縮みまくりだよ……。

ザリッ、ザリッ……。

抑制不可能な状態の心臓をどうにかしようとしていると、後ろから明らかに不自然な足音。どの辺が不自然かというと、足音を消そうとすり足気味に歩いているせいで地面をする音が余計な程大きいところ。

「お前は下手すぎるんだっ!」

「へブッ!」

そんな歩き方をするのは龍鶴しかいない。そう判断した俺はタイ

ミングを見計らい、計8回目の『ザリツ』という音が聞こえた瞬間に振り向きボディーブロー。狙いは変わらず後ろに忍び寄っていた龍鵠の腹に命中。

「うわ。中々やるね、君も」

「どわっ!？」

そして振り向けばそこに坂上さん。本日三回目の心臓ブレイクダンス。息も弾みまくり。つか龍鵠は陽動だったのか。

「ハアー、ハアー……」

「うわあ。功司君、朝から元気」

朝から誤解されるような発言は控えろつ。あつ、くそ、息切れし過ぎて上手く突っ込めない。

「さて、全員+αが揃ったところでさっさと行くか」

まだ息の整えられない俺とダウンしている龍鵠を置いて、場を仕切る桐垣。

「そだね。電車何時発？」

「あと五分で出発、といったところか」

桐垣は腕時計と時刻表らしき紙とを交互に見比べて言った。

「じゃあ少し急いだほうがいいね。——走ろう」

天笠さんの提案に俺と龍鵠を除く一同頷き、走り出す。って、え？ 満場一致の即決で走るの決まりですか？

「ちょ——今から走っても——」

間に合わないだろうという声を出す前に、すでにみんな人垣に紛れて見えなくなってしまった。ていうか、まだ八時五十分だよみなさん？

「はあ、かつたる……」

そんな声も当然届いてないだろう。そう判断して、仕方なく俺も駅の券売機を目指して走り出す。まだに倒れている龍鵠を無視して。

俺達が今日行く予定になっている遊園地『フロートアイランド』

は、春風駅から4駅下った辰見沢駅から歩いておよそ十分程度の所にある、それなりに大きな遊園地だ。『Float Island』、直訳して『浮き島』という名前とは裏腹、水を使っているアトラクションはスプラッシュマウンテンぐらいというよく分からない辺りがなぜか有名で、秋葉学園でも遊園地といえばここを指すらしい。名前になんか他の意味でもあるのか？

まあそんな疑問は置いておこう。深く追求しても意味はなさそうだし。

そんなわけで、電車に揺られること約二十分、俺達は辰見沢に到着した。

「で、こつから遊園地までどう行くんだ？」

改札から人ごみのやかましい駅前へと出て、俺は誰ともなく尋ねてみた。

「えーと、たしか……」

「この道を真っ直ぐ行って三番目の十字路を右に曲がってそのまま200メートルくらい進んでそこにあるT字路を左の曲がっていったところ」

俺の質問に答えようと遊園地までの道を考えて言い淀んだ坂上さんを遮り、一回の息つきもなしにかなり詳細な道順をすらすらと述べる天笠さん。

「……詳しいんだな」

「常識」

……そうなのか？ 秋葉学園の生徒ならこれは常識の範疇なのか？ いやでも坂上さんすらすらと答えられなかったし……。

「早く行こ」

そんな疑問について考える隙を与えてはくれず、みんなを急かす天笠さん。

「そうだね。早く行かないと混みそうだし」

東の言葉に一同頷く。

うん、確かにな。遊園地は午前十時開園。そして現在時刻午前九

時三七分。駅から遊園地まで歩いてかかる時間は前述の通り。この連休真つただ中、お出かけ行楽日和の今日という日に遊園地なんていうレジャースポットが混まない訳がない。たとえ開園前に着いたって早すぎるということはないだろう。

「じゃ、走ろう」

「何故に!？」

「早いに越したことはないんでしょう？」

いや確かにそんな感じのこと言っただけさ……。というか、先ほども走ろうと言いつ出したのは彼女だし……。もしかして天笠さん、遊園地とか大好きな人？」

「よし、遊園地まで競争だな」

ちよつと待て桐垣――

「私に敵うと思っているのか……？」

え、坂上さんまで――

「あはは。楽しそう」

あ、東……。お前まで――

「はゝはつはゝ。怖気づいたのか、功司――！」

どこから湧いた、龍嶋。

「……負けない」

そしてきつかけとなった天笠さん、なんでアナタはそんなに闘志を滾らせてるの？

「それでは――よい、ドン」

桐垣の微妙に語尾に力のない合図で走りだす、天笠さん以下俺除く五名の友人達。……みなさん周りの目とか気にならないんですか？

「それとも俺の方がネジが足りないのか？」

青空に尋ねてみた。――返事がない。ただの青空のようだ。

「やっぱ俺もズレてるのかも……」

はあ……。俺は本日多分四回目の溜息をついて、どんどん背中が遠くなつていく愛すべきクラスメート達を追うべく地面を蹴った。

## 第二章：2 危なげな観覧車？

「さて、まずはどれに乗ろうか」

駅から遊園地までのレースも無事に終了し（ちなみに結果は一位天笠さん、以下桐垣、坂上さん、東、俺、龍鷲の順）、そのレースのお陰で（と言うべきなのだろうか？）見事に開園十五分前に俺達は入場口まで着いた。入場口にはまだ人はまばらで、俺達のような高校生のグループや親子連れ、若いカップルの群れが何組かあっただけだった。その内の何組かはチケットを買うために券売所に並んでいたが、俺達は事前からフリーパスを持っていたので、券売所には行かずそのまま入場ゲート前に並んだ。そして待つこと約十分、いよいよ入場口が開門。俺達はそれに伴い入場して、すぐ近くにあった広場で会議を開催し、これからの計画を練っているところ。

「やつはまず絶叫系でしょ」

「いや、ここは渋くコーヒークップで——」

というわけで今現在己が乗りたいアトラクションをあれやこれやと言いつけている。俺は傍観者ならぬ観覧者を気取ってその様子を一步引いた所から見ている。やれやれ、人間のエゴというのはかくも卑しきものだ。

「功司君はなにか乗りたいのいないの？」

「ん、俺？」

そんな会議から東が一旦顔を外して、俺の意見を求めてきた。お東よ、この俺までもをエゴの飛び交う渦中に巻き込もうと言うのか。やめるんだ、俺はまだ汚れたくない——と、いつもなら言うところだが、今日今この時にそんな発言をするのは無粋というもの。ここは俺も自らのエゴ振りかざすことにする。

「ああ、俺は——」

「功司君も私と一緒に観覧車がいいって〜」  
「は？」

東は俺の返事など待たず聞かずに会議中の面々に振り向き、そう言う。

「功司君もだ遊園地で最初に乗るのは観覧車が常識だ〜って今熱く語ってくれたよ」

ちよつと待て、それはどこの世界の常識なんだ。そもそも俺は観覧者気取りではあったが観覧車がいいとか一言も――

「む……ならば観覧車二票、ゴーカー一票、メリーゴーランド一票、ジェットコースター一票、コーヒークップ一票で観覧車に決定か……」

会議において司会役だった桐垣は、それを中止させ、残念そうに言う。ていうか票バラけすぎだろ。さっきの満場一致の意思は一体何だったんだ？

「なら最初は観覧車に乗るしかないな」

って今はそんな事を考えている場合じゃない。現在の最重要ポイントとは、なんか俺の意思が東によって勝手に決められて、尚且つ観覧車に乗るという方向に話が進んでる事だ。俺、実は観覧車とかなんか落ちそうで怖いと感じてるんだ。だからなるべく避けたかったのに……なんでよりにもよって最初からなんだ！？

「ちよつと待ってくれ、俺は観覧車に乗りたいなんて一言も――」

「さ、功司君。あつちに観覧車があるみたいだよ」

再び俺の発言を遮り、東は俺の腕を掴んでぐいぐいと引っ張ってゆく。引き剥がそうと抵抗してみたが、掴まれている所の感覚がなくなるほど強く掴まれているため効果なし。つかこいつの細腕のどこにこんな力が！？

「まったく、気の早い奴らだ」

そんな誘拐犯に連れ去られる子供の気分な俺の事なんか気にも留めず、東の後についてくる愛すべきクラスメート達。

引きずられていく最中、一つだけ分かったこと。それは、会議が始まってからの東の一連の行動はすべて計算の上で、俺は気を使われたように見えてまんまと利用された、ということ。畜生、人間っ

て汚い……！！

引きずられること約三分、俺達一行は観覧車の前に到着した。

「さて、それじゃあ早速——」

「待たれい東殿——」

到着してやっと俺の腕を放してくれた東が（あ、ちょっとあざになつて……）観覧車へと足を踏み出したのを、何故か語調が古風な龍鵠が立ちはだかって止める。

「なに？」

いきなり目の前に現れた龍鵠に少したじろぎながら何事かと尋ねる東。

「諸君、この観覧車のゴンドラを見てもらおう。そう、どこからどう見ても最大4人用の大きさだろう？　ということは、人数が四、二に別れてしまう事は必須！」龍鵠はゴンドラを指差し、そして再び俺達へと向き直り言葉を紡ぐ。「そんな事になったら二人で乗ったやつらが色んな意味でおかしな空気になる事間違いない！」

うん。ただでさえ観覧車は辛いつていうのに、さらに龍鵠と二人つきりつていうのはかなりキツイな。是非とも避けたい。

「……で、だからどうした？」

龍鵠はさらに変なポーズまでキメて、こちらをビシッと指さす。

「なればこそ——！　俺が事前に作って持ってきたこのクジにてペアを決め、それに二人づつ乗れば問題解決——！」

熱く語る奴の手にはどこから出したのか、先端に1と3の数字が書かれた木の棒六本が握られていた。用意周到なこと——ていうか。

「結局二人つきりになるんじゃないか」

「大丈夫！　赤信号、みんなで渡れば怖くない——！」

用法が激しく間違っていると思うのは俺だけか？

それはさておき、大体龍鵠の企みが見えてきたぞ。単純思考な奴

のことだ。恐らくこの機会に女の子と一緒にってあわよくば——  
みたいな発想だろう。

「皆にはこのクジを順番に引いてもらい、全員に行き渡ったところで一斉に結果を見てもらう。そして同じ番号の人とペアでアトラクションに乗ってもらう。これは一つのアトラクションごとに引いてもらうからな。なお、一度決めた事は覆せない。それを念頭に置いてもらう！」

なおテンション高くそう提唱する。……なんかこの意見はすでに可決されたものとして話が進められているのだが、皆さんの反応は？

「任せる」（桐垣）

「どちらでも」（坂上さん）

「いいよ」（東）

「構わないわ」（天笠さん）

ということとは、俺がどう反応しようとその意見は可決のようだならばこの状況に流されるとするか。

「それじゃあみなさんこのクジを……」

龍鶴は木の棒の数字の書かれた方を握って俺達の方へ差し出す。

「じゃあ私から」

それを天笠さんが一本引き抜く。続いて、桐垣、坂上さん、東、俺とレースの順位通りの順番でクジを引いていく。

「それでは、この観覧車の同乗者は——！！——」

そして、全員にクジが渡ったところで、龍鶴の一声。一同、クジに書かれた数字を確認する。さて、俺の相手は——

ビュオ——

俺達が乗り込んだゴンドラは、ゆつくりと高い位置まで上っていく。それに伴って景色もだんだんと高くなっていき、それに比例して俺の足元も冷えていく。そして、今は園内全体とはいわず、辰見沢駅までが見渡せる。ここから見える風景は遊園地のそこかしこに

植えられた草花や、いろんな所に生えている桜の木などの春の鮮やかな彩りに溢れていて、見ていただけで心が和むような、そんな素晴らしいものだった。

だって言うのに。

ヒュオ――

なんでこんなに空気が重く、風の音だけが響く虚しい雰囲気がこのゴンドラの中には溢れているんだ？

考えられる原因その1：俺が一言も喋らないから。

考えられる原因その2：加えて同乗者が龍鵠だから。

「……………」

「……………」

果たしてどちらが主な原因だろうか？

龍鵠はクジの組み合わせが決まってからずっと黙ったまま。そして俺もゴンドラに乗り込んでからずっと黙ったまま。……結局二人ともが主な原因だな。

「功司」

「ん？ なんだ？」

不意に、今まで黙りっぱなしだった龍鵠が口を開く。

「俺はな――」

龍鵠は一旦そこで言葉を切る。うつむいたまましばらくの沈黙。

そして、俺の目をしっかりと見据えて、

「俺はな、女の子と二人つきりになるためにこの案を、ここに来ると決まった時から考えていたんだ」

だろうと思ってたよ。お前なら絶対そうだよな。

龍鵠は一度大きく息を吸って、吐く。

「なのに、」若干の溜め。「なのに、なんでお前なんかと一緒にになきゃいけないんだ――！！！」

そして、俺の襟首を掴みに詰め寄って来る――って待て！ お前、そんな激しい動きをする――！！

――グラグラガクガク――

予想通り龍鷓の動きに合わせて激しく揺れるゴンドラ。ちなみに現在のゴンドラの位置はちょうど頂上付近。これから下りに入るという俺的に一番怖いところ。

「ちょ——落ち着け龍鷓!!」

「なんでお前なんかと、お前なんかとおおお——!!」

眼前まで迫られた龍鷓に襟首を掴まれ、ガクガクと前後に揺さぶられる。ゴンドラの揺れ具合と合わさって、俺、超パニック。

「ま、まじで落ち着いてください!!」

「うるさい黙れええ!! お前なんかに、お前なんかにいい!!」

「ちょ、まじ、やめ——」

うああゴンドラがヤバいくらいに揺れる揺れる。あはは——なんかもう俺大ピンチい。

「クソ——!!」 なんで湊亜ちゃんでもなく天笠さんでもなく坂上さんでもなくお前なんだああ!!」

あ、ヤバイ。俺の平静を保つための機関にコンディションレッド発令。総員第1戦闘配備。敵は目前ぞ……

——グワングワァン——ぷち

あ、揺れる音が変わった——のと同時に俺の理性が——

「なんでなんだああ!!」

「俺だって……」最早冷静になれない、ぼんやりと霞みかかった頭で龍鷓の襟首を掴む。「お前なんかと同乗したくなかったわ——」そしてガクガクと前後に激しく揺さぶる。

「あははは——もうどうにでもなれ——」(笑)

「こーうーじー!!」「たーつーやー」

ゴンドラの揺れは激しくなる一方だったが、今の俺には関係なかった。

「……なんか、功司君のゴンドラ、すごく揺れてない？」

「ふむ、確かに」

ところ変わって、功司たちのひとつ前の、桐垣秀智と東湊亜の乗

っているゴンドラ。こちらはなんの滞りもなく平和に外の風景を眺めながら、他愛のない話をして、のんびりと観覧車本来の楽しみ方を満喫していた。

だがこのゴンドラも頂上付近に近付いた時、会話の方向がおかしななっていく。

「なんであんなに激しく揺れてるんだろ……」

と、そこで湮亜の脳内にイケない考えが浮かんだ。

（まさか――

――ゴンドラの中には静寂が流れている。それは乗っている二人ともが黙っているから。だけど、ただ黙っているだけじゃなくて、お互いがお互い共に、何かを気にしているような、なんとも言えない空気が二人を包んでいる。ゴンドラは静かに頂上付近にまでさしかかる。そこで、不意に静寂が破られる。

『やつと二人つきりになれたな……功司……』（氷室君）

『ああ……そうだな』（功司君）

二人はそう言い合って互いの目をしっかりと見据えて、

『ここなら誰にも邪魔はされないね……』（氷室君）

そう言って功司君に詰め寄っていつて、

『ちよつと待ってくれ。こんなところで、か？』（功司君）

なんて言ってちよつと恥ずかしがる功司君を、

『いいじゃないか……別に誰も見てないんだし……。それに、俺、

もう我慢の限界なんだよ……』（氷室君）

とか言ってシャツにボタンに手をかけて、

『……俺だってもう我慢なんかできないさ……』（功司君）

で、もう冷静にはいられなくなった功司君も氷室君に詰め寄っていつて、

『功司……』『龍嶋……』

お互いのよ、よよよ、洋服を――！！？）

「な、な〜んて事ないよね」

そこまで想像して、妄想という名の幻想から帰還した湊亜は渴いた笑いでその幻想を振り払った——までは良かったのだが……

「まあ多分、どちらかのリミッターがはずれたのだろう」

「つええ!?!?!」

秀智の一言でまた妄想の魔の手に捕まり、

(り、り、リミッターって……が、我慢の事……!?!? じゃ、じゃ

あじゃあ、あのゴンドラの揺れはやっぱり——)

「き、桐垣君!?!」

「? どうした、声を裏返らせたりして」

「あ、あああの、やっぱり、氷室君は、(功司君と)二人つきりになる事を狙ってクジなんかやったのかな!?!」

「ああ、あいつの性格上、(女の子と)二人つきりになる為に遊園地行きが決定した時から画策していたのだろう」

やがて堕ちていった。

「じゃ、じゃあ……あのゴンドラの揺れとか、功司君はやっぱり……」

……

ぼわわ〜ん、と再び、今度は遙か深淵の幻想の海にダイヴする湊亜。

と、その前に一つの懸案事項が脳内に浮かぶ。湊亜はそれを失礼かな、と思いながらも秀智に思い切って質問してみることにした。

「あ、あの、桐垣君も、その、そういう(功司君とか氷室君みたいな)気持ちになる事って……あるの?」

いきなりの質問に、対する秀智は若干照れながら答える。

「ん、まあそういう(女の子と二人つきりになりたい)気持ちになる事もあるな。たまにだが、な」

「そ、そっかあ……じゃああの揺れも全て理解の上なんだね……」

湊亜はもう驚くことはなく、すべての情報を幻想へのオプションに変えてしまえる状態になっていた。もう恐れるものは何もない。いざ行かん、妄想という名の世界へ。

と、そんな湮亜の意識を秀智が引き留める。

「まあ二人は普段からそういう仲（よく二人して言い合っている仲）だからな」

「……普段、から……」

「？ ああ、普段からだ。だからと言って仲が悪いわけじゃないんだがな。ただ単に矢城が突っ張っているというか、氷室がやられ役というか……」

「功司君がツンデレで……氷室君が受け専……」

幻想にオプシヨン追加。

「多少おかしいかもしれんが、二人とも悪い奴じゃないんだ。その辺は分かってやってくれ」

「……うん。愛には色んな形があってもいいよね……」

（先ほどから何を言っているんだ、東さんは……？）

一度深く考えようとした秀智だが、どうせわからないだろうから考えるのをやめた。

一方、ぽやくと顔をほんのり上気させ、若干鼻血が出ている湮亜の幻想は深まっていくばかりであった。

さらにもう一方――

「いい景色ね」

「ああそうだな」

功司達の後ろのゴンドラに乗りこんだ、坂上薫と天笠楓は口数少なく景色に見入っていた。



違う意味で声を出してしまう俺。天笠さん、普通、女の子ってこういう時驚くもんじゃ……。

天笠さんはまた無言無表情で俺の背後に着く。

さて、こんな描写をするアトラクションはもうお化け屋敷しかない訳で、俺と天笠さんは今、お化け屋敷にてゴールを目指して歩いている訳だが……なんだか気まずい。つかお化け屋敷よりも後ろにいる天笠さんの方が怖い。なんでだまったままずっと俺の後ろを歩くんだった？ とても不機嫌そうに……。

えーと、確かお化け屋敷に入りたいって言い出したのは天笠さんだったよな。俺はつい先程の、観覧車から降りた後のやりとりを思い馳せる――

俺が冷静さを取り戻したのは、確か、もう木と同じくらいの高さまでゴンドラが降りてきた頃だと思う。あの時のゴンドラ内の温度は近年稀に見る暑さだった。それから、ものすごいおぼろ気な記憶ながら激しくもつれあっていた龍鷲との戦闘は相互の理解によって不毛なものとされて停戦調停が結ばれ、何だかいい感じに乱れた服を整えて、俺達は観覧車から降りた。

「……………（ジー）」

すると、一つ前のゴンドラに乗っていて、先に降りていた東が俺達の事を妙に熱の込もった視線で見ている。なんだあの目は？ とは思ったものの、今の俺は無駄に体力使いまくり＋汗だくだったので、あまり気にしなかった。龍鷲も然りだ。

「みんな無事だね」

そのまま息を整えていると天笠さんと一緒に坂上さんがゴンドラから降りて来て、そんな物騒な台詞を吐く。……いや、あながち外れてもないか。

「さて、それじゃ次はどこへ行くか？」

先ほどの会議同様、桐垣が場を仕切ってみんなに質問をする。対するみんなの反応は、

「……………（じー）」（東）

「はあ、はあ……………」（俺）

「どこでもいいよ」（坂上さん）

「ふー、ふー……………」（龍鶴）

「……………（じー）」（東）

「……お化け屋敷」（天笠さん）

と、真面目に答えているのは天笠さんと坂上さんのみ。俺と龍鶴は戦闘の傷がまだ癒えてないため答えられないのはともかくとして、東は一体どうしたんだ？

「じゃあお化け屋敷に決定だな」

桐垣はそう結論付けると園内マップを見てすたすたと歩き出す。流されるままにほかの面々も歩き出す。

「なあ、桐垣」そんな中、俺は疲れた体のまま走って、先頭を歩いている桐垣に追いつく。「東、どうかしたのか？」

俺の質問に「うーん」と頭を捻る桐垣。

「いやなあ、俺にもよく分からないんだ。観覧車で普通に話をしてたらいきなりあんな感じになって……………」

ん？　なんか「普通」って辺りがひっかかるな……………。

「普通の話って、例えばどんな？」

「確か、頂上付近でお前たちのゴンドラが激しく揺れていた辺りから少し様子がおかしくなってたな。それで、お前と氷室について話している時にあの状態になったんだが……………」

桐垣はそう言っただけで振り向き、東を見る。東はまだ熱に浮かされているような赤い顔でぼんやりとしている。

「付き合いでいえば矢城の方が東さんとは長いだろ。そんなお前に分からないんだったら、俺にはもうどうしようもない」

「そうか……………」

ひとまず桐垣に礼を言い、俺は思考に専念する。

さて、まず東がああいう状態になった時が昔にあったかどうかを思い出してみよう。

……とはいふもの、小学生の時の記憶なんかなかなか蘇ってこないぞ。よし、こうなったら奥の手だ。

——それは精神の象徴。

精神を集中させ、自分の思い描くものをしっかりとしたものにしていく。

構成概念、用途、なぜ生まれ、使えるようになったのか。

自分の内側へ、深く深く潜っていく。

あいまいで真っ暗な自分の内側にあるものを、手探りで探していく。

——あつた……

目的のものを探し当て、それを表の世界、現世に運び出し、発現する——！

よし、いくぞ——！

——『天国への扉』——！！！！

……三行待つてあげよう。さあ、君が考えた突っ込みを入れてみるんだ！

まあ妥当なところで「お前は空中に絵が描けないだろ——！」とか「最初っからそれを東に使えよ——！」ってところか。

さ、ふざけるのは止めにして真面目に考えられますか。

あいつがあんな状態になった事か……ん、確か一度だけあったような気がする。

……あ、思い出した。そうだよ、あれは小学五年生の時の事だ——

あれはまだ俺が穢れを知らなかった小学生の頃のこと。その日は

たしか雨が降ってたな。

昼休みにて、雨の為外では遊べない俺と、仲の良かった数人の男子で大富豪（地域によっては大貧民とも）を嗜んでいた時のことだ。ゲーム開始の前に、誰だったかな、まあ俺達のグループの中の一人が唐突に言ったんだ。「罰ゲームありにしようぜ」と。

その提案に最初は嫌がる奴もいたが、そこはノリと状況に流されるままに承諾してしまうのが若さというもの。多少強引に決定されたこの罰ゲーム制度の内容は、各々が考えた罰ゲームを紙に書き、ビリの奴がその中から一枚をクジのように引いて、そこに書かれている罰を受けるというありきたりなものだった。

さて、結果から言って名誉ある第一回目の罰ゲーム当確者は室崎海斗。性格はおとなし目で、怒ったところを見た事がある人は親ぐらいあるうと思わせる程に穏やかな印象を人に与える。

……こいつの名前は忘れもしない……。俺のトラウマの一つだからな。

時は昼休み。いきなり決まった罰ゲーム制度の餌食とならない為、俺は大富豪という決闘で戦っていた。この決闘では考えていた作戦が大きく外れ、俺は思わぬ苦戦を強いられていた。

友達が次々とあがっていくのをみて、そりゃあ俺はもう焦ったさ。気付けば俺と海斗しか残ってないんだもん。

そして紆余曲折を経て、俺はなんとか勝利を手にした。んで、壮絶なビリ争いに敗れた海斗が引いた罰ゲームは『昼休み中、男同士で愛し合う』といったもの。……誰だ、こんなの作ったやつ……。

「あ、これ僕が書いたのだ」

ってお前自身が書いたのか、海斗よ。

そんな突っ込みはさておき、この罰ゲームには一つの難点がある。察しの通り、それは一人ではできない、という点だ。で、こういった場合に罰ゲームを受けさせられるのは――

「……俺かよ」

そう、ブービーの奴に決まってる。

なんとなく反論したい気もしたが、決まってしまった事は仕方がない。俺は甘んじて罰を受けることにした——のはいいのだが。

「……………（じー）」

何故に顔が赤いのだ、海斗。その事が気になってしょうがない。

ただどこかでその故を問いたしたら、もう戻れなくなる気がする……。

ということで、結局俺は何も聞かずに罰ゲームを受けることにした。

「ところで、愛し合うつてどんな事をすればいいんだ？」

「フフ……それはね……」

海斗は俺の質問に答えず、今まで見た事のない笑みを浮かべ、手をワサワサと蠢かせながら迫ってくる。

「なあ海斗。俺の質問に答えてくれないか……？」

ジリジリと間合いを詰められないように下がりながら言う。

「百聞は一見に如かず、だよ。功司……」

語尾がものすごく甘えるような声色だったあたりに、俺は人としての尊厳の危機を感じた。

——ドンッ！

同時にマジな寒気と肌が粟立つのを感じていた俺の背に、現実を突きつけ、絶望へと振り落とす衝撃が。振り返ればそこには壁と窓。いつの間にか教室の隅に追いやられている……！？

「さあ……いくよ、功司……」

「ちよっ、まつ——！！」

とてつもなく熱のこもった海斗と裏腹に、全身から血の気が引いていく俺。

「君と僕とはこうなる運命——！！」

「や、やめて——！！！！！！」

——薄れゆく意識の中、考えたことは二つ。

大富豪で俺の邪魔ばかりしていたのは計画だったのか、海斗……。それと東。なんでお前までそんなに真っ赤なんだ……？

そうだよあの時と全く同じ表情だよ。

ということは、東の脳内では俺と龍鶴の壮絶な、その……コミュニケーションが繰り広げられているというのか？ 自主規制をかけずにいられないような。

マズイな。このままでは主人公としての面子に関わる。俺はそっち方面に関しては至ってノーマルだったはずだ。……ここは東にキツッと言っておかないと……。

「なあ、東」

少し後ろを歩いている東に歩調を合わせて話しかける。

「ん、な、なあに、功司……君……」

ボーッと夢心地な東は、俺の顔を見ると一瞬ビクッとなつてから妙に歯切れ悪く反応を示した。

……さて、こんな重症なコイツを元の道へと正すにはどうすべきか。三択だ。

A：超真面目。

B：おちゃらける。

C：全肯定。

まあ当然Aになるわけだが、とりあえずCを選んだアナタ。マジで勘弁して下さい。

話を続けよう。

俺はガシツと東の両肩を掴み、恐らく年に二、三回しか出さないような真面目Voiceで語りかける。

「俺と龍鶴で——」この時点でビクツとまた過剰反応する東。「——

——なにか良からぬ想像をしていないか？」

「し、してないよ……」

ギギギーとグリスの切れた人形の様にとてつもなく鈍い擬音をた

てながら顔ごと目を明後日の方向に逸らす東。

「俺の目を見る、東」

「……………」

「俺の目を見ながら言え、東」

「……………」

「何故黙ったままなんだ、東」

「……………」

はぁ……………まったくコイツは。昔から変わらん、こういう、自分の圧倒的不利状況になると黙ってそっぽを向くところ。こういう時の対処法は……………。

「……………何もしないから、正直に言ってごらん？」

優しく諭すように話す。

「……………本当？」

「ああ、本当だとも」

すると東はひょいと釣られて、

「……………思いっきりしてた……………」

素直に真実を告げてしまうのだ。こういう辺り、コイツも素直だよな。

「よし。よく言ってくれた」

俺はそう言つと東の頭をくしゃくしゃと撫でる。ああ、このやり取りも何年ぶりかな……………。

「思いっきり功司君と氷室君が観覧車という密室で——（ごめんこころへんちよつと自主規制）——なんて事を想像してた」

……………うむ、なんとスゴイものを頭の中で創造しちゃってるんだ、この娘は。

まあ本来の俺ならばここらでキツッイ突っ込みを入れるところだが、何もしないと明言約束してしまったからな。何もせんさ。いやべつにこういう素直な東は可愛いな、とか思っただけでやらない訳じゃないですから。いや本当だってこんな気弱そうに上目遣いですが、よくにオドオドした雰囲気まとった東に手なんかあげられないでい

うか守ってやりたいな〜みたいな事なんかこれっぽっちも思っていないて。

まあその話はまた今度するとして。

「そうか」

俺は未だに東を撫でながら、それだけを言う。

「……怒らないの？」

おとなしく俺に撫でられ続ける東は、遠慮がちに尋ねてきた。

「いや別にいいさ。ただ一つだけ分かっておいてほしいのは、俺と龍鵠はそういう関係じゃなくて」一度言葉を区切る。「——友達、だから」

ああなんかこのセリフ、すげ〜青臭い。これを照れを持たずに言い切るには俺は汚れすぎてしまったようだ。

「と、とりあえずその辺りをしっかりと押さえといてくれ」

「あつ……」

途端に恥ずかしくなった俺はそこで話を区切ると、東からぱつと離れ、桐垣の隣へと駆けていった。

「話は済んだのか？」

「ああ。問題はどうか解決された」

「東さん、まだ顔が赤いぞ？」

「……たぶん解決されたはずだ……」

少し後ろを振り返り、東の様子をしてみる。

「……………（ぽー）」

……たしかにまだ顔が赤いが、まあ大丈夫だろう。

そう判断した俺はそのまま桐垣と他愛もない話をしながらお化け屋敷を目指した。

——で、お化け屋敷前に到着してまたクジ引いて俺は天笠さんとペアになって最初にお化け屋敷に入って……。

そつえば龍鵠がうるさかったな。「春が来た——！！」とか

叫んで。対照的に東は大分落ち込んでたな。まあ、龍鶴とお化け屋敷だもんな。

——って、今はそんな事を考えている場合でなくて。

「……………」

「……………」

この状況をどうするかだ。どうすればいい？

「……ねえ」

「……は、はい？」

現状打破の方策を練っていた俺の耳に微かに届く天笠さんの声。すぐく小さい声だったから聞き逃すところだった。

「……さつきからずっと黙っているのは、恐いから？」

「いやまあ……一応（天笠さんが）怖——」

「それとも放置プレイのつもり？」

「はあ！？」

い、いきなり何を言い出すんだこのお方は！？ ていうか、年頃の女の子がそんなワードを発音しちゃいけません！！

「……またそうやって、女の子扱いする」

いやいやいやいやあなたは見た目的にも生物学的にも霊長類ヒト科ヒト目の女の子でしょう！？

「つまり私はただの雌である、と……」

いやいやいやいやいやだから生物学的にはそういう分類が為されるけれどもあなたは女の子ですていうかそのワードもなんかダメだって発音したら！！

「あなたはどうしたいの？」

それはこちらのセリフですから！！ どうしたのさ天笠さん！

あなたはそんな人じゃなかったハズでしょ！？

「あなたに私の何がわかるというの？」

いや確かにそりや分る事と言ったら……

「ほら、私の事なんてあなたはどうでもいいの」  
いやいやいやだからこれは……

「いいの。別に、そういうの嫌いじゃないから」

「いやいやいやいやいやいやいやいやあなたその発言もマズイってほらあの倫理的？ に！！」

「……放置プレイの次は、束縛プレイ？ あれもダメ、これもダメって……そんなに私を苛めて楽しい？」

「また言ったよこの人！！ 人の話聞いてましたか！？ ていうか苛めているつもりは当方にはありませんから！ ただ単にあなたを更生させるために愛のムチ——」

「精神的に苛めたら、次は鞭で肉体的に苛めるつもりね。私はさしずめ調教される——」

「ダメ——！！！！！ それ以上は発音しちゃダメ——！！！！！！」

「ていうか墓穴った俺——！！」

「……あなたは結局何がしたいの？」

「そして論点はそこに戻るのかよ！？」

「……ていうか、なんでお化け屋敷でこんなところで会話してんだ俺？ ほら見ろ、あそこに隠れているお化けも俺達が恐くて出てこれないっばいぞ。まったく、いつになったらゴールに着けるんだ？」

「おぼろな光に照らされている、前へとある道を見る限り、まだまだ先は長そうだ。」

「はあ……」

「この爆弾トークの終わりが早く来ることを祈り、俺はお化けがまともに出てこないこのお化け屋敷を騒々しく歩いた。」

## 第二章：4 省略。

「はあ——」

なんとか無事にお化け屋敷を脱出できた俺は、疲労を全身に感じながら溜息をついた。まさかお化け屋敷程度にここまで体力を奪われるとは……下に恐ろしき、お化け屋敷（With天笠さん）よ。

「矢城君、息がすごい荒いけど、そんなに怖かったの？」

そんな俺に労わりの言葉を投げかけてくれる天笠さん。ええ、あなたとの会話の行方がとても怖かったですよ。

「いや別にそういう訳じゃないんだけど……」

そんな事を言うともた先ほどの無限ループがやってきそうだったので適当にお茶を濁すことにする。もうあんな大声出すの嫌だし、なにより心臓に悪い。

「まあ……違った意味でかなりドキドキしたけどね……」

「違った意味ってどういう意味かな、功司君？」

「のわっ!？」

ガシッと俺の肩が万力のような力で掴まれる感触と地獄の鬼さんたちも裸足（彼らはもともと裸足だった気がする）で逃げ出すほどの極上ヴォイスをいきなり背後10センチメートルくらいの距離からかけられてマジビビりする俺を責める事が果たしてできるのだろうか？

まあそんな問いには答えでくれなくて結構なんだがとりあえず振り返った先におわしたのは東 湊亜さん。彼女は鑑定団に鑑定を依頼したらゼロが五つくらいつきそうな微笑みをたたえながらものすごくドス黒いオーラをまとっています。お化け屋敷なんか軽く凌駕するほど恐ろしく感ぜられます。

「ち、違った意味の説明でございますか!? そそ、そいつはちょっと刺激が強すぎて——」

「どういう意味で刺激が強いのかな？」

教えてくれない？ とこのお方は私にジリジリと詰め寄って来ます。先に記した状態のままで。

「いいいいや別にそういうやましい意味での刺激などではなくって

——」

「どうして——」ちよつと大きめの声で私の弁を遮り発言をしなさる東さん。

「——いきなりやましいなんて言葉が出てくるのかな？ 私は意味を尋ねただけなんだけど。……どうしてかな？」

かな？ ともう一つ語尾を繰り返す東さん。お言葉を返すようですが、そのネタ。既に龍鵠が使っておりますよ？ ていうかネタ自体少し——

「質問に質問で返すのは感心しないなあ……。——質問してるのは私、だよ？」

「あ、東さん、その、顔がとてつもなく近いですよ……？」

こ、恐いです、東さん。そんな近くで今にも私を殺しそうな笑顔をされては……。と言いますか、これ質問じゃあなくて尋問なのでは——

「もう一度だけ、言ってあげる。今、質問をしているのは私。……分かった？」

「は、はい……！」

ヤバいですよ矢城功司君！！ このままでは何故だかお怒りの東様が

「It's a lie（嘘だ）……！」とか言い出されるのが目に見えてますよ！？

このままではパロネタの応酬になってしまいますが、それはなんだかイケない気がします！ この状況から話を元のルートに戻すにはどうすればいいでしょう！？ そうだ、こういう時こそ冷静に、冷静になるんだ矢城功司——！！！！

よし、こんな時には——

「素数を数えたら一生後悔すると思うよ？ 功司君」

ギャ——！！　よ、読まれていらつしやる！？　バカな、これはイエスオアノーの考えじゃないはずなのに！！

（まずい、このままでは色々と危ない気がする……！　この現状を打破する方法は……！？）

とりあえず、冷静に。……ここは素直に事実を吐いてしまえよう。

「いえ、その、ですね……お化け屋敷内を天笠さんと無言で歩きながら回想シーンの中で更に回想シーンに入るという行為を試みた後唐突に天笠さんが変な事を言い出しまして——」

「変な事って、どんな事？」

「いや、それは……その……」

嫌なところで切り返され、思わず言い淀んでしまいます。そのまま二秒くらいの躊躇いを経て、思い切って言い切る事を決意。

「ゴホン。えー、放置プレイがどうかという話の方向になりました

——」

「私を苛めて楽しんでたのよね」

「へえ……」

なっ、違っ——！！

「その後は私を雌扱いして束縛した後に肉体的に苛めたのよね」

「ふうーん……」

ああああああああああ！！　この人はなんて事言っちゃてるんだ——！！！！

「なるほど。よおお——　つつく分かった。貴重な証言をありがとう、楓」

「いいの。私は事実を述べただけ」

「いやいやいやいや事実なんて——」

「私、何か嘘をついているかしら？」

いや、確かにほとんどが事実ですが、言い方というものもあるでしょう……？　ていうか苛めることを楽しんでなんかいない！！

「こ・う・じ・君」

必死に、マジで命をかけて言い訳の言葉を紡ぎだす俺の肩に、断罪者の手。

「はははい!!!??」

「念仏、唱え終わった?」

笑顔。満面の笑顔。断罪者は見る者すべてを癒す笑顔。残酷なまでに無邪気な。

紡ぎだされる、断罪者の呪文。すべてを破壊し、地獄にたたき落とし、生かし続けられる——運命の洗礼。

絶望の奈落へと叩き落とされた、矢城功司が理解したことは一つ。  
——ああ、俺はどうあっても助からない——

「どうああああ——!!!?」

「きやあつ!」

飛び起きた俺の目の前に、驚く東の顔。

「はあ、はあ……あ、あず、ま?」

「び、びっくりした」……」

「あれ、俺は……。それに、ここは?」

きよろきよろと辺りを見回すと、業務用の机と灰色のロッカー、白い壁に掛けられている何だかよく分からない着ぐるみのような物。俺は部屋の中央にある背もたれのないベンチに寝かされていた模様で、俺の顔を心底驚いた表情で見つめている東。

そこで行き着いた結論は一つ。

「もしかして、夢オチ……?」

パロネタで収集が着かなくなったからって……まさかの夢オチですか?

「そ、そんな事の為に俺はあんな目に遭わされたのか——!」?

叫ぶ。叫ばずにはいられないこの憤り。どうしてくれようか。

「だ、大丈夫? 功司君……」

頭でも打ったの? とそんな俺をマジで心配してくれる東。

「いや大丈夫。これは異次元的なツツコミだから」

このセリフは十分危ない人が発するようなものと気付いたので、また何かを言われる前にこちらから発言。

「ところで、何で俺はこんな所に？」

「あれ、憶えてない？ 功司君、お化け屋敷の中で幽霊の人とぶつかって、そのまま気を失っちゃったんだよ？ それで係り員の人にこの事務所に運んでもらって——」

「気絶……」

ああそういえば、幽霊までもを震え上がらせるかの限界トーク中、頑張って俺達の前に出てきてくれた幽霊さんがいたつけ。そうだ、それでその人——あ、いや幽霊さんと俺はぶつかって——

「あの夢に突入、か……」

あれはマジでシャレにならなかったなあ……。

「でも、なんともなさそうで良かった。心配したんだよ？」

なんてあはれなる気持ちに浸ってる俺の横に、安心したような東の——夢の中とは同じようでまったく違う笑顔。なんか和んだ。

「心配、かけたな……」

だけれどそんな事を表面に出すのにはちょっぴり恥ずかしいお年頃。ついついぶっきらぼうな言葉が出てしまう事には目をつぶってほしいところだ。

「そうだ、みんなは？」

「外。とりあえず私だけここで看病……って程でもないか。ここで功司君の様子を見ていたの」

「そう、か……。みんなにも迷惑かけちゃったな……」

なんだか少し殊勝な考えになってしまふのは病み上がり(?)だからという事で。

「大丈夫。みんな心配はしてたけど迷惑だなんて思っていないよ」

「……そうかな？」

「そうだよ」

「そっか……」

そう言ってくれると嬉しい。まだ転校してきて三、四ヶ月しか経っていない俺はやっぱりどこか遠慮している事とかある訳なのだが、そういう風に掛け値なしに心配してくれているという事は俺のことを、その……仲間として認めてくれているようで。

だからこそ。

今度こそはこの学園で、秋葉学園の生徒として、あいつらと卒業できることを切に願う。また、同じ過ちを繰り返さぬよう。

「さて、俺はもう大丈夫だし、これ以上みんなを待たせる訳にはいかない。そろそろ行こうか」

俺は寝かされていたベンチから起き上がる。そして頭を軽く振ってみる。……うん、特にこれといった異常はないみたいだ。

「大丈夫？」

「うん、大丈夫」

それでも尚心配してくれる東に笑いながら答え、その場で軽くストレッチなんかしてみせる。

「だから早くみんなの所に行こう」

「……クス」

そう東を急かすと、何故か笑われた。

「なんで笑う？」

「ん」とね、功司君、こういう時って言葉遣いが殊勝になるの。それが可愛くって」

「なっ!？」

なんてこそばゆい事を言ってくるんだこの幼馴染は!？」

「べ、別に殊勝になんかなくてないぞ。俺はいつも通りだ」

「クス……そういう事を指摘されると否定する意地っ張りなところも変わってないね。可愛い」

ああもう俺はどうすればいいんだっていつかこの赤面必須のトー

クの抜け道は何処に!？」

「さ、みんなの所に行こ？」

東は微笑みながら俺を手招く。

「……………」

抜け道は時間の経過だと悟った俺は、無然とした気持ちのまま黙って先導する東についていった。

お化け屋敷・幽霊の控え室から外に出た俺と東は、外で待つてくれているみんなと合流した。色々と労わりの言葉をかけてくれる面々の中、唯一の憎まれ口を叩いていた龍鶴は東にシメられていた。そんな龍鶴をほったらかしにしつつ俺達は次なる目的のジェットコースターに向かう事にした。

で、ジェットコースターに乗った俺達だったのだが、それは特に語るべくこともなく——ていうか描写してもあのスリルは伝わらないであろうから感想以外を割愛します。

感想。意外だったが天笠さんはこういうの苦手らしい。

## 第二章：5 シューターキング

割愛されたジェットコースターを後にした俺達は、次いで似たようなアトラクションのシューティングコースターに乗ることにした。「ところでシューティングコースターって、どんなの？」

「えーと、パンフレットによると――」

「二人乗りのコースターに乗って、コースターについている銃みたいなもので走行中に出てくる障害物を撃つアトラクションよ。出口には二人の合計と個々のスコアが表示されるわ」

東の素朴な質問にパンフレットを広げて答えを返そうとした俺の言葉を遮ってまたもや淀みもない口調で解説してくれる天笠さん。本当に詳しいなこの人。

「ほう」

そして天笠さんの説明を受けて目を細める坂上さん。何故？

「こういうものには少し覚えがあるんだ。こと銃に関する扱いにならそこの男どもにも負けないと自負している」

「へえ……」

なんだ、坂上さんって見かけによらず銃とか好きなのかな。それとも連日ゲーセン通ってガンシューティングに勤しんでるとか？

「いや、別にそういう訳じゃないんだが……まあ乙女の秘密というものだ」

むう、男には分からない乙女の領域か……。奥が深いんだな、女の子って。

「坂上さんは大分自信があるんだな」

「まあ……な」

「ふっ……ならばここは勝負だな」

と、いきなり桐垣が提案しだした。

「勝負？」

「ああ、勝負だ。――このアトラクションはスコアが出るのだろう

？ ならばここは個人のスコアとコースターのスコアで張り合うのが流れというものだろう」

確かに一理あり俺はそれに賛成だが、こういうのって女の子は乗り気でやってくれるんだろうか？

「うん、そっちの方が面白そう」

「いいわよ」

「私に断る理由はない」

あつさり全員承諾。

「ちなみに罰ゲームありで」

「罰ゲームって……どんな？」

ていうかそんなの出したらみんなやらないんじゃないか？

「トップの組が誰かにたった一つだけの絶対命令権を持つことができる、というのはどうだ？」

俺は別になんでもいいが――

「いいよ」

「いいわよ」

「構わない」

―― またもやあつさり承諾か。つか天笠さん、同じ言葉しか発してないし。

「決まりだな。さて、組み分けはどうする？」

「クジで決めるのか？」

「いや、ここは意図的にパートナーを選ばせてもらおう」

それでいいか？ と龍鷯に尋ねる桐垣。

「桐垣は誰と組むんだ？」

「矢城とだ」

「なら許可する」

あつさりと許可を出す龍鷯。なるほど、俺と桐垣が組む＝龍鷯は女の子と組むだもんな。

「坂上さんよ、貴女に勝ってみせる」

そういつてビシッ、と坂上さんを指さす桐垣。なに？ さっきか

ら対抗意識燃やしてたの？

「まあそんなに気張らなくても——」

「矢城よ」俺の諫めの言葉を遮る桐垣。「もし、東さんが一位の組になった場合、無理難題を押しつけられるのはお前だぞ？」

……………今までに東にやられた事を回想中……………

結論。負けられない。

「——桐垣」

「なんだ」

「絶対勝つぞ」

「もとより俺はそのつもりだ」

ガシツと熱く腕を組み合わせる。

「俺たちのゲーセンで鍛えた腕を見せてやろうぞ」

「ああ、任せときな！」

この勝負、負けられない……！！もし東を含むチームが一位になつてみる。変な願望に四苦八苦踊らされている俺のフューチャーが明確にイメージできるぞ。そんな願いは俺のマグナムでぶち壊してくれるわ！

「こつちのペアは決まったぞ」

そう声をかけられ、そちらの方向に顔を向ける。

「む、坂上さんと東がペアか……」

こいつは苦戦を強いられそうだなぜ……。

「俺は楓ちゃんだ」

まあ、あつちは度外視していいだろう。龍鷲いるし。

「ふふふ……相手にとって不足はない。いくぞ！ 戦いの始まりだ……！」

ノリノリな桐垣に続く。目的地は前方の建物、シューティングコースター。今回ばかりは負けられない！

シューティングコースターのアトラクションはなにかでかい建

物の中をトロツコで走っていき、その途中に出てくる障害物——つかの間のいたなものを打ち抜いていくものらしい。

建物内部の様子は、ごつごつとした茶色い岩肌の洞窟内部のようで、走っているトロツコは木で出来ているくせに後ろにジェットブースターみたいなものが付いているという近未来的なんだか中世的なんだか見当のつかない感じ。光源となるものがかり火のように赤く光っているライトだけなので、少し薄暗かった。今はちょうどお昼時だからか、あまり人は並んでいないようだ。

その内部を先ほど決めたペアとルートに沿って進み、トロツコがやって来ては人を乗せて出発していく乗り場付近にいた受付の係員さんにフリーパスを見せる。フリーパスを確認した係員さんはまず先頭にいた俺と桐垣のペアをトロツコに誘導する。

促されるままにトロツコに乗り込んだ俺と桐垣はシートベルトの確認をされ、確認が終わるとトロツコは緩やかに前進した。

少し進むと、かがり火模様の赤ライトに照らされた注意書きがあった。そこにはありきたりな注意事項と健闘を祈るといったような言葉が書いてあった。

トロツコが左に道を折れると、かがり火も何もない暗闇に視界が覆われ、緩やかな上り坂になった。そこをガタゴトと音をたてながらゆっくりと登っていく。

（今のうちに状況確認でもしておくか）

このアトラクションは少しジェットコースターみたいな部分もあるようで、両肩と腰はシートベルトで固定されている。加えて今俺の右手にある近未来的なモデルガン——レイガンという実直な名前らしい——はトロツコからコードで繋がられている為、銃の可動範囲はあまり大きくないと判断。

銃口から発せられる赤外線を的となる物に当たると得点になるこのアトラクション、命中率なんかも得点に配慮されるみたいで、なかなか本格的なシューティングのようだ。

「どう行く、桐垣？」

「そうだな……とりあえずはいつも通り、右と左に分担して行こう」  
「了解」

桐垣の指示を聞き、通称レイガンを左手に持ち替えたりどのくらいまで腕が動いてくれるかを確認。……うん、大体は掴めた。それと、少し気が引けるけど、ズルを使っておこう。

一通りの状態把握が済んだ頃、軽く背もたれに押し付けられるような重力が消えた。上り坂は終わったようだ。そして前方には暗闇の出口の丸い形に沿った、うつすらとした光。

「そろそろ、か……左は任せたぞ。矢城」

「ああ。そっちも任せた」

俺と桐垣は頷き合い、光が段々と強くなってくる前方を見据えた。

——ガタン、ガタン……

トロツコの進む音だけが響く。光はどんどん強く大きくなってゆく。どうやら暗闇の出口付近は強力なライトに照らされているらしく、その先はほとんど見えない。

——ガタンガタン……

心なしかトロツコが加速してきているような気がする。そう思ったが前方から意識は逸らさない。

トロツコは進んでいき、光が視界のほとんどを埋め、そして、前方が開けた途端——

「——うわっ!?!」

——いきなり浮遊感に襲われる。

「な————!?!」

どうやら、暗闇から脱出した直後からはいきなり直滑降になっていたらしい。そう気づいた頃には直滑降も半ばを過ぎた辺り。

反射的にうつむき、目をつむってしまっていた俺は目を開いて顔をあげた。ジェットコースター程ではないが、中々のスピードで風景が後ろに流れていく中、レールが降りから上りになる直滑降の終焉、レールの左右に的らしき物体が一つずつ。

（あれが的か？）

それを確認した俺は、右手に持っているレイガンの銃口を左側の的に向ける。

（そついや、この射程ってどれくらいなんだ？）

とにかく、無駄撃ちはしたくない。できるだけ、照準が逸れないくらいに近くまで行つてから――

「――！」

直滑降を降りきる直前、予め向けていた銃口と的が重なる瞬間に引き金を引く。

ビームライフルの発射音みたいな音の後に、デフォルメされた爆発音。……どうやら命中してくれたようだ。

「よく当てられたな……今のやつ」

「ん、ああ……まあ……」

直滑降が終わり、上り坂に入った所で桐垣にそう言われ、口ごもる俺。なぜなら俺は百八個ある特殊能力の一つを使ってしまったのだからな。……まあ要するに若干卑怯な事をしてしまったのだ。

「俺も一応撃つたのだが、あのスピードだ。当たらなかった」

「……………」

まあ、確かに時速およそ四十キロメートルの中、的確に的を射るなんて相当訓練された腕がなきゃ無理だもんなあ……。

「つと、どうやら次の的が出てきたようだな」

桐垣にそう言われ前を見る。確かに、レールの左右にふよふよと的が揺れながら出ている。

「そつち、頼んだぞ」

「ああ任せろ」

俺は左側に出てきた的――四つ、一つの直径は三十センチメートルといったところか――に照準を合わせる。上り坂に入つて少し減速したものの、まだ時速二十キロメートルくらいは軽くでている。

（相当難易度高いな、このアトラクション……）

とはいえ、現在目の奥の方で種が弾けたような状態の俺にとっては簡単なのだが。

気を抜くとあつという間に後ろに流れて行ってしまうのを、一番近いやつから順に照準を合わせていく。

引き金を、

一回引き、一番近目的を粉碎。

二回引き、一番遠い位置の的を射抜く。

三回引き、ふよふよ揺れている的二つが重なった瞬間に発砲、二つの的を同時に射抜く。試しに重なる瞬間に撃ってみたのだが、的に何らかの仕掛けが施してあるのか、俺の予想どおりある程度赤外線は貫通する仕組みになっているようだ。

（あとは――）

左側にはない。右側は――

――ちゅどーん！

ちょうど桐垣が最後の的を射抜いて、気の抜けたデフォルメ爆発音を響かせていた。

（ふう――）

一つ息をつき、前方に視線を戻――

――ガタン！

「うわわ！？」

した途端に、円を描くような降りに突入。円は時計回りに続いているようだ。

「気を抜くな、矢城。今までの準備運動みたいなもののようなのだぞ」

「あ、あれで準備運動って……」

このアトラクション、狙撃のプロ仕様なのか？

ともあれ、（俺の）平和な未来の為に俺はレイガン（もうただの銃でいいかな？ こいつの名前）を手取る。

（……流石に外周側は難度高いな……）

円の外側にある的は、先ほどのように動いてはいないものの、数が多い。その上、下り坂での狙撃なので照準を合わせづらい。

（くそ、こうなったら秘奥義マルチロックオンを――！？）

――ビビビ！！

全てを撃ち抜こうとより強く精神を集中させた瞬間、左手首に巻いてあるプロミスリングから電撃が走った。

（あばば！？ しまった、少し出力上げすぎた……）

電撃は肘を通り肩を抜けて神経を焦がし、四肢を痛みを伴って痺れさせる。

「あが、が……！！」

正直言っただけかなり痛い。例えるならば、うつかり変な体勢をして足とか腕とか遠慮も容赦もなくつつた感じ。

「んぐぐ……！」

うつむき歯を食いしばり拳を握りしめて痛みに耐える。大丈夫だ、これは突発的な痛み。だから早く痛い痛いのとんでけ！

何秒くらい経ったのか、徐々に痛みが引いてくる。

「く……っああー……治まった」

ふう、久しぶりにこんな痛んだなあ……って！

ハッとして顔を上げる。どうやら円状の降りも終わっていて…… たった今下ってきた坂見上げると大分上の方に健在なままの的が七八個。

「し、しまった……」

ヤバい……。三、四個位ならまだしも、あんなに多くの的を見逃してしまった……。この失態が大勢に響かないといいけど……。

「どうしたんだ？ 途中からうずくまっていたが……」

そんな俺を心配して言葉をかけてくれる桐垣。くっ、今しがた自分の事しか考えられていなかった自分が恥ずかしい……。

そんな優しいき友に心配をかける訳にはいけないので、俺はふるふると小さく手を振って答える。

「ああいや、なんでもないんだ」

「……ならいいが」

「つと、それよりも前々。的が出てきてるぞ」

桐垣は腑に落ちない様子だったが、俺の言葉に前を向いて的を認める。そして銃を構えて迫りくる（実際には俺たちが動いているの

だが）的へと銃口を向ける。

「あー、しくった」

小さな声で悪態をつく。あの数的的を見逃し、なにより桐垣にいらぬ心配をかけてしまった。……だが、ここでうなだれていてもしょうがない。今度は出力に気をつけて、着実にいこう。

「才疲レ様デシタ」

プシューなんて音とともにトロツコはゴールに到達し停止、そして合成音声が俺達の労を労ってくれた。

「ふう、意外と長かったな。このアトラクション」

「ああ……」

俺がうなだれてからここに到達するまで約十分。いくら出力を抑えていたとしても、百八個ある俺の特殊能力のうちの一つをここまで行使していたせいか、目が痛い。

「さて、肝心のスコアの方は……」

桐垣が先にトロツコから降り、今しがたの俺達のスコアが表示されている電光掲示板を見に行く。

「ハア……」

俺も明日がかかっているスコアが気になったが、今はまだ座ったままでもいい。確かにこのアトラクションは面白かったのだが、正直疲れた。理由は前述の通り。だけど、

「そうにもいかないよなあ」

ほら、出口に誘導する係員さんもちょっと困り顔だ。本来ならスコアを早く見ようと自分の誘導を無視して降りてしまう客が多いであろうに、こんな疲れた顔をした人（しかも高校生）がトロツコに座ったままだと、逆にどうしたものかと戸惑うよなあ……。

俺には人——しかも同性——を困らせて喜ぶ性癖はないので、疲れた体に鞭打って立ち上がり、トロツコから降りた。ところでどうしたものかと戸惑うって微妙に意味かぶってないか？

なんて。

こんな考え方をするなんて、俺は相当に疲れているのだろうか。いや、ただ単に創造者がとある御方の本を読んだ直後なのかも知れない。……あいや、今のは忘れてくれ。ちよつとした戯言だからそれは置いておいて、さてさて俺のスコアは、と。

トロツコから降りて、相変わらずゴツゴツした岩肌丸出しの洞窟のような建物を、係員さんの指示通りに歩いて行くと、えらく場にな釣り合いな電光掲示板があった。そしてその前に、携帯にパコパコと何かを打ち込んでいる桐垣。多分、俺達のスコアを打ち込んでいるのだろう。

「おい、どんな感じだ？」

近寄りながら声をかける。

「ん、ああ」

桐垣はこちらを向かずに電光掲示板と携帯とを交互に見てはスコアを打ち込んでいる。

「これでよし、っと。なかなかやるな、矢城」

一通り打ち込み終わったのか、携帯を閉じてポケットに入れた桐垣は感心したようにそんなことを言ってきた。

「なかなかやるって……何が？」

「このスコアだ。お前、歴代六位だぞ、個人成績」

え、うそ、マジで？ こんな所に俺の名を刻んじやった？  
どれどれ、と電光掲示板を見してみる。

| Left Side Result |                           |
|------------------|---------------------------|
| Hit rate         | : 86.2%                   |
| Vanquish         | : 32                      |
| Score            | : 32 × 50 × 1.864 = 2,982 |

ああ本当だ。意外と成績良かったんだな、俺。そのまま視線を右にずらして、桐垣のスコアを見してみる。

Right Side Result

Hit rate : 74.2%

Vanquish : 26

Score : 26 × 50 × 1.742 = 264

えーと、電光掲示板に出ている歴代トップ10の十位が2.520点だから、桐垣の成績もそんなに悪くはないはずだ。

Total Result

Hit rate : 80.5%

Vanquish : 58

Score : 58 × 75 × 1.805 = 7,851

そう思っで電光掲示板の下部を見ると、なんと総合成績歴代五位。

「ふっ……これなら勝ったも同然だな」

そう確信した俺は平和な明日を勝ち取れたことを神に感謝した。

神よ、あなたは俺を苛めたい訳じゃなかったんですね。

そこではらく約束されているであろう勝利に酔いしれながらいつまでたっても外に出ない迷惑な客を演じつつみんなが来るのを待つ事約三分。次のペア——龍嶋&天笠さんがゴールに到達して、俺達と合流した。

電光掲示板の結果を見ると、二人とも悪くはない成績なのだろうが、やはり俺達には敵わない得点だった。

「ふふふ……。やはり俺達が一番か？」

俺は余裕の笑みを浮かべて、一度の絶対命令権の内容を何にするかを思考する。

——そう、俺は自分達の勝利を微塵も疑っていなかった。三分後

までは……――

Left Side Result  
Hit rate : 98.0%  
Vanquish : 51  
Score : 51 × 50 × 1.980 = 5,049

Right Side Result  
Hit rate : 91.6%  
Vanquish : 11  
Score : 11 × 50 × 1.916 = 1,053

Total Result  
Hit rate : 96.8%  
Vanquish : 62  
Bonus : +1,000  
Score : 62 × 75 × 1.968 + 1,000 = 10,101

「――」  
東&坂上さんのスコアに、俺絶句。三分前の自分の浮かれ様がバカに思えてきた。つかトータル一万越えって……。

あんぐりとしている俺の横に、涼しい顔をした坂上さん。

「どうやら、私達の勝ちのようだな」

坂上さんは表情を変えずにそう言った。

「……私はほとんど何もしてないけどね……」

その横では東が寂しそうにそう言う。

「何を言う。涅槃が無駄撃ちをしないで落ち着いて的を射抜いてくれたからこういった結果が出たんじゃないか」

坂上さんは、だから気を落とさずに、と続ける。

「ありがとう、薫……そう言ってくれと嬉しい……」

で、そんな坂上さんを見つめる東。……なんだ、この余人には入りづらい雰囲気は……。

「どうやら、俺達の完敗のようだな」

そんないつからか下の名前を呼び捨てあうようになった二人を見ていると、桐垣に肩を叩かれ、そう言われる。

「——ああ、悔しいが……認めざるを得ないか」

そうだよなあ、総合成績歴代二位だもんなあ、二人の成績……。

「というわけで、罰ゲームなのだが……湮亜、決めてくれ」

「え？ 私？」

「ああ。私はあまりそういうのを考えるのに向かないから」

「でも私はそんなに活躍してないし——」

と、そんな二人の会話の末、

「えつと、じゃあ罰ゲームは私が決めるね？」

最終的に東が罰ゲームの提案者になったようだ。

さて、一体どんな罰が待ち受けているのか。俺は少し怖がりながらも、なんだか楽しい気分で東の言葉を待った。

「えーと、それじゃあ、罰ゲームは——」

## 第二章：6 シャイですから

シューティングコースターを後にした俺達は、時間も時間だったので、オープンテラスで食事をする事にした。

という訳で、園内にあるオープンテラスに到着したのだが……

「——やっぱり混んでるな……」

予想通り、オープンテラスは結構な客の数でにぎわっていた。

「まあでも座れないほどでもないか」

桐垣の言葉通り、混んではいるがちらほらと空席が見える。けど流石に六人席は空いてないだろうなあ。そんな訳で、

「じゃあ席確保する組とメシ買いに行く組とで別れて行動しようか。席は六人がけが空いていればいいけど、最悪、三人ずつで別れるような感じにして」

という坂上さんの言葉通りにする事にした。

そんでもって、公平なるグッパの末、メシ購入隊は俺と東と桐垣、席確保隊は残りの三人となった。

「えーと、龍鷲は……ラーメンだったかな」

席確保隊と別れた俺たちメシ購入隊は全員分の要望を注文すべく、レジから続く列の最後尾に並んだ。そして俺はオーダー確認中。

「……で、だ。えー、その……天笠さ——」

「功司君」

その途中、東が俺の言葉を遮る。

「呼び方、違うよね？」

そしてそう諭すように言う。

「い、いや……別にここにいないんだし——」

「だめ。罰ゲームなんだよ？」

「ぐっ……」

……東が先ほど決めた罰ゲーム。それは

「全員が全員を下の名前もしくはあだ名で呼ぶ」というものだったのだ。それ罰ゲームか？ というツツコミを入れると、

「だって名字にさん付けとか変によそよしいから、いい機会だし、ね？」との事で。

でだ。俺はこう見えて一般的な高校生よりも相当シャイな部類の筈だから、そんな罰ゲームを簡単には受け入れられないのだ。

「そうだぞ、罰ゲームなんだから素直に受ける」

「ねー」とかい合い合って意気投合している東と桐垣。ちなみに桐垣は全員のことを変なあだ名で呼んでいる。

「そういう訳だから、覚悟を決める功ちゃん」「功ちゃん言うなっ。普通に「功司」でいいだろ？ なんてそう呼ぶんだお前は？」

「決まってる。そっちの方が面白いからだ」

「……そいですか……」

もう好きに呼んでくれ……。

「ねえ功司君。なんでそんなに下の名前でみんなを呼ぶのを嫌がるの？」

「なんでって、そりやお前……」

さっき言った通り、俺はシャイで、男はともかく女の子を下の名前呼び捨てなんて照れるからだ——なんて言える訳ないだろ？

「くくく……理っちゃんよ、それは男の純情というやつだよ」

「なっ!？」

「男の純情？」

心底おかしそくに笑いつつ、桐垣は俺の心を見透かしたような発言をする。それを聞いた東はきょとんと首を傾げた。

「そう、男の純情。この男はだな、同年代の異性を下の名前で呼び捨てるのに——」

「ちよっ、タイム!! 桐垣タイム!!」

「インプレー中のタイムは認められん」

くっ……やばいぞ、このままでは非常に恥ずかしい事になること

間違いなし！　ここは力づくでもやつの暴挙を――

――ガシ――！

「……えっ？」

――止めようとしたら、東に羽交い絞めにされる俺。

「あ、あず――」

「湮亜、でしょう？」

続けて、と桐垣に言い、さらに力を入れて俺を拘束する。ていうか胸！　胸が背中に……！！

「そう、で、功ちゃんはだな、そういう事に照れを感じるのだよ」

ああ言われた！　うわ、穴があつたら入りたい心境だ！　けど今はそれよりこの俺の背中にひっついてる俗にいうM A S Y U M A R Oのような感触をもった圧倒的存在感をどうすればいいんだよこのまま身を任せちゃってもオケーなのかいべいべー！？

「まったく……中学生じゃないんだから、それくらいで照れるな」

そうだよなもう俺も中学生じゃないんだしこの素晴らしき感触に身を委ねるくらいで動揺しちゃいけないつかむしろこのコレを堪能するくらいの気を持たなきゃねそれにしてもこいつ本当に胸、

「やだ、功司君ってばそんな可愛い悩みを抱えてたの？」

そう言ってよりぎゅーっと力を――ってだめ駄目！！　やっぱ駄目だってこんな二つのゼリーののような柔らかいモノが「むにゅー」ってなるのはほら俺も一応健康な高校男子だし！？

「り、り、り、湮亜――！！」

俺は目をつぶって、とりあえず叫ぶ。

「ん？」

「とと、とりあえず、俺からステイ・アウェイしてください」

そして微妙な英語が混じった敬語。なぜだか知らないが敬いたくなっただ。

「あ、うん」

俺の言葉に、以外にも素直に離れてくれる東。――正直少し（いやかなり）残念だと思ったのは絶対に秘密だ。

「ふー、すー、はー……」

そして深呼吸。頭に新鮮な酸素を送り込んでクリアーな思考を取り戻そう。

……よし。多分クールダウン成功。

さて、クールになったところでどうしようか。さっきのなりふり構ってられない状態の時、思わず東のこと下の名前で呼んじやつたしなあ……。もう開き直っちゃおうか、それとも意地を張り通そうか……。

こういう時はクイックセーブ……じゃなくて脳内でシミュレートしてみよう。この先の未来を。

パターンA：開き直る。

「ああもう罰ゲームなんだからなんとも呼んでやるさ！ 涅槃、

秀智、楓、薫、龍鶴ってなあ！」

「じゃあ私のこと「りっちゃん」って呼んでみて？」

「うっ……」

「じゃあ俺のことは「ヒデ」か「ひいちゃん」か「トモヤス」と呼んでみてくれ」

「ぬっ……（トモヤスって誰だ？）」

「さあ」「さあ」

「早く呼んでみて（ろ）」

「ぐっ……」

——だめだ。トモヤスが誰なのか分からない……。

パターンB：意地を張る。

「わかった。下の名前で呼んでやる。だけど罰ゲームで言っちゃってるんだからな！ 勘違いするなよ、俺は罰ゲームだから言ってるんだからな！」

「くすくす……素直じゃない功司君で、なんか可愛い」

「んぐあ！？」

——だめだ。俺はツンデレじゃない。

つかなんかイマイチなシミュレートのような気がする……。そもそもトモヤスって誰だ？

俺は熟考の結果、成行きに身を任せることにして、いつの間にか桐垣が注文していたラーメンとカレーをお盆に乗せた。

## 第二章：7 穏やかな時間

まん丸い茜色の太陽が西の空に落ちていく。時間と共に影は長くなり、視界は茜色に染められていく。

「……………」

そして同じく茜色に染められた観覧車のゴンドラ内には静寂が満ちていた。まるで朝の様に静かで、まるで朝とは違う雰囲気です。

「……………」

——女性陣にからかわれまくった昼食（結果的にこれからは名字でも呼び捨てる事を強要された）を取った後、俺たち色んなアトラクションに乗った。コーヒーカップでは桐垣と意地を賭けての回し合いをして、シューティングコースターで坂上に再挑戦して振り返ちにあつて、フリーフォールのベルトが緩くてマジに死ぬと思ったり、メリーゴーランドの馬車に男三人が顔を突き合わせるという事態が発生したりと、騒がしくて楽しい時間を過ごせた。

この遊園地は夏には夜に花火を上げるのだが、春はそんな洒落たイベントもなく、閉園三十分前に迫った時間、俺たちはもう一度観覧車に乗ることになった（ちなみに俺は最後まで抵抗しなかった）。

もうお決まりになってしまった龍鵜のクジを引いて、俺は、

「……………」

何故か借りてきた猫のように大人しくなってしまった東と同乗することになった。

「……………」

ていうか、なんで東は喋らないんだ？俺は観覧車怖いし、でも悟られるのはなんか悔しくて恥ずかしいから黙ったまま外の風景を

眺めてるふりをしてるけど。

「……功司君」

「ん……？」

ゴンドラが頂上に近づいてきた頃、その沈黙を東が破った。

「なんか、懐かしいね……」

「懐かしい？」

「うん、懐かしい」

俺はなるべく下を見ないように眺めていた外の風景から、東に視線を移す。東は俺の方を見ておらず、彼方の山々に沈み始めた太陽のある右手側の景色を見ていた。

「憶えてない？ ほら、小学校の頃、体育倉庫に閉じ込められちゃった時の事。あの時もこんな感じじゃなかった？」

「閉じ込められた……」

……あー、あつたあつた。

「五年の時のあれか？ たしか倉庫内に『後はお若い二人でごゆっくり』とか書かれた手紙があつた……」

「そうそれそれ」

東は外を眺めたままおかしそうに笑っていた。

「いや、微妙に笑い事じゃなかったらあれは」

「うん、まあたしかにね」

——小学校五年生の時。俺は東と体育倉庫に閉じ込められるという事件があつた。

まあ事件と言っても大したことではないんだが。

小学生の時つてのは家が近い異性がいたりするだけでからかわれるもんだ。で、当時の東と俺はまさに隣同士。東も東で俺によく話しかけてたりしたもんだから、周りには絶好のからかいネタになってたんだろうな。

要するに、この事件もそのからかいの延長線上にあるものだった。放課後、友達と共にサッカーに興じてた俺はボールの片づけを任命された。普段は違うやつに頼みっぱなしだったし、まあいいかと

安請け負いした俺は、これがいつも以上に不自然にニコニコしていた友人達の策略だとは露も知らずにいた。

夕陽の光だけが光源の薄暗い体育倉庫に入ると、東がいた。

「あれ、功司君？」

東は少し奥の方にあるボール籠にボールを入れようとしていた。

「ん、なんだお前も片づけか？」

「うん。バレーボールの片づけ。友達に頼まれちゃったから」

「ふーん。じゃあ俺と同じだな」

と、いつも通りに他愛のない会話を交わしていると、

——ガラガラガラ、ピシャン！

「え？」

「ん？」

急に扉が閉められて、

——カシャン。

「あっ」

「なっ」

鍵を閉められた。ちなみに扉を閉められた倉庫内の光源は、高い所に位置する小さな窓から射してくる夕陽の光のみなので、結構暗い。

「……………」

「……………」

いきなりな展開に着いていけない俺と東。

「……………」

と、そこで、自分の足もとに白い紙が落ちているのに気付いた。

その白い紙には、

『あとはお若い二人でごゆっくり』（笑）　ともだち想いのK・Y

より』

などとふざけた事が書いてあって、ようやく俺は謀られた事に気付いたのだった。

そういえばあの時もこんな感じの時間帯で、二人とも黙りこくつてたなあ……。

「……やっぱり笑うところないぞ、あの事件」

「えゝ、あるよ」

なおも東はおかしそうに、どことなく嬉しそうに続ける。

「あそこから出れた時のこと」

「出れた時って……俺が扉を蹴破った時？」

「そうそう」

たしか、あの時は東がなんか泣きそうな顔してて、やべえどうにかしないとって思っで、がむしゃらに扉蹴ったらすごい音をたてて扉が吹っ飛んだんだよなあ……。いやーあの時は『やべーどうしよう扉壊しちゃったよ』って焦ったなあ。でも泣きそうだった東が笑ってくれたからなんか『扉壊したくらい別にいいや』って思っただよなあ。

「それで功司君が扉を壊した後、私の方向いて『やべーどうしよう扉壊しちゃったよ』みたいな顔が可愛くて面白くて……」

「……あー、だからあの時笑ってたのか、お前は」

「でもその後に『扉壊したくらい別にいいや』って顔して私の手を取ってくれた時……すごい頼もしかったなあ……」

「………お前なあ」

なんで俺の心を正確に読めるんだ&なんで思わず赤面しちゃうような事を平然と言えるんだ？

「功司君だつて、その次の日に首謀格の人に向かって『俺は別にいいけど東まで巻き込むな』ってカッコいい事言ってくれたよ？」

「……そんなカッコいい事が、それ？」

「カッコいいよ。だって、それはつまり『俺の女に手をだすな』って事でしょ？」

「違うわっ！」

「くすくす……冗談」

楽しそうに笑う東はまだ外の景色を眺めている。

「まったく……変わらないよな、お前は」

「そう？」

「ああ変わらん。普通『小学生の時』とか言うのに『小学校の時』って言ったりするセリフ回しとか、俺をからかったりするところとか」

変わってんのは身体つきくらいだよなあ……。昼メシの時の感触とかもう……

「……功司君。今、いやらしい事考えてない？」

「……考えてません」

視線を反らし、外に向けながら言っても説得力はないだろうけど。

「本当に？」

「本当に」

「じゃあ私の目を見ながら言ってる？」

「お前の目——ってうお!？」

視線を東に戻すと、まさしく目と鼻先の距離に東の顔。

「ち、近い! 顔近いってあず——」

「涅亜、でしょう？」

めっ、と人差し指を立てて、子供を叱るように言う東。

「い、いやあず——」

「涅亜」

「だから——」

「涅亜」

「その——」

「涅ゝ亜ゝ」

「うう、涅亜、その、顔近いです……」

「ふふふ……功司君って、やっぱり可愛い」

「ううう……」

そう言って満足そうに席に座ってくれる東。……なんか激しく辱められた気分だ。

「それに、優しいよね」

「う？　優しいって、俺が？」

「うん。すっごく優しい」

はて、俺はどこかで優しさアピールなんてしたっけかなあ？

「……そこも、変わってないよね……」

「……………」

そんなことをこんな雰囲気の中か上目遣いで言わないでくれ。思わず状況に流されなくなるだろうが。とか、思ってしまう辺り。

「功司君は気付いてないと思うけど、私が変わってないところはもう一つあるよ」

「……変わってないところ、か……」

——多分、あまりに楽しすぎて俺は浮かれてるんだろ。それがないければ夕陽のせいだ。

「まあそれは秘密だけだね」

そんな事言って笑う東を、ものすごく可愛く、切なく感じてしまふのは。

「ふう、やっぱり遊園地の締めは観覧車に限るな」

そう言って、最後のゴンドラに乗っていた桐垣が降りてきた。

「……何故だ、何故俺は観覧車の時に限って男と当たるんだ……」

そしてその後ろからゾンビのような龍鶴が続いてきた。

「さて、そろそろいい感じに日も傾いてきた事だし、帰りますか」

その桐垣の言葉に、俺たちは出口に向かって歩き出す。

そしてその道程、

「ところで湮亜」

「なあに？　薫ちゃん」

「ゴンドラの中で、矢城はどうだった？」

……なんだか不穏な会話が横から聞こえる。というか坂上。その質問はちよつと曖昧すぎないか？

「ん〜すごく優しかった……」

そして東もそんな湿っぽい声でそんな事言わないでくれ。そういう事をするとか、

「くお〜お〜ずい〜……」

ほら、ゾンビ化してた龍鵠が俺に絡んできて、

「きさま……観覧車のゴンドラの中という限りなく稀有かつ幸せな密室空間において湮亜ちゃんにあんな湿っぽい声で優しくしてもらったなんて言わせるからにはもう三途の川を渡河する準備は万全と見ていいんだろうなあ……！！」

「あ〜もう……」

「『兵半ばを渡らば撃つべし』と孫子はのたまうたが俺は敢えて渡河前の貴様の軍勢を叩く！！三途の川を経由せずとも地獄へと叩き落としてくれよう！！」

絶対に俺が疲れる展開になるんだよなあ……。

「この前の勝負は時間切れの引き分けとなったが今日の俺は三昧くらい違うZE！？何故なら時間の制限がここにはないからさあ！！」

この前のカタカナよりは読みやすいけど、読点一つくらい置こうぜ。

「はっはー実にいい気分だ！！俺は人間を超越してしまったのかいkoujiよ！？今なら一秒間にありえないくらいの長いセリフも吐けそうだぜ！？喰らえTHE・ドリーム（妄想）！！」

「ああうぜえ！！」

そして、またよく分からないモノを展開しだした龍鵠に立ち向かう俺。

「おお、氷室の第二の特殊能力が目覚めたぞ」（桐垣）

「これは面白い事になりそうだな」（坂上）

「……晒しものね……」（天笠）

「がんばってね、功司君」（東）

お決まりのようにそんな俺と龍鵠を遠巻きに見ながら好き勝手言

いまくるディアフレンズ。

「ふっふーん功司貴様という奴は！ 俺との戦闘途中だというのに  
淫亜ちゃんからそんな励ましの言葉を受け取るって事は俺に対する  
挑発だよなあいや例えそうでなくとも君がッ！ モテなくなるまー

ー」

「うつせー!!」

「ぐほあ！？ 貴様は大事なセリフ途中に俺を殴った！ つまりお  
前は俺を怒——」

「寝てる!!」

「ぶべらあ!!」

…… なんとかいうか。

こんな騒がしい毎日がいつまでも続けばいいのにな……。

### 第三章：五月二十二日水曜日の出来事

キンコンカンコン……

二時間目の始まりを告げるチャイムが校内に響き渡る。そしてその音聞いたクラスの面々は、各々の机へと戻っていく。当然俺も自分の席——窓際が一番後ろの席——に戻る。

それぞれが自分の席に着いた状態でザワザワと騒がしい教室。先生が来るまでのほんの一時を楽しむ声。次の授業の先生はこれが駄目だあれが駄目だと批評（というか批判）している女子のグループ。どこにでもある日常の一ページ。人に言わせれば他愛もなく、かけがえないもの。

だが。ここにあるのはいわゆる特別な物語。そして俺はその主人公なのさ！！ はーはっはっは——！！

高らかに笑い、窓に向ってビシッと指を突き立てる俺。

「……何……やってるの？」

そして隣の席の湊亜にものすごく可哀想な目で見られる俺。

と、そこで二時間目の授業の先生が教室に入ってきた。教室内のざわめきも若干収まる。そして日直の号令。起立、礼、着席。

「いや、ちよつと……ね。ほら、話の方向性っていうかその辺り？ はやっぱり明確にしておいた方がいいでしょ？」

着席してから、湊亜にそう微笑みかける俺。

「え、ちよつ、何？ ホントに大丈夫？」

更に哀しみと気味の悪さをブレンドした目で見られ、本気で心配される俺。後悔なんてしてないよ？ むしろ嬉しいさ。

「ふふふん。心配しないで。俺は至って平常だ。なんてったって主人公だからな」

窓の中の湊亜を指して言う。この行動に特に意味はない。強いて言うならなんかカッコいいから。

「先生。なんだか危ない病が発病してしまったようなので保健室に連れていった方がいい人がここに……」

おいおい。人を危ない人間みたいにいわないでくれＹＯ。

「重症です。今すぐカウンセラーの方を……」

だから大丈夫だって。それに、名前も無いようなサブキヤラ先生に台詞なんか出させると、色々ややこしくなるぜ？ この文。

「もうオペが必要かもしれません。早急に救急車を——」

言い切る前に、ポン、と湊亜の右肩に隣の席の桐垣の手が置かれる。そして桐垣は彼女の顔を見ながら首を振る。

「東さん。そいつは、いつもそうなんだ……。これ以上は深く突っ込まないでやってくれ……」

「そ、そんな……もう手遅れだと言っの……？」

桐垣は軽く目を伏せ、目元を拭う仕草をした。

「ああ……残念ながら……」

「そんな……」

湊亜も顔を伏せ、悲しそうな声を出した。

「氷室 龍鷯はもう、正常ではない……」

「なにやってんだか……」

そんなやりとりを後ろの扉の一番近くの席から頼づえつきながら見ている俺——矢城功司。そしてその左隣に坂上。更に左に行って桐垣、東、龍鷯。天笠は俺の前方の席。

うーん、席替えしたっていうのに、なんだかあの辺変わってないな。

「……で、もういいのか、お前たち」

二時間目の授業の先生——室見先生が茶番に水をかける。

「はい」「ええ」

前者は東、後者は桐垣のもの。そして当の龍鷯は……

「いや、もう少し主人公の気分を……」

いや、それは無理だな。つか色々ツツコミたい事あんだけど、いかな？

「却下だ」

室見先生の即断により、俺のツツコミをいれるタイミングは無くなってしまったようだ。ついでにそこでショックを受けている龍鶴が主人公になるチャンスも。

まあ……現役主人公から一言いわせてもらうと、主人公になるにはせめて俺よりも高い国語の成績を収める必要があるぞ。語彙力ないと務まらないからね、主人公。

「じゃ、そろそろ真面目に授業開始といくか」

室見先生は教科書を開いて（ちなみに担当教科は現代文）、黒板にいま読み説いている作品のタイトルを書き出した。

「つて、あつ、やべ……」と、その途中で動きが止まる。「しまった、これこの前の授業で来宮に借りてたやつだ……」

そしてそんな事を呟いた。……たしかに室見先生の持っている教科書の背表紙には『来宮 梢』という文字が書かれている。

（あれ、どこかで聞いたような気がする名前だ……）

というかそんな疑問より、教師が生徒の教科書借りんなよ。あまつさえ返し忘れて普通に使うなんて……。

「あーしまったなあ、たしか3-Dの今の時間は……町馬さんの現代文だったよなあ……」

室見先生のぼやきを聞く限り、どうやら来宮梢という人は現在現代文の授業中。そしてその彼女の所有物である現代文の教科書は室見先生が持っている。加えて町馬先生と言えば趣味がボクシングの忘れ物に対する罰則がめちゃくちゃ厳しい先生。それには列伝がある。俺が転校してきて間もない頃に、龍鶴が教科書を忘れた事があった。その事を聞いた町馬先生はマジギレ。そしていきなり壁を殴りつけ（ちなみにその壁にはひびが入りました）、合計二十枚にもおよぶ反省文を書いてくるように言われるという事があった。それ以来、その先生の授業での忘れ物、遅刻が無くなったのは言うまで

もない。

「まあいいか」

って、いいのか！？ あの町馬先生の授業で教科書を忘れるというんだぞ！？ いやその前に人として！！

「大丈夫だろ、来宮なら。あいつは肝も据わってるし、普段からしつかりしてるし。それにきつと今頃俺のせいにもして、上手くその場を凌いでるさ」

そう言っただけで室見先生。

「……………」

その言葉に、生徒一同呆然。だめだ、この人はあの先生の恐ろしさをちつとも理解していない…………。

…………その二分後、『ドンツー！！』という音と共に教室が少し揺れた。

とりあえず合掌しておこう…………。

「うーし、今日の授業はここまでだ」

という室見先生の言葉と同時にチャイムの音。

「きりーっ、れーい」

『ありがとございました』

間延びしたやる気のなさげな日直の号令と共にクラス全員が頭を下げる。

「はいはいどういたしまして」

室見先生もやる気なさげにそう言っただけで、教科書を持って教室を

——ダダダダダダ、スパアーン！！

「室見先生！！」

出て行こうとしたら唐突に、勢いよく教室の扉が開け放たれた（教室のドア開くときって『スパアーン』なんて音するっけ？）。そしてものすごい勢いで一人の小さな女生徒が教室に入ってきた。

「室見先生！！ この前先生に貸した教科書、返していただいてな

いですよね!？」

「ああここにあるぞ」

突然現れた乱入者に悪びれも驚きもせずに平然と返す室見先生。

「いやー悪かったなあ、来宮。返すのすっかり忘れてた」

そして反省の色は微塵も見られない口調で笑いながら教科書を来宮と呼ばれた生徒に差し出す。

「……………」

対する来宮梢さんであられよう人は、黙ったままプルプルと震えている。

「いや別にわざと忘れた訳じゃないぞ? いやマジマジ。別に町馬さんの教科書忘れた時の反応が面白かったりそれをお前に対峙させたらより一層面白くなるなんて事はこれっぽっちも考えてなんかいないぞ?」

……きつと本当に思ってたなくて今思いついて、面白い事になりそうだから言ってるんだろうけど……絶対に来宮さんはそうとらえないなあ。だって室見先生、顔が引きつってるもん。あれ絶対笑い堪えてるよ。

「あなたはあ……………」

「ん?」

「あなたは、これで、何、回、目、だあ——!!!!」

今まで黙っていた来宮さんは、教室がひっくり返るんじゃないかと思うほどの大声で叫んだ。

「そもそも一年生の時に私が校内で迷ってた所をあなたに助けてもらったのが間違いだったんだ!! それからという私の私に会う度会う度『よう、今日は一人で大丈夫か?』とか子供扱いしまくった拳句『あ、やべえ教科書忘れた。……取り行くの面倒だから、来宮、お前の貸して』って……!! お前の方が子供じゃないか!!」

そして矢継ぎ早に文句を。すごい早口で。しかも途中から先生の事お前呼ばわり。

「はははは、懐かしいなあ」

「私は笑えない！！ 大体お前は本当に教員免許持ってるのかそんなずばらな人間が取れるほど軽いものなのかそれは！？」

「そこはそれ。秋葉学園の七不思議（笑）」

「（笑）じゃな——い！！ どこまで私をおちよくるの！？」

その言葉を聞くと、室見先生は滅多に見せない真面目な表情になった。

「俺はお前の事をおちよくってなんかいないさ」

「う……」

そんな室見先生の様子にたじろぐ来宮さん。

「これは、いわばお前への『愛』だ……」

「……………」

おおすごい。あんなセリフを真顔で吐けるなんて。来宮さんもついに黙ってしまったぞ。

続いて室見先生は少年のような笑顔を浮かべて、

「ほら、小学生とかって好きな子とかいじめたがるじゃん？ それと一緒」

「って結局お前の方が子供じゃないか！！」

…… また来宮さんに怒鳴られてた。

ちなみに我がクラスの面々はそれを遠巻きに、温かく見守っている。いや、端から見たら父親に文句言ってる子供みたいでなんか微笑ましいんだもん。

「功司君……」

「ん……なんだ、東……」

「幸せて、ああいうのを言うのかもね……」

「そうだな……」

と、なんだか俺と東の間に温かくな空氣が蔓延中。普段なら即行ごまかしに入るが、今はなんとなくそんな気分じゃなかった。

「あーわかったわかった。俺が悪かったって」

「うー」

どうやら勝負がついたようだ。結局、室見先生が大人の貫録で負

けを認めたようだ。

「ほい、教科書。ありがとな」

「……………」

それにそっぽを向いて教科書を受け取る来宮さん。………そういえば、かなり今さらだが、どこかで見た事あるような気がする。

「……………」

はて、どこで見たんだっけか。なんか会話もしたような気もするけど……………。

「……………あ」

思い出した。そうだそうだ、あれはたしか新学期早々生きている喜びを感じられた時の倉庫の中で事だ。そういえばそこで話したなあ。

「あつ……………」

「ん……………」

そんな事を思い出していると、来宮さんと目が合った。

「あ……………！！？」

「え？」

そしたらなんか指さされて驚かれた。

「あなた、矢城功司……………あの時の……………！　なんであなたがここに！？」

「え、いやなんでもなにも……………俺、このクラスだし」

「矢城、来宮とは知り合いだったのか？」

「あー知り合いというかなんというか……………」

んーなんて説明しよう。というか知り合いなのか？　互いの名前知ってるくらいだぞ俺ら。

「えーと……………」

とりあえずあつた事を包み隠さず——いややっぱり少し脚色して話してみる事にした。

まず俺の命が危なかったかの抗争の時、俺は倉庫の中に隠れていて、そこで来宮さんと邂逅した事。で、なんか蹴られまくった事。

「それはあなたが悪いのでしょうか!？」

「いやだからあれは不可抗力だって」

「不可抗力って?」

「……秘密だ、東」

話を続けよう。

そいでじゃあつてたら、とりあえず俺を追う方々の気配がしたのでロッカーの中に隠れる事にした。

「……………」

「どうした来宮。顔が赤いぞ?」

「うるさいエセ教師……………」

そしてロッカーの中に来宮さんと隠れる事二、三分。どうやら追手たちはどこかへ行ったようなので狭苦しいロッカーから脱出。

「……………」

「……………」

あれ、なんか東と室見先生からの視線が痛い……。で、その後チャイムが鳴ったのでその場で別れた。

「以上が来宮さんとの邂逅だ……………った……………?」

あれあれ、なんか周りからの視線が痛いのですが……………?

「功司君、一つ質問いいかな」

「な、なんだい、東」

「ロッカーの中には、来宮さんと一緒に隠れたの?」

「あ、ああそうだが別にやましい事を考えてた訳じゃないぞ? それは相互の安全を図るためにだなあ……………」

「功司」

と、今度は龍鷯に話しかけられる。

「お前は……………」

「な、なんだ?」

「お前はどれだけフラグ立てれば気が済むんじゃ————!?!?!」

「うわ、ちょ、待て龍鷯!?!」

そしていきなり肩を掴まれ揺すられる。それも激しく。

「そうだね、功司君はちょーっと、調子に乗りすぎてるかなあ……」

背後から、真正銘の死亡フラグを携えた東がユラリと現れた！

「矢城……流石にそれは俺でも戴けない事だな……」

龍哉の後ろにニヤニヤした室見先生が現れた！

「……女の敵ね……」

俺の右側にすぐく不気味な気をまとった天笠が現れた！

「くくく……これは楽しい事になりそうだなあ……」

俺の左側に不敵に笑う坂上が現れた！

ヤバい、正に四面楚歌状態！！くおお、彼の項王もこのよう

な苦渋に立たされていたのか！！

「ていうか来宮さん！ヘルプミー！！」

残った援軍となりそうな来宮さんに助けを請うが、

「う、わ、私は……知らないわよっ」

赤くなつて逃げ出してしまった！！

「き、桐垣！もはやお前しかない……！！」

今まで黙って成り行きを見守っていた桐垣に助けを――

「……主人公は往々にして様々な災厄が降りかかるもの。先ほど自分で『俺、主役』と仰せられたからには、これは天意かと存じ上げられます。然るに、私のような脇役などの出る幕もなく、私程度の者にこの境地は救えませぬ。君を救うは天意のみかと」

「何時代の人間だお前は！？」

――乞うが一蹴された！！

「覚悟は出来たの？功司君」

うなじ付近に息がかかるほどの距離から甘い声で東が！！

「何気ない出来事でフラグを立てまくる人類なんてのがいるから脇役が苦勞するんだ……」

顔に息がかかるほどの距離から低い声で龍鶴が！！

「女の、て・き……」

右耳に息を吹きかけながら囁く天笠が！！

「ふふふふ……はははは……」

背筋を『つー』と指でなぞりながら坂上が！

「さすが矢城だ。俺たちにできない事を平然とやってのける」「でもそこに痺れないし憧れないのはなんでだろう」「それは多分犯罪だからだよ。あんな見た目中学生の女の子とロッカーに入ったら……」「あーうん確かにそうね。今いろいろ厳しいもんねえ」「でもそれを敢えてやるとは……あいつは真の漢だな」「オレは矢城を支持するぜ？ 是非とも“ロリロリハンターズ”に迎え入れたい逸材だ」「……なんだその仲良し五人組のリーダーが考えたような団体は……？」「えーそれ引くわあ」「我らをバカにするな。我らは美少女の未来を考えてだなあ……」「お前らがその子たちの未来を摘んでしまいそうで怖いよ」

周りの愛すべきクラスメートたちは思い思いの事を言っている……！  
「ていうかなんだこの状況！？ みんな俺で遊んでないか！？」

「天意だ」

龍鷲の後ろに控える室見先生にそう告げられた！！ それ否定してないですよ意味的に……！

——キーンコーンカーンコーン……

とか何とかやってるうちに三時間目の始まりを告げるチャイムが鳴り響く。

「あーやべ授業始まつちやったよ」「次の授業なんだっけ？」「化学の実験じゃないっけ？」「あーそうだそうだ」「急ぎましょ。矢城君はほつといて（天笠）」「そうだね」「そういえばこの前発売したギヤルゲ、誰ルトクリアした？」「もう全クリアしたさ（龍鷲）」「ほお、流石二次元の申し子、氷室龍鷲だな（桐垣）」「よせやい、照れるだろ？」「ねえ薫、実験って何やるんだっけ？」「たしか化学反応がどうたらこうたらとか言ってたような気がする（坂上）」「それじゃ、功司君も遅れないでね？（東）」「お前ら少し急げよ。俺はのんびり行くけどな（室見先生）」「それ職務怠慢じゃないすか？」

……そしてみんな神速をもってして俺を置いてけぼりにする。ち

なみに俺は次の授業の準備を全くしていないわけで。

「……………」

ここで一句。

教室に 一人寂しく ロリ容疑 我が衣では 露に濡れつつ（矢  
城功司、心の短歌）

対訳。

教室に一人寂しく取り残された俺にはあられもないロリ容疑が。  
あまりの悲しさに、俺の制服の袖は涙で濡れてしまった。まさに濡  
れ衣。

「……………」

余計に寂しくなった。

「ていうかなんだこの敗北感は……………」

俺は次の授業で使う教科書とノートを持って、一人寂しく実験室  
へと向かった……………。

トボトボと実験室に向かう途中、もう箱庭の中に入ってプチ遭難  
しようかと考え始めた頃、桐垣と龍鶴が特殊棟への渡り廊下で待つ  
ててくれていた。それに思わず涙しそうになったのは秘密だ。

### 第三章：2 材料の分量には気を付けましょう

「——というわけで、各班で実験を始めてください」

実験室の少し大きめの黒板に今日の実験の手順を書き、それを逐一説明し終えた化学の中村先生はそう言くと、今日の実験で使う化学物質が置かれた机のイスに腰掛けた。

にわかに騒がしくなる教室。この先生は方針で、実験を行う際は生徒各自の自主性を重んじるため自分は何も口出ししない、という事を唱えているので、これから実験終了までは各自自由に動けるのだ。

「さてさて。ではどうするかね」

俺らの班もその崇高なんだか怠惰なんだか分からないがとりあえず実験授業を生徒に一任するなよ的な方針に従い、材料を取りに行ったりする役割分担を決めようとする。

「とりあえず役職を決めないと話にならないな。という訳で、俺が総司令な。で桐垣に参謀を命ずる」

と、場を仕切ってくれる御原。こいつは戦国歴史関係の本に精通していて、こういった場面では自らが総司令という名の班長になってくれる為、俺みたいな状況に流されタイプの人間にはありがたい存在だ。でも何故か影が薄い。この事を本人は「俺はギャルゲでセリフはあるけど立ち絵とボイスなしのキャラみたいなもんだから」と言っている。

話を戻そう。

「ふ、任せろ」

御原の言葉に乗る桐垣。

「氷室は実験器具を取りに行ってくれ。ナトリウムとアルコール類は宮野に任せる」

続いて龍鷲と宮野に指示を出す。指示を受けた二人は了解し、それぞれの役割を果たしに行く。それを見送ると、御原は自分のノー

トを開いて実験手順を確認しだした。

「おい御原、俺は？」

「お前には俺から指令を出そう」

と、一人なにも指令されなかった俺の隣に桐垣。

「矢城、お前には特別な役目を与える」

「特別な……役目？」

「ああ。あそこで退屈そうに小説を読んで弱授業放棄気味な中村先生からマグネシウム二百グラムをもらって来てくれ」

「え、いや……マグネシウムなんて今日は使わないじゃ」

確か、今日の実験はアルコールとナトリウムの反応を観察する実験だった筈だ。ならマグネシウムなんて使う余地ないんじゃ……。

「くくく……だから言っているだろう？ “特別な指令”だと」

「特別って言われても……いくらあの中村先生でも実験で使わない物質なんかくれないだろ？」

俺のその言葉を聞くと桐垣はニヤリと笑った。……俺の経験上、なんだかこの笑顔を見た後ってロクな事が起こらなかった気がするんだが。

「当たり前だ。教師とは生徒の安全を責任する義務がある。それを怠れば、その生徒だけではなく自分にまで火の粉が降りかかる。故にどんな教師であろうと普通ならば行き過ぎた行動はしないだろう。だが何事にも例外はあるという事だよ。善悪の是非はないとしてもな」

「ふうん？」

なんだか最後の方はかなり皮肉な言葉だった気がするがこの際は聞き流す。

「そこで、今回はその例外に頼ることにする。……矢城。一度要望を言い、断られたら『枝先の木の実を供える』と言え」

……え？

「……は？」

何？ 木の実？

「『枝先の木の実を供える』、だ」

「……それになんの意味があるんだ？」

「通じる者には通じる。では頼んだぞ」

「あ、ああ……」

よく分からなかったがまあ、頼まれた事だ。断る訳にもいかないか。

俺はそう思つて、退屈そうに読書中の中村先生の元に向かった。

「なあ桐垣」

「なんだ御原」

「今の言葉つて、ローライズアーミーの合言葉じゃ……」

「ああそうだ。校内三大勢力の一角、子供の味方の親衛隊の合言葉だ」

「やつぱり……」

「なぜ分かった？」

「いやだつて、『枝先の木の実を供える』つて、来宮梢の事だろう？」

「ああそうだ。枝先とは梢、供物は神仏にするもの。神仏がいるのは神社や社、転じて宮。そして供えるのは木の実だ」

「……あれつてもととは彼女のファンの集まりみたいなもんだつたらしいし……少し考えれば分かるだろう。ここに一年も通つてる人間なら」

「ところが分からない人間もいるのだよ」

「ああ、功司ね……。あいつは少し純粹すぎないか？俺は将来、あいつが悪い商売に騙されそうで心配だよ」

「自分でやつておいてなんだが、俺もだ」

「だよなあ……。それにしても結構ムリがないか、この合言葉。なんで木の実だけ当て字なんだか」

「まあこういったものの合言葉なんて訳の分からんものの方が多いだろう」

「そついうものか」  
「ああ」

さて、桐垣の名に従って中村先生が陣取っている机にまでやって来たが……

（声かけづらい……）

授業そっちのけで本を読み、ページをめくる度に表情をコロコロ変えている。こんなに楽しそうに読書している人に話しかけるのって、結構勇気いるよな。

（……なに読んでんだ？）

少し気になったが、先生が読んでいる文庫本にはカバーがかかっている、どんな内容の本を読んでいるかは分からなかった。

「あの、中村先生？」

こんなところで時間を浪費している訳にもいけないので、意を決して話しかける。

「……ん、なんだ矢城」

俺の発声から二秒弱のタイムラグを要して反応する中村先生。しかし本から目は離さない。

「先生は見ての通り、なかなか忙しいんだが」

「いや本読んでるだけじゃん……」

と、思わず素でツツコミを入れてしまう。

「そんな事言うな。先生はなあ、実は小説家になりたかったんだ」  
「いや知りませんって」

なおも本から目を離さず、そんな昔の夢を語られてしまった。

「……本題に入ります。えーと、マグネシウム二百グラムを下さい」  
俺は溜め息を一つ吐くと、単刀直入にそう頼んだ。

「はあ？ マグネシウム？ 何に使うんだそんなもん」

「さあ……」

そんな事は桐垣に聞いてくれ。俺はマグネシウムを貰ってくるよう頼まれただけなんだから。

「今日の実験で使わないし、用途も分からないのにそんな物渡せるか。いくら俺でも、そんな事すると上がうっさいから断る」

……まあ、予想通りの正論が返ってくるわな。こんな怠惰な人でも、教師は教師だし。

（という事は、あの謎の言葉を使わないといけないのか……）

若干の抵抗はあったが、とりあえずその言葉を使ってみる事に。

「……『枝先の木の実を供える』……」

「！」

ガバツ、と。今までずっと本から目を離さなかった中村先生が顔を上げ、俺の顔を見る。

「矢城、お前……」

「……………」

いきなりの反応の変化に着いていけない俺は黙ったまま、先生の顔を見返した。

「……そうか、天命か……」

（……天命？）

「ならば持つていくといい。少し待つてくれ」

中村先生はそう言うと、本に槌を挟み、実験準備室の方へ。

「……………」

未だにこの豹変ぶりに着いていけない俺。ていうか何があの人を変えたんだ？ 『枝先の木の実を供える』って一体……。

その謎について考えていると、準備室から中村先生が戻ってきた。

「ほい、これが約束のブツだ」

そう言って俺の手に渡されるマグネシウム二百グラム相当。

「あ、ありがとうございます」

「いやいや。お役目ご苦労さん」

「は、はあ……」

中村先生はそう言うと、また読書に耽っていった。

「桐垣」

「おお戻ったか、矢城。どうやら任務も無事に果たせたようだな」

今しがた中村先生から受け取ったマグネシウムを手に、自分の班まで戻ると、既に実験は開始されていた。

「なあ、さっきの言葉の意味って……」

マグネシウムを桐垣に渡しつつ、その事を尋ねると、

「世の中には色々あるのさ」

「色々って……」

とはぐらかされ

——スポオン！

いきなり爆発音。それもすぐ近くで。

「……………」

「……………」

驚きの余り開いた口がふさがらないまま音のした方を見る俺と、冷静に状況把握をしようと音のした方を見る桐垣。視線の先には――

「あー、やつべえメタノールの量間違えちゃった」

「すまん、ナトリウムもかなり量が多かったようだ」

試験管を逆さまに持った龍鶴とマッチを持った御原。そして驚いて硬直中の宮野。

シーンとした教室の中、中村先生がページをめくる音だけがやけに大きく聞こえた。

### 第三章：3 平和なお昼休み

「功司君、お弁当食べよ」

化学の実験の混乱も中村先生のやる気なさげな言葉で收拾され、四時間目の体育（男女混同ドッジボール）においては坂上の味方がアウトになるたび発動する『体を通して出るナニカ』的な能力で勝ち上がった。そんな楽しい体育も終わり、現在昼休み。という訳で、待望のお弁当タイムである。

そして、いつもの様に東が俺の席までやってきてそう言う。

「フフフ……幼馴染みな女のコと二人つきりでお弁当タイムなんて、神が赦そうと俺は赦さん」

続いて龍鶴がやって来る。

「ではその三角関係に新たなる勢力を加えよう」  
でこれが桐垣。

「……別に、一緒に食べてあげない事もないわでも勘違いしないでね別に私はあなたの半径1メートル内で同じ空気を吸っていたい訳じゃないから」

この微妙な言い回しが天竺。

「失礼」

この短い言葉は坂上。

と、そんなこんなでいつも通りに何故か俺の周りに集まって、俺は何も言っていないのに周辺の机をくつつけて各々の弁当を広げるデИАフレンズ。ていうか何でいつも俺の机？ 位置的に桐垣の席が一番中心じゃん。

「どうかしたの、功司君？」

「……いや別に」

まあいいんだけどね。むしろ嬉しいし。たまに煩わしいけど。

「……ツンデレね」

「は？」

「あなたの性格」

と、天笠に何故かツンデレの烙印を押されてしまう。

「いや俺のどこがツンデレ？」

「微妙な事で可愛く意地を張るところと本心を隠すところ」

「あー分かるかも」

そんな天笠の俺ツンデレ説に賛同する東。

「いや全然分からないんだけど」

「そう。なら今度、クラスでアンケート取りましょう」

「いや是非とも遠慮したいんですけど」

何その新手のイジメ。

「ツンデレかどうかは置いておいて、確かに矢城は素直じゃないな」

「確かに。理亜ちゃんみたいな可愛い幼馴染みがいるのに全然嬉しそうじゃないところとかな」

「はあ……」

そんな桐垣と龍鶴の言葉にどう反応していいか分からない俺。

「で、実際どうなんだ、矢城」

「何が？」

桐垣の質問に質問で返しながら弁当箱を開く。お、今日は鶏の唐揚げがある。

「東さんの事だ」

「東がどうしたって？」

目の前に東がいるんだから東に聞けばいいじゃないか。ってこのドライカレージャマイカ風味、タッパから漏れてんじゃん。うわーどつりでさつきからカレー臭がすると思った。

「お前が東さんを可愛いと思ってるかどうかな」

「……はっ？」

と、バックの中に少し漏れていたドライカレージャマイカ風味の処理をしていたら、そんなキラークラス的地雷的な言葉が。

「ああ確かにそれは気になる事項だな」

「え……いや……」

その流れにすかさず乗り込み、俺の方に顔を向ける坂上。対する俺はどうすればいいのか分からず口ごもる。ていうか本人いる前でそんな事聞くなよ。

「で、どうなんだ実際。もし可愛くないなんて言うようなら俺はお前を斬る。可愛いと言うようならお前を潰す」

「……あー……」

どうすりゃいいんだよ。どう答えても俺が散々な目に遭うこと請け合いじゃないか。

俺は思考を中断して、チラッと東をしてみる。

「……………」

「……………」

……言葉に詰まった。

東はうつ向き加減で上目遣いに、そして少し不安そうな表情で俺の方をチラチラと窺っていたようで、俺と目が合うとものすごい勢いで顔ごと目を逸らした。

「……なんていうか」

……やっぱり可愛い、よな……いや別にこれは客観的世間的に東の容姿やら仕草やらを検討した結果であって決して私心は交えていない順当にて純正で正確な多角度からの感想であるから俺個人の意思は微塵もとは言わずともほんの少し猫の額というかミジンコくらいの等身大はあるとは完全否定できないけどとりあえず東は可愛いということだ。

「いやほら、本人の前でそういう話題は……」

なんて長つたらしい言い訳含む承認など言えるわけもなく、俺は無難にヘタレに安全な道に逃げ込むことにする。

「意気地無し」(天笠)

「ヘタレだな」(桐垣)

「主役失格」(坂上)

「もう俺が主人公になるべきだな」(龍鷲)

結果、散々な言葉を投げつけられる俺。ていうかなんの罰ゲーム

だよこれ。

「……………」

一方の東は、安心したような少し残念そうな表情をしている。…  
…そういう顔も可愛いんだけど、やっぱり笑ってる時とか安心した  
表情とかのが好きだな。

「……ツンデレ」

「はい？」

そんな決して人前では言えない感想を胸に抱いていると、またも  
や天笠にツンデレ疑惑をかけられる。

「素直じゃないのね」

「……………」

もう放っておいて下さい。あとアナタ、俺の思考読めてないです  
か？

「気のせい」

果たして気のせいで済ませていいのだろうか、この疑問を……？  
とか思わなくてもないけれど一先ずは気にしない事にして、俺はバ  
ツクに漏れたドライカレー ज्याマイカ風味の処理に専念した。

「そういえばさ、みんな弁当ってどうしてる？」

ドライカレー ज्याマイカ風味の処理も終了し、ようやく俺が弁当  
にありつけた頃、龍鷲がそんな話題をみんなに振ってきた。

「どうしてるって？」

「いや自分で用意してる娘ってポイント高いなと思ってまして」

つまり自分で作ってきたのか親が作ってくれたのか、という事を  
聞きたいんだな。

「という訳でまず理亜ちゃんいつてみよー！」

何故かハツラツしだした龍鷲は行儀良く弁当を食べていた東に質  
問の矛先を向けた。

「えっ、私？ 私は一応、手作りだけど……」

「グッド！！！」

東の答えを聞いた龍鵠はそう叫んでグツと親指を立てる。

「あれ、お前の弁当って自分で作ってたんだ」

今時の高校生にしては珍しい——というかよくそんな時間があるな。それでいて家の前で俺を待つ余裕があるとは。

「まあいつもじゃないけどね。気がつくとお父さんが作ってたりする事もあるし……」

と、どこか遠い目をする東。

「……………」

なんとなく、俺は東の遠い目の先に映っているだろう人物が分かる。きつと自分の父親の姿だろう。しかもエプロンなんか装着して鼻歌混じりの上機嫌で台所に立つ姿を。……おじさん、めちゃくちゃ親バカだもんなあ……。もう十年近く前に会ったつきりだけど、会つ度「理亜が理亜で理亜を理亜なんだ」とか理亜ってずっと言うてた気がする。

ふと、遠い目をしていた東と目が合う。

「……………」

とりあえず目だけで『お前も大変だな』と伝える。

「……………」

すると、『もう慣れたから』と苦笑いしながら同じく目で伝えてきた。

「以心伝心してんじゃねえ——！！」

そんな東と俺の間に入り込む龍鵠。

「いや以心伝心なんかしてないんだが」

「そうだよ。ちょっと目と目で語り合ってたただけだよ」

「人はそれを以心伝心と言うと思うのだが」

冷静な坂上のツツコミ。ごもつともです。

「で、そういう坂上は——」

「見ての通り。コンビ二のオニギリやらサンドイッチやらだ」

言った通り、坂上が手にしているのはコンビ二製品らしくキツチリと三角形にされ、パリパリの海苔が巻かれたオニギリ。それを妙

に可愛らしく食べている。なんかリスみたいに。

「前々から気になってたんだが……すごいギャップを感じる……」  
「癖なんだ。気にしないでくれ」

どんな癖だよ。

「いいじゃないか、功司。ギャップは偉大なんだぞ？ ツンデレ然りヤンデレ然り、そのギャップに男は弱いんだ」

「……………」

確かに目の前でオニギリを頬張っている坂上は、新鮮で可愛く感じる。が、それで龍鵠の説を認めるのは少し悔しい。

「ていうか、龍鵠も毎日買い弁だよな」

という訳で話を逸らす事に。

「ああ、俺一人暮らしだし」

「……はっ？」

初耳なのですが。

「そっぴや功司と理亜ちゃんは知らなかったな。俺、現在一人暮らし中」

「……金は？」

「親から仕送り。いや、我が家はけっこう金持ちだから」

そうだったのか。全然知らなかった。この歳で一人暮らしとは……

……なかなかの生活スキルを保持してるんだな、こいつは。

激しく意外だ、と驚きつつ龍鵠を少し見直——

「フフフン、そして学生で一人暮らしオア寮生活はギャルゲないし『登場人物は全員十八歳以上です』なゲームにおいての主人公設定……！ 一つ屋根の下で美少女と同棲……！ フハハハハ、今に主役交代だな功司よ……！」

——せなかった。むしろ株が大暴落？

「攻略対象が不在だけだな」

とりあえずそう言うておく。

「ぐっ……痛いところ突いてきやがるな、今日の功司は……。だがッ！ ここには今現在三人の攻略対象（予定）がいる……！」

「夢の見すぎね」

「ぬぐ……ならば薫ちゃん!!」

「興味ない」

「ぬぐぐ……でしたらば理亜ちゃん!!」

「えっ、なに? ごめん今聞いてなかった」「ぎやらばっ!?!」

で、結果は全滅。まあ予想通りと言えば予想通りなんだが……不憫な奴だ……。断られるならまだしも、東に至っては聞いちゃいな  
いし。

「安心しろ、氷室」そこで今まで黙々と弁当を食べていた桐垣が口  
をはさむ。「まだ矢城が残っているぞ」

「嫌じゃそんなゲームジャンルは!!」

俺だつて嫌だ。

「ていうか、桐垣」その事にはもう何も言うまい状態を維持しつつ、  
理由は分からない方が幸せであろう視界の片隅で箸を持ったまま硬  
直している東を捉えつつ、今までずっと、転校してきて一緒に弁当  
を食べるようになってから未だに聞くに聞けず先送りになっていた事  
を話を逸らす意味でも質問する。「お前の弁当箱、なんでいつも重  
箱なんだ?」

「あらやだ矢城君てば、今さらそんな重箱の隅をつつくような事を  
聞くなんて」

「いやそんなうまい事言えなんて言っていないから」  
ていうかその女の子喋りやめい。キモいから。

「もう、イケずなんだから」

「だからやめろっつーの!」

「まあそう憤るな。ほら、クラスに一人くらい弁当箱が重箱なんて  
キャラがいた方が楽しいだろ?」

それはどんなキャラなんだ——ていうか。

「……………(じー)」

東の、俺を見る視線がかなり気になる。……ここは無視した方が  
賢明か……?」

「どんなキャラか、だと？ お前の目の前にいるじゃないか。この桐垣秀知三十七世こそがそうだ!!」

「なんだ三十七世って？」

「……………（じー）」

……………無視だ無視無視。

「それがキャラだ（キラリ）」

「わけわかんねえよ！」

「む……………分からののか。ならば一から説明しよう。まず——」

「……………（じー）」

「いや求めてないから」

「もうまったく。素直じゃないんだから、このツンデレさんは」

「誰がツンデレじゃ——」

「……………（じー）」

心なしか、視線に熱がこもった気がする。ヤバい挫けそう……。

「お前だお前。もう少し素直に生きてみる。オープンユアマインド」

「だが断る——」

「……………（じー）」

まだだ。こんなところで負けるわけにはいかない。無視するんだ

俺。あーそういえば重箱からどんどん話が逸れてってるなあとか考  
えるんだ。

「まったく……………もう半年近く付き合ってるのに、まだお前はツンな  
のか」

「……………（じ——）」

無視だ頑張れ俺。

「つ、付き合いは長さじゃなくて密度だと思っぞ!？」

「……………（じ——）」

「そんな、俺とお前の仲はそんなに軽薄なものだったのか？」

「……………（じ——）」

あ、ヤバいもう耐えらんない。ごめんなさい、神様。俺には無理  
です。桐垣と熱い視線を送ってくる東を同時に相手するなんて。

「……もう俺の負けでいいや……」

「フハハハ。これで三十八勝目だ」

俺のその言葉に、桐垣は高らかな笑い声を上げそう言う。転校してきて一ヶ月くらいから桐垣が勝手に始めたこの勝負、いまだにルールとか諸々が分からん。

ていうか、それよりもだ。

「……………（G——）」

今はこつちを熱い目で見ている東をどうするかが問題だ。

どうしよう。もうガン無視決め込んでみようかな。いやでもなんかそれはマズイ気がする。多分倫理的に。

「……………」

とりあえず東の目と正面に向き合ってみる。

「……………」

「……………あゝ、」

無理だ。これ無理。なに、こいつのこの瞳。ヤバいくらいにうつとりしてるから、なんかスゴく変な気持ちになってくるし。

「……………」

「……………」

でも頑張れ俺。ここで敗けたら真正正銘のゲームオーバーな気がするから。東の中でなにか良くない革新が起こって物語のジャンル変わるから。

「……………」

「……………」

……………「ごめんやつぱ無理——」

「功司……！！ 貴様、なに理亜ちゃんと見つめ合つと素直にお喋り出来ない状態になってんだあ——！！」

「うわっ」

「きゃっ」

と、そんな二人のすぐ横から、龍鷲の怒鳴り声。その声で正氣に戻る俺と東。

「そんな事、お父さんは許可してません！ ええ許可しませんとも！ この俺に春が訪れるその日までええ！！」

「うっさいいきなり人の耳元で怒鳴んじゃねえ」と、本来の俺なら言っていただろうが、現在はコイツのおかげで東が正気に戻ってくれたようなので何も言わない。

当の東はパチクリと瞬きを二、三回、そして今まで考えていただろう俺と桐垣の禁断のコミュニケーションを思い直したのか、真っ赤になってうつつ向いている。理由を考えなければ、その仕草はかなり可愛らしく見えるだろう。

「功司貴様あ！ 理亜ちゃんにあんな恥じらひアクションをとらせるって事は俺に滅されても笑顔で逝けるんだろぅなあ！！」

で、理由を考えないオア元より思いつかない奴にはそう見えていく訳で。

「よし覚悟が出来たようだな！！ 喰らえ、俺の右手が真っ赤に萌えるぅー！！」

「いい加減うざったいんじゃ黙ってるボケエ！」と、いい加減我慢出来ないから言う俺。

——キーンコーンカーンコーン……

そして四時間目の体育が少し長引いた為、異様に短い昼休みの終了を告げるチャイムが鳴り響く。

……俺、まだ飯食い終わってないんですけど……。

### 第三章：4 静かな時間

ひどく静かな時間だった。

今、俺の耳に聞こえてくるのは、チョークが黒板を叩く音とペンが紙を走る音、それから数学的崎先生の小さな声による解説ぐらいい。生徒は一切喋らず、半分は眠りの世界に。残り半分のさらに半分はぼーっと、何かを違う事を考えているようで、真面目に授業を受けているのは結局全体の四分の一といったところだろうか。

かく言う俺も、ノートこそ写してはいるものの、上の空で違う事を考えている。

そもそも、昼飯を食った直後の授業に数学を持つてくるのが間違いだろ。快活に喋る先生ならまだしも、小さな、しかもすごく聞き心地のいい声で喋るこの先生の授業で寝るなという方が無理だ。さらに崎先生、超マイペースだから寝てる人の事気にしてないし。「私の授業で寝るのは、まあしょうがないでしょう。休むよりはマシです。という訳で、どなたか寝てる方にノートを写させてあげて下さいね」とか明言してるし。その上で授業態度点、寝てる奴の点数ゼロにしてるし。

と、窓際の龍鷲などの授業態度点くらいどうって事はないと眠りの世界へ小旅行するクラスメイトを眺めつつ、俺はそんなどうでもいいことを考えていた。

なんだか時間の流れが緩やかになったかのような穏やかな一時。時折聞こえる崎先生の小さな声。

…… あ、ヤバイ。なんだかだんだん眠くなってきた。だが耐える俺。数学はいつも赤点候補なんだから。授業態度点ゼロはかなり大きいぞ。

俺は迫りくる睡魔の誘いを断ち切るため、何か考える事はないかと考える。

…… って、待て。もうすでに『何か考える事』を見つける為に考

えてるじゃないか。いやだけどこれは『何か眠くならなくて済むような方法』を見つける為の手段として、最も手っ取り早くやりやすい『何かを考える』という手段を用いている訳であって、この事を考えているのは必ずしも『眠くならない為に考えている』訳ではないハズだ。だからこれはその『眠くならない為の手段』ではなくて『眠くならない為の手段の探索』であって俺は今から『眠くならない為の手段』として採用した『何かについて考える』という行為の『何か』を見つける為に『考えている』訳であってこの考えは……ああもうなんか頭こんがらがってきた。

だけど目は少し覚めたぞ。ナイスファイト、俺。

「ん……？」

そんな小さな勝利に浸っている俺の机の上に、サツとノートの切れ端が投げ込まれた。

（……手紙？）

手紙？ には『そろそろ素直になつたらどうだ』と、それだけが短く書かれていた。

（……意味がわからん……）

手紙が飛んできた方——左隣の坂上の方に視線を移す。

坂上は意味深長に意味ありげに、俺に少し笑いかけると、すぐに顔を黒板へと向けた。

（……マジで意味がわからんのだが）

そう思ったが、いつまでも坂上の横顔を見つめながら、やっぱり美人だよなあ坂上は、とか考えている訳にはいけないので俺も黒板の方に視線を戻す。

「……あ」

と、少し目を離している間に、黒板には新たな数式が三個程書かれていた。

（やべーやべー）

慌ててその数式たちをノートに書き込む。が、その意味はまったく理解できていない。大体なんでこんな曲線からyとかxがいくつ

とか分かるんだ？

俺は静かに溜め息をついて、頬杖を突く。そして数式を頭の中から放っぽり出して、今の坂上からの手紙の事を考えてみる。

（素直になれ、ねえ……）

確かに俺は素直じゃない部分は多々あると思う。うん、それは認めよう。けどそんなな気にはならないような事ばかりだと思っし。……もしや、俺の気付かぬところで何か気に障るような傲慢ちきな素直じゃなさがあったのか？

「……………」

あるかもしれない。そりゃそうだ。何気ない一言がその人の心に楔を打つようなこんな時代なんだし。絶対に、とまでは言えなくとも、可能性はそこそこにあるはずだ。だとしたらそれは何だ？

「うーん……？」

あれか？ クラスで男子の評価が劣悪なぶりっ娘みたく「こいつわざとやってんじゃないかね？」みたいな不快感を与えてるとか？

「……いや……」

それだけはない。あつてほしくない。というかそう思われるのは絶対に嫌だ。

じゃあ何だ？

「ぬー……」

何かが絶対にあるハズだ。あんな意味深な手紙？ を寄越してくるくらいなんだし……。

ちよつと、視線を右の手首に落としてみる。

「……………」

そこにあるのは、曰くつきpromising。

（まさか、これの事じゃないよな？）

……それこそ絶対にありえないか。

（だとしたらば一体……）

「……矢城君？」

「え、あ、はい？」

と、その疑問の答えを見つけるべく頭を抱えていると、的崎先生から小さな声で話しかけられた。

「分からないところがあるなら、遠慮せずに先生に聞いて下さいね？ そんなに一人で悩んでいるよりは幾分かはマシになると思いますから」

「ああ、はい……ありがとうございます」  
「じゃなくて。」

「いえ、別に数学の事で悩んでいた訳ではないので……」

「あらそうなんですか？ でもだめですよ。今は数学の授業なんですから、しっかり授業に集中しましょうね？」

「はい……。すいません」

「まあ、悩みが尽きない年頃だとは思いますがね」と、的崎先生は静かに笑って、黒板に向きなあった。

でも、なんていうか。

（この人、先生ってよりは母親っぽいよなあ）

物腰は穏やかで、性格も優しい。でも厳しいところもある、と、なかなかの母親スキルを保持している的崎先生の後ろ姿を見ながら、俺はそんなことを思った。

（そうなると、白井先生はお茶目なお姉さんってところか？）

ていうかあの人、色々と若すぎ。母さんの親戚とか、みんなあんなだった気がする。

（となると、父親は……室見先生？）

……あんな自由奔放な父親をもったら、どんな風に子供は育つのだろうか。

（母親、的崎先生。父親、室見先生。娘、白井先生）  
想像してみると、なんか違和感がなかった。

（……って、ちょっと待て。何だか、どんどん思考が逸れていつてないか？）

いけないいけない、と二、三度頭を振って俺の素直じゃない点についての考察に進路修正。

——さて。

……元の路線に考えを戻した方がいいが、実際に何が悪い(？)の  
かがまったく分からん。

「うん……？」

と、一人悶々としてしていると、またもや俺の机の上にノートの切れ  
端が。

(またか。今度は何だ？)

訝しみながらその手紙？ に書かれた文字に目を通す。

(えーと……『素直なアナタって、好きよ』)

思わず吹き出しそうになった。ていうかなんなのこれは？

坂上の方を見ている。坂上はイタズラっぽく笑って、左隣の桐垣  
を指さした。

指を差された桐垣は爽やかなニヤつき顔で、『これで眠気も吹き  
飛んだろ？』とか口パクで伝えてきた。

(余計な御世話じゃ)

とりあえず口パクでそう返す。

「……ん？」

あれ、また机の上に手紙？ が——ていうか坂上、お前いつの間  
に俺の机の上に投げ込んだんだ。今まったくそれらしい動作は見受  
けられなかったぞ？

『どうでもいいかも知れないけど、また新しい数式が黒板に現れた  
わよ by天笠』

だから天笠もいつ坂上に手紙を渡したんだよ。忠告よりもそっち  
のタネを教えてくれ。

と思いつつ、黒板に書かれた数式をせっせか書き写す俺。

(……って、またか……)

ちょうど黒板の内容を書き写し終えたあたりで、俺の机の上にま  
た手紙？ が投げ込まれた。ていうか崎先生は咎めないのか、こ  
のやりとり。

(まあいいか。えーと……『そういうところがあるから、からかわ

れるじゃないのか？』あ、もう一枚来た……『そこが功司君の可愛いところ』)

……なんでこんな手紙で意思疎通できてんだこの人たち……ていうか俺のどこが可愛いのか理解できないんスけど。ついでに黒板に書かれた数式も理解できないんですけど。

『それは君が悪い』

……もはや机の上に投げ込むモーションも見えない手紙？ に書かれた一言。もう何も言うまい……。

### 第三章：5 トイレへ

「ありがとうございます……」

と、消え入りそうな程元氣のない声で、授業終了のあいさつをする我がクラスの面々。

「はい、どういたしまして」

それに対して、消え入りそうな程の小さな声での崎先生はそう言う、教科書を持って教室を出て行った。

——途端。

机に突っ伏すクラスの大抵。その中の半分くらいはもうイビキをかいてたりするという、数学の授業の甚大なる傷跡。起きている人の半分くらいは眠そうにボーっとしている。

かくいう俺も、眠ってはいないものの睡魔からかなりの攻勢を受けていた訳で、めちやくちゃ眠い。それでも眠らなかったのはあの手紙？ のお陰だろう。

（えーと、次の授業は自習だったかな、たしか）

起きていられた事を坂上たちに感謝するべきだろうけどなんかそれは悔しいからあえて言わずにしておくとして、朝のHRで室見先生がそんな事を言っていた気がした。なんでも、次の授業の担当教師の奥さんが、今日明日には出産するという状態らしく、今は付きっきりで病院にいるらしい。

（ずいぶん家内思いな先生なこと……）

……ああいう人が東のお父さんみたいな親バカになるんだろうなあ、と少し遠い目をしながら、生まれ来る赤ちゃんの幸せすぎる日常の範囲にある楽しい不幸に対して気の毒のような羨ましいような感情を抱いたところで俺はその赤ちゃんの人生に干渉できる訳でもなく——なんて回りくどい且つよく分からない事を考えて、

（そついや、さっきの最初に送られてきた手紙？ の意味、全然理解できてなかったな）

と、そんなことに思い至った。

(坂上に直接聞いてみるか……)

しかし、立ったまま教室を見回してみるが坂上の姿は見当たらない。

(……いないな……)

したらば他の誰かに……ともう一度教室を見回す。

(えーと、龍鶴は授業中と同じ格好のまま寝てるし、東も見当たらない……。天笠……もない、か。あたしかあいつは次の授業の自習課題を取りに行っただけか)

「そして最終的に頼れるのはこの桐垣のみ、ということだな」

「……………」

眠いしだるいし今さらだし、もう俺の心が読まれてるんだとしてもツツコミも驚きもしないようにしようとする。

「なあ桐垣、坂上がどこに行っただか知らないか？」

という訳でいつも通りに、俺の背後に現れた桐垣に尋ねる。

「……つまり」

「は？」

「まったくもってつまりならん反応だな矢城功司よ……。いつからお前はそんなキャラになってしまったのだ……」

いやキャラって……。

「俺はずっと前からこんなキャラだったが？」

「いいや」俺の言葉を、大げさなアクションまでつけて否定する桐垣。「お前は、もつといいリアクションをしてくれるキャラだった」

「例えばどんな？」

「今の状況なら『くっ……流石に幾度の危機的状況も一緒に潜り抜けてきた相棒の中の相棒、桐垣秀智様は騙せないか……だが、お前になら……お前に心を読まれるのは……嫌じゃない……』ぐらいは間違いなく言っただろうな」

「それはどこの世界の矢城功司なんだ」

誰が言うか、んな気色悪い事を。

「で、坂上の行方は知らないのか？」

「知らない——が、大体の予想はつく。大方、トイレにでも行ってるであろう」

「トイレか……」

ふーむ、それならばここは教室で待っていた方がいいか。

「どうした？ 坂上さんの、用を足してる姿を妄想してるのか？」

「俺をそんな変態に仕立て上げるな」

なんていう事を言うんだこいつは。ていうか、なんか無性に疲れた。

（……俺もトイレにでも行ってこよう）

そう思い、俺は教室を出ていこうとする。

「なんだ？ 妄想だけじゃ飽き足らず、ついに覗きに走るのか？」

「誰が覗くか。俺はトイレに行くんだよ」

「そうか、妄想してたら我慢できなくなったのか」

「お前は少し呼吸をするな」

ていうか下ネタ反対。

（まったく、なんでこんな昼下がりの気だるげな教室で下ネタトークをしなくちゃならないんだ）

俺は軽く溜息をついて、教室から出て行っただ。

### 第三章：6 日常↓異常↓過去

そもそも、うちの学園の形はちよつとおかしい。いや形というか、配置というか微妙な線はあるが。ともかく、中庭には謎めいた迷宮があつたりする学園なのだ。常識とは一線を描いているのは明白だろう。そんな大人の事情やらなんやらのがよく分からないが、何故か二年の教室の並びが、右から見てC A D F E Bとなっていたりする。ちなみに一年はA F E B D C、三年がD C F A E Bとなっている。もう深く考えた方が負けというような力オスぶりである。さらに付け加えると、渡り廊下がなぜか二階と四階に付いている。物理的に大丈夫なのかちよつと不安に思つたりするが……まあきつと大丈夫なのだろう。

そういう地理条件のもと、我らが2・Cから一番近くにあるトイレが、渡り廊下を渡った先にある、特別教室が多々ある棟のトイレなのだ。

「で、こつちに來たものの……」

なんか、暗いなあ……。

普段から使われることが少ないこの棟。しかも四階の教室に至つては、すべてが予備室なので、この時間に人がいる事なんてほぼ皆無。しかも、凹型な我が秋葉学園校舎故に、渡り廊下を渡った先の廊下はすぐ右に折れている。まるで、こちらには来るな、と言外に圧力をかけられるような、無機質な壁がすぐに立ちふさがる。

「……………」

……なんというか、すこし不気味だ。

人の気配というものが無く、渡り廊下一つを跨ぎ、こちらの棟に足を踏み入れただけでこんなにも空気が変わるあたり、なんだか別世界に迷い込んでしまったような錯覚を覚える。

少しのうすら寒さを覚えつつ、廊下を右に――

「およ?」

折れた所で、廊下の真ん中くらいを歩く東の後ろ姿と、向かい側の廊下から歩いて来る男子生徒の姿を発見。

（東もトイレか……）

東の姿を確認すると、なぜだか無性にほっとした。昼間とはいえ、こんな不気味空間に一人でいるのは気が滅入るもんな。

声をかけようか少し逡巡し、俺が声を出そうとした時、東の顔が少し左を向いた。

（こっちに気付いたのかな）

なら軽く手をあげるだけでいいか、と思い直す。

しかし、こちらを振り返ると思われた東の顔が、横向きのまま止まる。どうやらこちらに気付いたわけではなく、ただ通りがかった教室の中を歩きながら覗いているだけのようだ。

（……ん？）

ふと、その東の足が止まる。そして横顔から窺える彼女の左目が見開かれる。まるで、何か見てはいけないものを見てしまったような。そんな驚愕に満ちた横顔――

「なっ――」

――が、不意に揺れて、その場に崩れ落ちそうになる。その体を、誰かが受け止めている。

東を受け止めた誰か――印象が薄く、すぐにでも忘れてしまうような無機質な表情をした男子生徒の左腕には、ぐったりした東。そして、空いた右手には――

（……針？）

何で針なんか、と思うより早く、教室の扉が勢いよく、それでいて静かに開けられる。そしてその扉から、二人の男子生徒。東を抱え、右手に小さな針を持った男子生徒と同じく、印象に薄く、無機質な顔。そして、同じく、二人に抱えられるようにしてぐったりしている、小さな女子生徒――来宮梢の姿。

「……………」

理解が追い付かない。なんで、東はぐったりしていて、同じよう

にぐったりしている来宮さん共々、まるで感情がないかのような男子生徒に抱えられていて、男子生徒の右手にちいさな針が握られていて、三者三様、俺の方を見ていて、その内一人がブレザーの内ポケットから、おおよそ日本社会では見ない黒光りする物々しいものを取り出して俺の方に向け――

――タンッ。

「うおお!？」

慌てて右後方に飛び退り、直角に折れる廊下の陰に身を隠す。我ながらいい反射神経だと思った。

(つて、今はそれどころじゃなく!)

今、撃ってきたよな……。ていうか、その前になんであんなものがこんな学園にあるんだ? いやそれ以前に、東と来宮さんは? そもそもあいつら何?

落ち着かない思考をどうにか一つにまとめようとする。

(まさか、本当に別世界に迷い込んだのか、俺!?)

身を隠したまま、渡り廊下の向こう側を見れば、休み時間の当り前の日常。

身を取り出して、右に折れた廊下の先を見れば、日常からかけ離れた異常。

(お、落ち着け……。とりあえず落ち着くんだ俺……)

ほんのちよつと顔を出して、すぐに戻す。戻した瞬間、軽い銃声。多分、俺の顔が出ていた所を銃弾が駆け抜けたんだろう。

銃火器なんかについての知識はほとんど無いが、こんなに軽い銃声しかないという事は恐らくモデルガンをいじった程度の物なのだろう。

(……どうするか……)

顔を出したほんのちよつとの間に見えたのは、拳銃を持った男子生徒がこちらに銃口を向けている姿と、教室から出てきた二人の男子生徒が気を失っている東と来宮さんをそれぞれ抱えてどこかに行こうとしている姿。

「……………」

……どうするもなにもない。本来ならばあんな危なげな連中なんかとは関わりを持たずに、このまま何も見なかった事にして渡り廊下の向こうの日常に戻るか、さっさと教師とかに現状を報告、おつて対処してもらうべきなのだろう。

（だけど…………）

……知り合ってから全然時が経ってないとはいえども、関わりを持った、嫌いではない先輩。そして、昔から馴染みのある、大切な……友達。

（見捨てるのか？）

ただ単なる、平凡な高校生男子ならばその選択肢しかないだろう。この場合は——言い方は悪いが——あの二人を見捨てて、もっと頼れる人達に頼むという選択しか。

だけど。

「……………」

たった一つ、自分なら、矢城功司ならば取りえる選択肢がもう一つある。それは彼女らにとって最良な選択。けれどもそれは、自分にとつての苦渋の選択肢。

この選択肢を選んで、得られるもの。

この選択肢を選んで、失くすもの。

この選択肢を選ばず、得られるもの。

この選択肢を選ばず、失くすもの。

「……………はあ」

溜息を一つ。何をシリアスに悩んでますかね、俺は。

視線と右手を、左手首のプロミスリングへ。

（確か、これが自然に切れた時に願いが叶うとか、そんなロマンチックなうわさがあったなあ…………）

ふと、半年くらい前の出来事がおぼろげに頭によぎる。それは霞んでいて、ノイズがかかった景色。辺りに、所々から血を流した人間が倒れていて、その中心に自分が立ってて、夜空の月が冷たく光

つてて、寒風に吹かれた体は熱くて、妙に寂しくて。ああ、また転校かあ、とか、諦観と自嘲と自棄をブレンドした気持ちでぼんやり考えてて。

(……また、無駄に金とかもかかるんだよなあ)

両親に申し訳ない気持ちで一杯になって、それでもいつもと変わらずに笑ってる姿に、また申し訳なくなつて――

――いい加減、自分の回想に浸ってるヒマもないから、俺はひと思いにプロミスリングを引き千切つた――

――途端。

「あぐつ……」

血液と一緒に電流も流したような感覚。内臓が飛び跳ねるような感覚。ともすれば快感と紙一重の痺れ。脳髄にガンガン鳴り響く警鐘。

「う……あ……」

喘ぎをどうにかかみ殺す。引き千切つたプロミスリングは右手に握りしめ、左手は自分の胸を鷲掴みにして、こんな不快な快楽の感触に耐える。

「……はあ……」

そのまま五、六秒頭の中で数えると、その感触は消え去つた。そして、入れ替わりに視界が一瞬赤く染まり、それも去る頃には思考が鮮明に、体が軽くなつた。

「……準備、完了」

……非常に疲れた。毎度の事ながら、この感覚には慣れない。とつか、慣れてしまつたらそれはそれで変態への扉がオープンしそうで嫌だつた。

そんなくだらない事を考え、それから耳を澄ます。

――タツ、タツ、タツ……

静かな足音が聞こえる。一つの足音は段々近くなり、二つの足音

は少しずつ離れていく。

（一人に俺の処理を任せて、残りの二人で東と来宮さんをどこかに運ぶつもりか……）

現状は推測した。ならここは、すぐに飛び出して一人を打ち倒し、その後離れていく二人を同じく打ち倒す。そう考え、俺は廊下の角から飛び出す。

「！」

飛び出てきた俺に驚いたのか、六メートルくらい先で拳銃を構えている男子生徒は一瞬固まる。しかし、すぐに気を取り直し俺に照準を合わせる。

俺は飛び出した勢いのまま、身を低くして廊下を思いっきり蹴る。三メートルくらいの距離を一息で詰める。

——タンツ。

軽い銃声。弾丸は俺の右肩をかすめ、背後の壁に当たる。

残りの距離をもう一息で詰める。男子生徒の驚いた顔がすぐ目の前に迫った。なんだ、すっかり感情を持つてるじゃないか。そんな事を思いながら、少し手加減して相手の鳩尾を拳で打った。

「——っ！？」

男子生徒は短く息を締め出すと、そのままその場に倒れる。それを待たずに俺は駆け出す。

（次——）

前方を、こちらに背を向けて歩く男子生徒二人はこちらのやりとりに見向きもせず、東と来宮さんを運んでいる（ちなみに来宮さんはお姫さま抱っこ、東はおんぶで）。来宮さんの体格のせい、東をおぶった男子生徒の方が若干遅れている。

そちらに狙いをつけて、俺は廊下を駆け続ける。ふと、左の壁に貼り付けてあるポスターに『廊下は走らないでください』という言葉を見つけたが、非常時なので目をつぶってもらう事にする。

東を抱えた男子生徒に追いつくと、横に回り込んで、フックを打つ要領で鳩尾に拳を沈める。

こちらの男子生徒も、先ほどの奴と同じように短く息を締め出すと、そのまま倒れそうになる。

（——つと）

さすがに東を背負いながら倒れられると困るので、その体を受け止めてゆつくりと床にうつ伏せさせる。

（あと一人）

次なる目標へと巡らした視線を、いきなり白い煙が遮った。

「なっ——」

どうやら来宮さんをお姫様抱っこしている奴が、発煙筒を使ったみたいだ。両手が塞がってるくせに何て器用な。

それはともかく、徐々に辺りを分厚い煙が覆い尽くす。そのせいで、最後の一人の姿は全く見えなくなってしまった。

「くっ……」

見えない事にはどうしようもないので、俺は東の近くを離れず、この煙を手早く散らす方法を考える。

（窓を開けるか？ いやでも窓を開けたら……）

煙が外に漏れて、この異常を察知した教師やらやじ馬やらが来てやつかいな事になりそうだ。

「こっちだ」

「え？」

どうするべきかを考えていると、俺へ手が差し伸べられる。煙の中にいるので、それが誰の手だかはつきりと分らない。しかし聞き覚えのある声だ。

「……坂上か？」

「ああそうだ」

……それならばこの手は取っても大丈夫だろう。そう判断した俺は、未だぐったりとしている東をどうにか片腕で背負うと（うわー背中になんか柔らかい物が……）、坂上の手を取った。

坂上はそれを確認すると、迷わずに俺の手を引いて歩きだした。

そのまま無言で、十二歩歩いたところで坂上は立ち止まる。次に、

扉を開ける音が聞こえ、そしてまた俺の手が引かれた。

「ふう……ようやく普通に喋れるな」

手が引かれるままについていくと、そこはこの棟の教室の一つだった。俺が入った後、すぐに坂上は扉を閉めたため、この教室にほとんど煙は入ってきてなかった。

俺は、一先ず東を背中から降ろして、手近にあった椅子に座らせる。

「ところで、どうしてお前はこんなところに？」

「私がここにいる理由か？」

「ああ」

煙幕がもうもうと焚かれた廊下に、なんの疑問も抱かずに、迷わず俺の手を引いてこの教室にまで連れてこれたり——というか。どうしてこんな教室に俺を導いたのか。

「そうだな……」

坂上は右手を顎に当てると、教室の一角を見詰めて少し考える仕草をした。それは、何か隠し事を喋ってもいいか悩んでいるというより、多くある話すべき事の何から話すべきかを悩んでいるようだった。

「うーん、とりあえず……比較的軽い話から」

（軽い話が……）

まあそっちの方が助かるかもしれない。先ほどから日常規格外の出来事ばかり起こっててそろそろ俺の情報処理能力は限界に達しそうだし。

坂上は小さく咳払いをすると、一言、さらっと告げる。

「私、実は親の顔知らないんだ」

「……………」

……その言葉は十分に重いと思うのは気のせいなのだろうか。

「……それが、ここにいる事とどう関わるんだ？」

「うーん、なんというかなあ……信じてもらえるか分からないが……」

……」

坂上は少し逡巡した後、意を決したのかまた口を開く。

「私、実は君たちより年上なんだ」

「……………」

……何だか、ここにいる理由というより坂上の家庭事情を聞いてるような気になってきたのは俺の気のせいなのだろうか。

「……それが、ここにいる事とどう関わるんだ？」

「ああすまない、分かりづらかったか」

分かりづらい、というか話が繋がらない気がする。坂上は、もう一度顎に手を当て、何か言葉を探しているようだ。

「……よし、それじゃあ簡潔に私の近況をまとめよう」

「最初からそうすればいい話では…………？」

「うるさい。私にだって照れとかそういう感情はあるんだ」

正直な感想を言つと、三白眼で睨まれてしまった。というかいつもと坂上の雰囲気が違うような気がするんだけど。

「えーと、だ。つまり、私は…………端的に言つと『何でも屋』の一員だったのだ」

「……………」

えっ？ なに？

「…………はい？」

「ああ、分かる。君の反応は至極もつともな反応だろう。でも信じなくて。事実なんだ」

おお、普段クールな坂上が照れてる。すごい新鮮だ。

「うーん…………分かった、一先ず信じるとして…………その『何でも屋』って何だ？」

もう少しその坂上を眺めていたかったが、それは断念する。そういう空気じゃないような気がするし。

「ああ…………そうだな、分かりやすく言えば『傭兵』のような感じか？ とりあえず、金を受け取れば『何でも』やる、という集団だと思ってくれ」坂上は少し溜息をつく。「で、私たちは今回、『来宮梢の誘拐』という仕事を請け負った」

「……………」

来宮梢の『誘拐』。およそ日本では——いや、政府があるところ  
全てで、それは犯罪にカテゴライズされるべき行動。それを誰かに  
依頼されて、坂上がそれに一枚噛んでるって……？

「当然、仕事は非合法。明るみに出れば、お巡りさんとの追い駆け  
つこに発展する。……『何でも屋』とは、そういう存在だと思って  
くれ」

「……それは理解したとして、どうして来宮さんを誘拐するんだ？  
坂上の事も少し解せないが、その事も理解できない。なんだって  
見た目が年齢引くことの五歳な女子高生を誘拐する必要があるんだ  
？　もしかしてその依頼主はロリコンなのか？

「おや、君は知らないか？　この学園の理事長がどんな人か」

「理事長……？」毎度朝礼で見る、頭皮が見え始めた校長はよく見  
るけど……。「そういえば、理事長は見たことないな」

「では『来宮財閥』は？」

「それは……」

知っている。確か、全世界に色々な支社を持つ、総合貿易会社の  
総称。十数年前から急に発展した企業。

「なら、これで分かるな。この学園の理事長は『来宮桜』。ほんの  
七年前までは『来宮財閥』の総帥だった人物。そして、来宮梢はそ  
の孫だ。その誘拐、となれば、話は簡単なものだろう？」

まあ、流石に依頼主は言えないがな。そう言葉を切る坂上。

「……………」

……俺は、本当に異次元に迷い込んでしまったのだろうか。なん  
だか一気にキナ臭い世界に足を突っ込んでしまったような気分なん  
だが……。

「だから、君がさつき見た三人は『何でも屋』の一員。ちょうど来  
宮梢をさらって、あの教室に隠しておいたんだろう。しかし、そこ  
を東君に見られた」

……だから、口封じの為に東を気絶させ、来宮さんと一緒に隠し

ておこうとして……

「さらに君に見つかり、東君は奪回、二人は気絶させられた、と」  
なるほど、まだ少し混乱はしてるけど、大体の理解は追いついた  
……けど。

「坂上、なんでそんな事を俺に？」

本来ならその情報は、トップシークレットなハズなのに。なんで俺に伝えるんだ？

「うーん、そうだな……。『何でも屋』のトップ、リーダーは私の育ての親みたいな男なんだが……。強いて言えば、反抗期かな？」  
そう言われてしまった。綺麗な顔立ちをした女の子の可愛い笑顔で。

「随分と壮大な反抗期だな……」

「気にするな。年頃の女の子は父親に対してシビアなんだよ」

……お父さんのパンツと一緒に洗濯しないで、レベルで組織のトップシークレット暴かれるってどうよ、日本のお父さん……。

「という訳で、この計画をぶっ壊して破算させたい。協力してくれないか？」

「……はっ？」

お父さん、どうやらこの娘は秘密を暴露するだけでなく、仕事そのものをやめさせようとしていますよ？

というか。

「……なんで俺に頼むんだ？ ていうかそもそも、わざわざその仕事？ を自分で壊す意図が掴めないんだが」

それに、わざわざ部外者の俺にそこまで言うって事は、何かの罠かもしれないし。……まあ、俺一人を罠に嵌めたところで事態が変わると思えないけど。

「……ああ、まだ言ってなかったなあ……」

坂上は心底嫌そうな表情かなりめずらしいなをして、語る。

「実はなあ、その依頼主の御曹司がな、頼んでもいないのに『仕事に成功したらお前を嫁に貰ってやろう』なんて言ってきた……」

「……………」

何と言えはいいか分からない。

「嫌だけどさ、言えないだろう？ 『お前の腐った顔面に鉛玉ぶち込んでやるうか』なんてさあ……。というか、恋くらい自由にさせるって言うのに」

意外とえげつない事考えてるんだな&意外に乙女なんだな坂上つて……。

「……いつぞやの喋り方じゃないが、傷つくぞ？」

と、坂上がジト目になり、少し唇を尖らせて俺を睨んでくる。

「え？ 顔に出てた？」

「ああ出てた。意外にえげつないんだなって。本当に君はわかりやすいな……………」

ううむ、それは失礼な事をした。

「いや、ごめん……………」

「ふうんだ、いいさ別に。どうせ私には硝煙のが香水代わりな女さ。…………でも私だつて一端の女の子なんだぞ。恋に恋するんだぞ？」

そう少しそっぽを向きながら、照れたように拗ねた風に言う坂上。悪いと思いつながら不謹慎だけど…………拗ねてる坂上つてめちゃくちや新鮮で、普段のギャップと比べるとすごい可愛いな…………。

「話が逸れたな」坂上は一つ咳払いをすると、いつも口調に戻った（頬は少し赤いままだけど）。「とにかく、私はそんな理由でこの計画を無しにさせたいのだが」

…………これもその誘拐の作戦の内の一つなのかもしれないけど。友達を疑うのもアレだけど。

「それで俺を頼るのはいいけど、大した役には立てないと思うぞ？」  
「何を言う、矢城功司」

坂上は俺の肩に手をおいて、正面から俺の目を見据える。

「言っただろう？ 『そろそろ素直になっただらどうだ』と。もう瞳の色が変ってきているぞ？」

「なっ!？」

坂上が見ているのは、俺の瞳。俺の日本人らしく真黒な瞳孔は、しかし今は――

「もうほとんど色素が抜けて……翡翠色か？ この色は」

「！」

坂上の手を振りほどいて、一步下がる。

「な、んで……」

なんで……知っているんだ……？ この学園で知っているのは……白井先生ぐらいのはずなのに……。

「知っているさ。『何でも屋』の情報網は、ともすればどこぞの国家並だからな」

秘密。知られてはいけない秘密。人に見せてはいけない秘密。知られれば――終ってしまう秘密。

「私は既にカミングアウトしたんだぞ。それならば、次は君の番だろう、矢城功司」

「うつ……」

一步、近づかれる。一步、退く。一步、近づかれる。一步、退く……。

――トン。

背中に衝撃。壁。これ以上、下がれない。

「何をそんなに怯える必要がある？」

「う……あ……」

駄目だ、言ったら。またあの日が俺の脳裏に蘇って……。

視界がグラグラする。吐きそうだ。もう全て吐きそう。過去のしがらみも自分の秘密も自分の想いも――全て。

ガンガンガンガン、頭が痛い。

シクシクシクシク、心が痛む。

「こ……のことは……」

「私しか知らない。今はな。だけど、みんな知ったとして、君の恐れている事態には発展しないと思うがな」

そんな保障はどこにもない。

この世は綱渡りなんだから。

何が正しくて何が間違つてて。

みんなに受け入れられるにはどうしたらいいかなんて。

「何をそんなに怖がっている？ 君の力は、東君を救った。その事に偽りがあるか？」

「あずま……」

今まで忘れていた、東のぐったりした姿を視界に収める。その姿を見て、ある事を思い出す。

（また……また誘拐されかけてんぞ……東……）

……そうだ。そうだった。俺は、東の事を助ける為に、覚悟したんじゃないか……。

確かに決めた。あの日あの時より、俺は、大事なところでは自分よりも他人を優先させるようになった。だからこれは、自分の事よりも、他人の事を優先するようになってからの——怒りからでも勢いからでもない——最初の、本当の決断。

大切な人の為に。

（なら、いいじゃないか）

もう伏線も解いてしまおう。

「おれ……俺は……」

矢城功司は、過去を語りだす——

### 第三章：7 過去1―発端―

はじめは、確か体育倉庫での事だった。

友達によるふざけ半分の、子供ながらの無邪気さと残酷さによって東と閉じ込められた、夕暮れの体育倉庫。

生徒の声もなにもなく、ただ静かな放課後。

ともすれば、生きているモノの気配がしない放課後。

薄暗い体育倉庫の中で、東の俯いた顔がすぐ泣きそうである……。

（だれだ、おれの友だちを泣かせようとするのは……）

そう、隠してたけど、東が泣きそうなのに焦って、それから――  
どうしようもない怒りを感じた。そうしたら、体中がカッと熱くな  
って――

（開けよ！ このオ！！）

――ガコオン！！

――扉を蹴ったら、それが軽くすっ飛んで、人気のない校庭にも  
のすごい音を響かせた。

その光景に、俺はしばらく呆然とした。子供心でも、こんな頑丈  
そうな扉が、小学生に蹴破れるはずもないと分かっていたから。

（やべーどうしよう、扉壊しちゃったよ……）

間抜けにそう思って東の方へ顔を向けると、驚いた顔をしていた  
東と目があった。しばらく間抜けた俺の顔を見ていた東は、やがて  
笑ってくれた。

（……よかった）

好きな人が泣かずに済んだんだ。なら、こんな扉壊したくらい別  
にいいや。そう思うと、どうしようもない怒りも焦りも消えてなくな  
った。

俺は東の方へ足を踏み出す。途端、クラッとして倒れそうになっ  
て、頭もなんだか痛くなったけど、我慢した。東を心配させないよ  
うに笑いかけた。

そうして、俺と東は一緒に帰った。大分傾いた陽に照らされた、いつもよりも遅い帰り道を。

東とさよならをして、一人、玄関のドアノブに手をかけた時、今更になって恐怖が湧いてきた。

（おれ、何であんな事が出来たんだろう？）

自分がすごく怖くなった。もしも、喧嘩とかして、誰かを蹴っちゃったら……。

脳裏に浮かべてしまった、蹴破られた扉のように、吹き飛ぶクラスメイトの姿――

（いやだいじょうぶ。ケンカしなきゃいいんだ……）

俺は頭を二、三回ふると、自分に怯えながら家に入って行った。

――その日の夕食。

俺は、どんどんと酷くなっている頭痛のせいで、全然箸が進まなかった。

「どうしたの？ 功ちゃん？」

それを心配した母さんが、俺の目を覗きこんできて――  
「っ！」

息を呑む気配がはつきりと聞こえてきた。

「お、お父……さん」

「ん？ どうした、和泉？」

「功ちゃんの……目が……」

ガタツ、と椅子を蹴って立ち上がる父さんの姿。

心配そうに慌てている母さんの姿。

それを見る俺は、問題の中心は俺だと思いながら、どこか他人事みたいな心境だった。

「……………」

「……………」

俺の瞳を覗きこんだ二人は、黙り込んで何かを考えているようだ。それも他人事に思えた。

「……功司」父さんのごつい手が俺の肩に置かれる。その感覚も、

なんだかおぼろげだった。「今日、なにかすごく頭にくる事がなかったか？」

普段そんな学校の事を聞かれたら、照れて適当にはぐらかすだろうが、今日はそんな雰囲気じゃなかった。

「今日、あった事……」

俺はおぼろげた思考のまま、今日の出来事を簡潔に話す。学校の授業で、三回連続で当てられたこと。昼休みに東絡みでからかわれたこと。そして、放課後、東と閉じ込められて、扉を蹴破ったこと――。

「それが原因か……」

そこまで話すと、父さんは天井を見つめて溜息を吐く。

母さんはまだ心配そうに俺を見つめている。

「あなた……」

「……こうなったらしょうがない。少し早いが、功司にすべて伝えてしまおう」

何を言ってるんだろう。

熱に浮かされた気分で、俺はぼんやりと二人のやり取りを見ていた。

「功司、とりあえず、そこに座りなさい」

夕食もそのままに、俺は父さんと母さんに連れられ、お父さんの部屋に連れられて行った。普段は入ると怒られるのに、なんだか不思議な気分だった。

お父さんの部屋には、難しそうな本とかがいっぱい入った本棚があった。それから、良く分からない世界地図が壁に貼ってある。父さん曰く、漢のロマンらしいがよく分からない。

その部屋で、父さんはカーペットの上に正座、母さんはその後ろにあるベッドに腰かけた。俺は、父さんの前に、同じように正座しようとして、上手くできなかったから片膝を立てて座った。

「功司、今から話す事を、良く聞いておきなさい」

父さんはそう言うのと、普段のおちやらけた態度とは程遠い真面目な態度で、話を切り出す。母さんは、いつもののんびり穏やかな雰囲気など微塵も見せずに、ただ俺を心配そうに見つめていた。

「まず……家の事——家系の事からだ」

父さんは、俺に色んな話を話した。まず、家の事。なんでも、矢城家は昔——苗字がまだ矢城ではなかった頃、とてつもなく強力な能力を持つ一族だったらしい。ものすごく眉唾な話だが、実際に俺にその能力的なものがある時点で、それを信じるしかないのだろう。それから、その一族が辿った歴史も聞いた。伝承的な怪物に襲われた村を助けた話とか、お偉いさんの用心棒をしていた話とか、異能を持つゆえに助けた村から疎まれたり、差別されたり、迫害され、あちこちを流浪していただとか。……本当に眉唾な話だ。

だから信じたくなかった。信じなかった。そんな誰かの為に頑張った人が頑張った分だけ報われない、不幸な話なんて。そして少しム力ついた。なんで助けてもらったのに、虐めるんだとか、なんで力を持つてるのに、黙ったままなんだとか。

一族の話を終えると、次は俺の話になった。

現代において、その一族の能力を持つ人間は矢城の家系にはけっこういるが、ほとんどその能力は使い物にならないという。そう、普通の人間とほとんど差のない超能力者。それも人間の環境適応能力だな、と父さんは言っていたけど、良く分からなかった。

しかし、その中にも例外はいるらしい。生まれながらに、目には見えないモノが見えてしまう人。手も触れずに大きな物を動かせる人。人の心が分かってしまう人。探せばどこかにいそうな、超能力者たち。

どうやら、矢城功司もそういう人間らしい。名字が漢字五文字以上の人に出会う確率以上マンボウが生魚する確率以下の確率で生まれた、強力な超能力者。

しかもご丁寧に、一際凶暴で凶悪な。

怒りや焦り、負の感情によって暴走してしまうケモノの力。オリ

ンピック選手なんて目じゃない、野を駆るケモノ以上の運動能力。百マイルの剛速球すら止まって見え、至近距離からのボクサーのパunchすら交わす神経。矢城の家系に刻まれた異端能力。

（ああ、だからか）

それで理解した。恩人を迫害する村も、迫害されてもただ流浪するという選択を貫いた理由も。

自分たちが我慢すれば、全て丸く収まるんだ。自分たちが暗いものをすべて背負えば世界は平和なんだ。

（それでも……）

納得はできなかった。したくなかった。だってそうだろう。そんな哀しい話、嫌じゃん。俺は嫌いなんだよ、そういう暗い話。笑い飛ばせるくらい、誰もが笑うしかないくらい、明るい話の方が好きなんだよ。失笑でも冷笑でもなんでも。とにかく誰もがそれぞれ笑ってられる話が好きなんだよ。

暗い話なんて、傷つく話なんて——大嫌いだ。

「——お前が今日、体育倉庫の扉を蹴破れたのも、その力のおかげだ。そういう能力があるっていうのは分かってたんだが——ここまです強いとはなあ」

そこまで話すと、父さんは呑気な声でそう言った。その声で、現実に関連される。

「功司」

「……なに？」

今まで父さんの話を黙って聞いていた俺は、この部屋で初めて声を出す。

「怖いかな？」

「……」

怖いか、という父さんの質問。その意味は……一応でも分かっているつもり。

「……うん。怖い」

この力を使い——使ってしまった、もしも友達を傷つけてしまっ

たら。

「そっか、怖いカ。……なら大丈夫だな」

その答えに、父さんは満足そうなのに寂しそうな表情で頷く。ずっと黙ったまま母さんは、なんだか泣きそうな顔だ。

「怖いなら、その力の意味が分かっているって事だ。……あとはいつも通り、楽しく日々を過ごすこと！」父さんはその表情を隠して、笑顔を浮かべると、ごつい手を俺の頭に置いて乱暴になでる。少し嫌だったけど、振り払おうとは思わなかった。「ん……？ 待て、なんかこの言葉カッコ良くないか？ ヤバいな、今日から矢城家の家訓に載っちゃうぜこれ？」

そしていつもの明るい声。おどけた口調。これで本人は大真面目らしい。

「だめですよー、お父さん。それを入れると、もう家訓が58個になっちゃいますからねー」

母さんもいつもの、間延びしたのんびり声で父さんのボケ（重ね重ね言うけど、本人は至って真面目）に返す。

そして俺は。

「家訓その23って『むやみに言葉を増やすな、男は黙して語れ』じゃなかったっけ？」

その場の雰囲気に沿った言葉を発する。だって俺、明るい方が好きだもん。

「うるさいぞー功司。お前はいつからそんな揚げ足をとる子に育ったんだ？」

「多分——ていうか絶対に父さんのせい」

「うわひどっ。母さんやー功司が俺を苛めるんだ」

「あらあら、図星を指されちゃったわねえ、それはつらいわね」

「うわーん、みんなが俺を苛める」

父さんはそう言っ、泣き真似をする。それを母さんが「よしよし」なんて慰める。本当、若い夫婦だ事で。

そんな両親を見つめながら、一つの決意をした。それはきつと拙

い決断。子供の精一杯の背伸びだったかもしれないけれど。  
『これからは、自分以外の誰かを優先しよう』

### 第三章：8 過去2―トラウマ―

……それから一年後の春の事だった。そう、それは忘れもしない、小学校の卒業式から二日経った日の夕方の事。多分、俺のトラウマ。赤く染まった公園。

めちやくちな顔になって倒れる、醜い大人。

景色のように赤くなった、俺の拳。

尻もちをついて俺を見ている、東。

——その日、俺たちは小学校のクラスの卒業パーティーに行っていた。ほんの三日前までは毎日のように顔を突き合わせていたクラスメイトとも、ほとんどがお別れだという事で、そのパーティーはけっこう盛り上がった。

笑い声が溢れる空間。

楽しくて、楽しすぎて涙が出るような時間。

平和で平凡で暖かい日常の中の出来事。

そして、その帰り道の事だった。

いつも通り、東と俺は家路を辿っていた。楽しかった時間とは対照的な、物静かな夕暮れの道を。お祭りが終わった後のような、寂寥感漂う道を。

その時していた会話の内容は思い出せないけれど、確か、公園にでも行こう、とかいう方向になって、俺と東は公園に向かおうとした。

そして……その時に、東が誘拐未遂に遭った。

いきなり車が俺たちの横に止まってきて、ドアが開くと同時に大人の手がそこから伸びてきて、東を車の中に引きずりこんだ。

驚いて呆然としている俺を置いて、車は走り出す。そこで俺は我に返る。

（な！？ 東！？）

一瞬、手荒い東家の迎えの車かと思ったけど、その場から見える、

その車の後部座席にいる、俺に向かって何か叫んでいる東を見て、そんな場違いな思いは消し飛んだ。

そして、頭に血が上った。

「……の野郎」

東はこっちを見て、何かを必死で叫んでいて、すごく悲しそうで怖そうで、スキナヤツ一人守れない自分に腹が立って、その車に乗っていた奴らを――シタクナッテ。

俺は走り出していた。

ふと、父さんの言葉が脳裏に蘇る。いつかの夜に言われた言葉を。ふと、いつかの夜には見れなかった、母さんの笑顔が思い浮かぶ。

（……ごめん）

なんとなく謝りたい気分になった。多分、この後めちゃくちゃ迷惑かけることになるから。

でも今は東の方が大事だから。

本当に――

「……ごめんなさい」

俺は今からこの力を使ってしまいます。大事な人を守るために、あの日から、初めて自分の意思で――

――そして車は俺と東が行くはずだった、静かで小さな公園に着いた。その車に少し遅れて、俺も辿り着く。俺は公園の入り口付近に身を隠す。力を使ってるせいか、頭が痛かった。

（たしか、父さんが言ってたな……。こういう時は、かくれてチャンスを待てって）

車に乗っていた大人は二人いるようで、一人は外に出てきて何やら携帯電話を耳に当てている。もう一人の大人と東はどうやら車の中にいるみたいだ。

俺は遠目にそれを確認すると、即判断した。

（あの電話してるヤツから倒すか）

そう思ったら、自然と体が動いていた。俺の体に宿っているとい

う超能力のおかげで、何倍にも増強された身体能力で。

距離にして十メートルとちょっと。普段よりも圧倒的に軽い体で、一瞬で距離を詰める。

電話の男はこちらに気づかなかった。俺は近づいた勢いのまま思いつきりその男を殴った。

「ぐほあ!？」

その男は、まるであの時の扉のように吹っ飛んだ。「冗談でも比喻でもなく、同じような軌道を描いて、その男の身長の子三倍くらい。

足もとにはその男が持っていた携帯電話が落ちていた。それを拾い、耳に当てる。

『あの……もしもし?』

そこから聞こえる、怪訝そうな声には聞き覚えがあった。この声は多分、東のお父さん。

「えつと……もしもし? 矢城です、矢城功司です」

『ああ、なんだ功司君か。どうしたんだい?』

とりあえずその声に応答してしまったが、何を言えればいいかわからなかった。

「……えつと、あの……ちょっと帰りがおそくなります」

『帰りつて、涅亜のかい?』

「えつと、はい。ちよつと東は手が離せない状態なんで、俺が電話する事になって……」

『ああはいはい。了解したよ、功司君。迎えとかはいりそうかい?』  
「いや、大丈夫です」

話しながら、少し車の方を窺う。もう一人の、車に乗っている大人の方はこちらの様子に気付いたのか、車から出てこようとしていた。

『そうかそうか、君が送って来てくれるもんね。君になら、別に涅亜をあげても——』

「ああすいません、こっちも忙しくなってきたから切ります」  
そう言って、有無を言わず通話を切る。それどころじゃなくな

つたし、なにやら話がアレな方向になりそうだったから。

車から出てきた大人は、電話をしている俺を見て訝しげな表情になり、吹っ飛ばされて横になっていいる大人を見て驚愕の表情をする。俺は携帯電話をその場に放って、車へと走り出す。そして後部座席のドアを開ける。

「東……」

そこには東がいた。俺を見て、ビクツと怯えた、東が。それを見た瞬間、頭が真っ白になったような気がした。

そして、その後に訪れたのは……どうしようもない破壊衝動。全て壊したい。壊して壊して壊しつくして……オレモコワレタイナ。

少し乱暴に東の手を引いて、車から降ろさせる。降ろさせたら、その手を離す。そして、目の前に立っている大人を睨みつける。

その大人は変な風に笑いながら、何かをぎゃーぎゃー言っていたけど、良く聞き取れなかった。すごく気に障る。

「うるせえよ」

いかげん騒音妨害で訴えられないように、そいつの膝に横蹴りを入れる。そいつの膝は、面白いように右に曲がり、そいつの顔からは変な笑いが消えた。清々する。

「てめえ、人の好きな女を攫つといて、何を喚いてんだ？」

なにか、信じられないものを見たような目で見られる。ああ、めちゃくちゃうざい。

膝が折れた分低くなって、俺の顔と同じくらいの位置にあった相手の顔を軽くビンタ。それだけで、そいつの顔が面白いようにピンタされた方向に向いた。

そして、またそいつは何かを喚きだす。

「ああ？ 聞こえねえよ」

それがまた気に障る声だったから、俺はそいつの胸倉を掴んで持ち上げる。またそいつの身長は俺よりも高くなった。

そいつは今度は何も喋らずに、俺が蹴った脚以外の手足をジタバタさせだした。

「うぜえな……」

俺はそいつの腹を殴る。そうしたらそいつは大人しくなって、今度はぐったりしだした。

「おい、お前。聞いてんだよ。東を攫つといて、何を喚いてんだって」

ぐったりしたそいつを地面に放り、尋ねる。しかし返事はなく、そいつはぐったりしているだけだった。

「使えねえな……」

それはその場に放置して、俺は先ほど吹き飛ばした奴のところに行く。

「おいお前」

未だに寝転がったままだったそいつの胸倉をつかみ、上半身を起こさせる。

「無視すんじゃねえよ、おい」

返事がなかったので、そのまま頬を殴る。一発、二発、三発……。だんだんそれが楽しくなってきた。黒くて昏い感情が心を占めていく。

自然と笑い声が漏れそうになった。それでも止めない。十五発、十六発、十七発……。

そつえばなんか近くにある顔もけっこつボコボコになってきたなあ……。でもすごく楽しい。

そつえばなんか変なリズムで振られる俺の拳も赤くなってきたなあ……。でも止めらんない。

二十三、二十四、二十五……

「……こつじくん……」

ふと、後ろから声がかかる。三十発目を放つところで俺の拳も止まった。

「なんだ、あず——」

振り返って東の顔を見た俺は、サツと血の気が引いた。

東の目。まるでいつも俺を見る目ではなく、なにか恐ろしくおぞましいものを見てしまった、恐怖の目。

東の声。まるでいつも俺にかける声ではなく、思わず漏れてしまったような震えて弱々しい、拒絶の声。

ほんの二十分くらい前には俺に向けられていた、温かなそれらは、ほんの二十分くらいで、冷たく無機質なものになってしまっていた。  
「……………」

俺は、そこで気を取り直す。

今、俺がしていたことを振り返り、寒気が走る。俺が抱えていた昏い気持ちを知って、吐き気がする。

『壊したい。東を悲しませた怖がらせたコイツラを壊して壊してコワシテコ―シテシマイタイなあ』

その自分の気持ち以上に、思う事。

『東に嫌われた。東に怖がられた』

さっきまでの友達が、俺の事を見ている。友達を見る目じゃない目で、俺を見ている。

「あ……………」

俺は何をしたんだ？ 何をしたかったんだ？

掴んでいた、大人の胸倉を離して、のろりと立ち上がる。

「っ！」

東は、俺が立ち上がったのを見ると、一歩後ずさるうとして、さがれず、その場に尻もちをついてしまう。

—— 赤く染まった公園。

—— めちゃくちゃな顔になって倒れる、醜い大人。

—— 景色のように赤くなった、俺の拳。

—— 尻もちをついて俺を見ている、東。

『—— さて問題です。オレハナニガシタカッタンデシヨウカ——？』

「う……………」

口から嗚咽が漏れる。

何がしたかったって？ 決まってるだろ、東を守りたかったんだよ。

何をしたかだって？ 決まってるだろ、あの大人をぶっ壊したんだよ。

「ああ……」

酷いな、なんて醜くて馬鹿なんだろう俺。もう東と話すこともできないだろうなあ……。

それでも、怖がられてても嫌われてても、最低でも馬鹿でも、やらなきゃいけない事がある。

嗚咽をかみ殺して、俯きながら東に近づく。

東は口をパクパクとさせて、何かを言おうとしている。

（きつと、俺に対して「来ないで」とか言いたいんだろうなあ……）  
ぼんやりと、自虐的な考えを浮かべる。

東の前に立つと、俺は尻もちをついてへたり込んでいる東を背負った。意外な事に、抵抗はなかった。

「……ごめん」

そして小さな声で謝る。届かなくなっただけいい。俺でさえ、何に対して「ごめん」って言ったのか分からなかったから。

俯いたまま、俺は東の家を目指す。……もしも東のお父さんやお母さんに会ったらなんて言い訳しようか。

東がちよつと怪我してる事と、俺が泣いている事を。

そして俺は、東の家の前まで着くと、東を背中からゆっくり降ろした。幸い、東の両親とは顔を合わせずに済みそうだった。

東を降ろし、しっかりと立てた事を確認した俺は、すぐに背を向ける。

「それじゃあ。……っ」

そしてそれだけを言い、俺はすぐに駆けだす。……東にだって、泣き顔は見せたくないから。

### 第三章：9 過去3―優しさ―

その晩、俺は事の次第を両親に告げた。

「……そうか」

父さんは俺の話を聞き終わると、一つ頷いた。

「……………」

母さんは心配そうに、泣きそうな顔で俺を見ている。

「……………」

俺は黙ったまま、父さんの言葉を待つ。

「功司」

「うん」

「お前は、湊亜ちゃんを守るためにその力を使っただよな？」

「……うん」

それに間違いははずだった。東が攫われた時、あいつは多分「助けて」って言ってたんだと思う。だから、俺は東を助けようとした。

「それで、その湊亜ちゃんを誘拐しようとした奴らに追いついたら、そいつらをボコボコにしてやりたくなっただんだな？」

「……うん」

怒られるんだろうなあ。そんな事を思いながら、俺は言葉を返し続けた。

「それで、そいつらをボコボコにした後、湊亜ちゃんの声で我に返って、湊亜ちゃんをおぶって送って行ったんだな？」

「……うん」

「そうか……」

父さんは俺の返事を聞くと、

「よく頑張ったなあ、功司」

そう笑って言った。

「え？」

「涅亜ちゃんを救いだして、しっかり家まで送って行ってやったんだろう？　なら大したもんだ。そこまでできるとは、お父さんは鼻が高いぞ」

「で、でも……俺……」

「途中から、その涅亜ちゃんを助けるより、誘拐しようとした奴らをボコボコにしたいくなっただろう？」

「う、うん……」

父さんはやつぱり笑ったまま、言葉が続ける。

「あつたりまえだろう、そう思うのは。自分の好きな女が目の前で他の男に無理矢理連れ去られそうになっただ。キレて当然！」

「お父さん、笑ってる場合じゃないでしょ？」

そのまま豪快に笑いだした父さんを、困ったように笑いながらなだめる母さん。

「功ちゃん、真面目な話をするとな……そんな風に乱暴な気持ちになっちゃうのは、その力のせいなの」

「……え？」

この力のせい……？

「その力はね、大人になれば自分で制御できるんだけど……子供の時はね、怒った時の気持ちが発動条件になっちゃうの」

怒った気持ち……。確かに、東が車に入れられた時と、公園で東の姿を見た時に、頭が真っ白になって……。

「だからね、ぜーんぶその力のせい、って訳でもないんだけど、ぜーんぶ功ちゃんが悪いって事にもならないの」

「……全部俺のせいにならないにしても……俺はもう……」

「……ここには、いけないよ……」

そうだろう？　あんな暴力沙汰を起こして、東には嫌われて……。もう、俺の居場所なんて……。

「ああまあ、そうだが……別にお前の居場所がない訳じゃないぞ？」

「そつだよ、功ちゃん」

暗い気持ちのまま、俺は両親の顔を眺める。

「どんなに他の人が功ちゃんを嫌ったって、私たちはずっと功ちゃんの味方だよ？」

「そうそう。それに、ここいら辺にないなら、引っ越せばいいだけの話だし。お父さんはなかなか偉い人だからな。仕事には困らん」  
「……え？」

今、いい言葉の後になんか聞こえた気がするんだけど……？

「引っ越して……」

「引っ越しは引っ越し。住所も環境も変わって心機一転！ 前の住所をすっかり書きちゃう時があるのが珠にキズ」

母さんはその言葉にうんうんと頷いている。——ていうか。

「そんな簡単に言うけど、引っ越してすごいお金が——！」

「ばーか」

正論を言ったら父さんに馬鹿と言われた。

「あのなあ、子供はそんな事気にしないでいいんだよ。まあ家が貧乏だったらそう言われても仕方ないけど」

そう言って、父さんのごつい手で、乱暴になでられる。

「そうだよ、功ちゃん。子供は黙って親に甘えちゃいなさい」

そう言って、母さんにはっこりと笑う。

「……」

対する俺は、言葉が出せなかった。言葉を出したら、泣いてしまっ  
いそうだった。

だから、俺は俯いて、嗚咽が漏れないように、ゆっくりと声を絞  
り出す。

「……ごめん」

「ばーか」

その謝罪の言葉は、また父さんの言葉で一蹴される。

「こういう時は、ごめんじゃないだろう？ 矢城家の家訓その16

『いつでもどこでも正しい言葉選び』だぞ？」

俺は、少し迷ってから、口を開いた。

「……うん。……ありがとう……」

「よし」

それを聞いた父さんは大きく頷いた。

「ということで、善は急げともいうし、会社の人手が足りない支社を探すとするかな」

「私も、ご近所さんにお別れを告げないとね」

慌ただしく動きだした二人を見て、俺はまた「ごめん」と言いそうになったけど、どうにか堪えた。そして、小さくもう一度「ありがとう」と呟いた。

「ほーら功司、お前も準備しろ準備。やり残した事とかさっさと済ませろよ」

「う、うん」

とは言っても、俺にやり残したことは少ない訳で、部屋の片づけをして荷物を整えるくらいで準備は済みそうだった。

「ああそうだ、功司、これ付けとけ」

と、自分の部屋に向かおうとしたところで、父さんに何かを手渡される。

「……これ何？」

見たところ、父さんの手首に巻けるくらいの、細長くて小さい布の帯みたいなものだった。

「そいつはプロミスリング。主に手首や足首に巻く物で、他にも呼ばれ方はあるが俺はその名前の方が気に入ってるからそう呼ぶ。そいつには特殊なお呪いがしてあってなあ、お前のその力を抑える効力があるんだ」

「俺の力を……？」

「ああ。これから高校卒業くらいまでは、多分放っておいてもお前の力は発現しちゃうと思うんだ。だから、そいつは外しちゃいけないぜ？」

「……うん、分かった」

「まあ高校に入学くらいにはある程度その力のコントロールはできるようになると思うがな」

（高校に入学するくらい……）

俺にはそれが非常に遠い出来事に感じられた。

（でもいつかはなるんだよね……）

そうすれば、東に嫌われた今日の事も忘れられるのかな……？

とりあえず、俺はその受け取ったプロミスリングを左手首に巻いた。なんだか、そこだけ温かくなったような気がした。

「よし、あとこのメガネかけとけ」

「え、メガネ？」

「そうだ。力を思いっきり使ってからしばらくは、二日酔いみたいな症状が続いて、瞳の色が翡翠色になると思うんだが、これにはそれを抑える効力があるらしい。婆ちゃんの家でそう教わった。」

（また随分と眉唾なものが出てきたな……）

俺はそのメガネを受け取り、かけてみる。

「うつ……」

「どうした？」

「なんか……鼻のあたりが変……」

「ああ、分かる分かる。でも我慢しな。そのうち慣れるだろうから」

俺がメガネもかけたのを確認すると、父さんは自分の作業に戻――

「とっしひっこっさん……？」

――ろうとしたら、母さんの間延びした、冷たい声が聞こえてきた。

凍りつく居間の空気。まずい、母さんが父さんを名前で呼ぶ時は、なにかしらの父さんのまずいものが見つかった時だ……。

その声にはもはや条件反射すら覚えてしまったているのか、父さんはその声を聞いた時から直立の姿勢に硬直、顔には脂汗がびっしり。  
「な、ななな、何……かな……？ 和泉……？」

そして鈍い音が聞こえてきそうなほどぎこちない動作で母さんの方へ顔を向ける。

「これえ、ソファアの下から出てきたんだけどあ……」

ゆらあ、と母さんの右手が持ち上がる。その右手には、ピンク色

をした、なにか子供が知ってはいけない世界を思わせる娯楽施設の名刺。

「……どうということ」

母さんの声は、そこでいつもののんびりした声とはかけ離れた、まるで相手を射殺すかのような鋭い声を出す。

「あ、い、いやこれはだなあ和泉、か、かか、会社の接待でお偉いさん方がどうしてもって——」

「あらあ、会社の上司が増えたのね、アナタ。確か、あなたの上司って、みんな六十、七十の方ばかりだったわよねえ……」

「あ……」

しまった、と言わんばかりの顔をする父さん。なんて分かりやすい人なんだろう。……将来、こうはならないようにしよう。

「じゃあ母さん、俺は自分の部屋で荷物整理してるね」

「うん、ごゆつくりねえ、功ちゃん」

「ま、待て功司！ お父さんを見捨てな——あ、いやなんでもないですってあああ——！ いやあああ——！ ダ、ダメ——！——！ ごごご

ご、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいイイイ——！——！ あ、あ

あ……！！ アアアア——！……！……！——」

——こうして、俺はこの地から引つ越す事になった。……父さんの仕事の都合という事で——

### 第三章：10 話してみればそんなもの

「そうして、俺は引つ越した先でもある事件を起こした。それが半年前の事だ。それでこの学園に転校してきたんだ」

大体の過去を語り終えた俺は、一つ溜息を吐く。なんだ、話してしまえばけっこう楽じゃないか。

「そして、俺が今、東を助けるために使った力がその力だ」

「ほう……具体的にどんな事ができるんだ？」

黙って俺の話聞いていた坂上は、初めて合いの手を入れる。

「そうだな……俺ができるのは、世間一般に言われる超能力全般と、単純に『自分の能力を強化する』ことだな。超能力全般の説明はいらないだろう。後者の方は……そうだな、腕力を強くしようと思えば、そこらの壁を殴って穴を開けられるし、脚力を強化しようと思えば反復横とびで分身作れたりするな。神経系統は、五感はもとより、反射神経とかも強化できる。あとは……父さんが『どんなに酒飲んでも、肝臓を強化すれば絶対二日酔いにならないよなあ』とかボヤいてたぐらい、かな」

「へえ、けっこう便利なんだな」

「いや、そうでもないさ。さっきの話の通り、この能力を全開近くで使つと、俺の性格変わるし。力を使い終わつた後、めちゃくちゃ頭痛くなるし……。だから普段はプロミスリングで力を抑えてる。

プロミスリングを付けてる時は、一定以上出力を出そうとすると俺の体に電流が流れるみたいだし」

「どんな原理なんだ、それは？」

「さあ？ あと、プロミスリングを外すともものすごく不快な感じが体を駆け抜けるね」

「で、それが癖になりそうなのね？」

「いやならないから。なつたら俺、ただの変態じゃん」

「ハハハ、嘘をつくな矢城よ。気持ちいいものは素直に気持ちいい

と言ってしまえ」

「だから気持ち良くないって言っただろうが」

「ええ、嘘をつくなよ功司。一緒に二次元の女の子に罵られて感じようぜ？」

「うつさい。お前と一緒にすんな龍……鵜？」

「ってあれ？ さっきからなんか俺の発言に対する返答者が増えてない……？」

教室を見回してみる。右から見えていつて、桐垣と天竺、正面に坂上、左に龍鵜がいた。

「……………」

呆然とする俺。

「……………いつの間に？」

「どこまでも鈍いのね、あなたは。話の中盤、『俺は……東の事を愛している……！！』の辺りからよ」

「そんなセリフを吐いた憶えはない！」

「ええ、でも『好きだ』とは言ってましたわよねえ、桐垣さん」

「ええ言っていましたことですよ、氷室さん」

「ち、違う、あれは異性としての好きじゃなくて、幼馴染としての、友達としての好きなんだ！！」

「おお、真っ赤になって否定してる」

「ツンデレね」

「ツンデレだな」

「ぬう……」

怒ったふりをして、俯く。みんな、俺の過去の話を聞いていたみたいで、それでもいつもと変わらない態度でいてくれた。だから、本当は嬉しくて泣きそうだったとか、絶対に悟られなくなかったから。

「だから言っただろう？ そんな事を知られたところで、君の考えるような事態にはならないって」

多分それは、蚊の鳴くような大きさの声だった。だけど、俺の強

化されている耳には届いた。

（ああ、確かに……）

少し顔を上げて、バカにはしゃいでいる友達を見る。

（こいつたちにシリアスになるのも……馬鹿げてるよな……）

やっぱり俺はバカだ。こんな楽しい友達に対して、一方的に嫌われると思いこんで……。結局それは、こいつらを信じていなかっただけじゃないか。

本当、俺ってバカだなあ……。

頭を二、三度振って、重く悩んだ自分を頭から追い払う。またいつものように、ずっと笑っていられるように。

「ところで、湮亜ちゃんは何で眠ってるんだ？」

「ああ、東は——」

「矢城君が眠らしたのね。そしてこの教室に拉致監禁」  
「な！？　ちが——」

「そして次の目標は私だったけれど、坂上さんに見つかってしまい計画はご破算。ヤケになった矢城君は自分の持て得る全ての力を使い、坂上さんを手籠めに——」

「いやしないからそしてできないから！」

その言葉に首を傾げる天笠。

「あら、あなたは体の至る所を強化できるのでしょう？　ならその——」

「だああああ！！　ダメ！！　それ以上喋らないで——！」

「——力を持つてして、坂上さんを捕まえて縛って催眠術をかけて——」

「この人止まる気がねえ！？」

「冗談よ」

「本当の事を言つとだな」そこで事件の当事者とも言える坂上が口を挟む。「実は湮亜は悪の組織に連れ去られるところだったんだ。それを矢城が助けたしてここに運んだんだ」

「悪の組織？　なんで東さんはそんなものに攫われそうになったん

だ？」

「彼女は組織の重大な秘密を知ってしまったんだ」

「重大な秘密……」

まあ確かに重大な秘密だが、はたしてそれを言ってしまった方がいいのだろうか？　いくら反抗期だからってこんなにおおぴらに秘密をバラしてしまってもいいのだろうか。

「その秘密とは……」俺と坂上と東以外のその場にいる全員が固唾を飲む。「組織のリーダーがロリコンだという秘密だ」

……。

……。

……………。

ええ、言うに事欠いてそれはどうよ？

「ああ、それは確かに重大な秘密だな……」

「世間に知れ渡ったらあつという間に社会的な死に追い込まれるわね……」

「ロリコンだからって気にする必要はないさ。自分の好きなものを好きと言って何が悪い？」

ってみんな信じてるし。なんだ、俺がおかしいのか、疑問に思うのは？

「坂上……」

「まあ気にするな。大体、来宮梢を誘拐するあたり、違うとも言い切れないだろう？」

また、かなり小さな声でそう言ってくる。

「という訳で、これから私と矢城とでその悪のリーダーを打倒してくる」

「ええ？　俺も行くの？」

「さつき了承したじゃないか。『東を傷つけた奴らを……俺は絶対に許さない！』って」

いや言っていないからねそんな事。

「はあ……分かった。それじゃあそのロリコン野郎を倒しに行くか」

「そうこなくちな。涅亜の事はみんなに任せたぞ。一応授業中だし、自習といえどもそんなに教室を出ていたら色々怪しまれるだろう」

「あ、もう授業始つてたんだ……」

言われて初めて気付いたが、この教室につけられた時計を見ると、確かにもう授業が始まつてから五分経っていた。

「確かに、いくら教師が教室にいないといっても、そんなに空ける訳にはいくまい。……ところで、東さんはこのまま放っておいても目を覚ますのか？」

そう言つて、桐垣は東に目を向ける。そこには未だにぐったりしている東。

（そう言えば、東はやっぱり、俺の事嫌つてんのかな……）

確認は取れてないけど、俺に対する接し方を思い出すに、多分嫌つてくれないんだろう。……自信ないけど。

「大丈夫だ。あれはただ単に気を失つてただけだから、その内目を覚ますだろう」

「そっか……良かった……」

思わず安堵の呟きを洩らす俺。

「おやおやあ、今さらになつてようやく好きな人の安否を確認して安堵してるやつがいるぞ」

その呟きを聞きつけた龍崎が、俺に対して冷やかしの言葉をあげる。

「だから、好きは好きでも友達に対する好きだつて言つてんだろうが」

「ん？好きな人、としか言つてないのにそこまで否定するって事は、やっぱり？」

「うっさい、揚げ足取んじゃねえ。中学生かお前らは」

「ふっふっふん。人間はいくつになろうとも人の恋愛沙汰には興味を示すものだよ、矢城功司君」

「……だから俺は恋愛としてじゃなくて——」

「矢城君が嫉妬するといけないから、私が東さんをおぶっていくわね。大丈夫、安心して、矢城君。私にはそっちの気はないから」

「それを聞いて何をどう安心しろというんだ……」

「だから、私と東さんが——」

「説明は求めてない」

……これからしばらくはこのネタで弄られそうな気がするのは激しく俺の勘違いであってほしい。

「さて、矢城功司×東湊亜で話もまとまったところで、そろそろ行くか」

「いやその言葉を激しく否定したいんだが」

「なんだ？ 東湊亜×矢城功司の方が良かったのか？ お前は攻められる方が好きなのか？」

「俺はそういう事を言いたいんじゃない——いやもういい。なんかこの話の終りが見えないから」

俺は溜め息を吐いて教室を出て行こうとする。

「矢城」

と、そこで桐垣に呼び止められる。

「なんだよ？」

「これを持っていくといい」

そう言つて、何かを投げ渡される。

「なんだこれ？ 缶ジュース……っばいけど……？」

受け取ったそれは細長いジュースの缶に少し加工を加えたようなものだつた。

「桐垣製のフラッシュバンだ。さっきお前が取ってきたマグネシウムで作った。本物よりも威力は落ちるが、十分に使える範囲だと思うぞ」

「フラッシュバンって……」

いつの間に作つたんだ？

「まあ、ありがたく受け取っておく」

こつという桐垣の行動は謎が多いので、深くは気にしない事にする。

受け取ったフラッシュバンをブレザーのポケットに突っ込んだ俺は、  
今度こそ教室を出た。

### 第三章：11 裏切り予告

「さて、これからの事だが……」先ほどの教室を出た俺たちは、まだ煙が薄く立ち込める廊下を歩いていた。「とりあえず私がトランシーバーであいつらに連絡を――」

「あー、ちよつと待った」

「うん？ どうした？」

「あーいや、なんというか、だな」

「なんだ？ トイレか？」

「違う違う。えーっと、上手い言葉が見当たらないんだが……端的に言おうか」

俺は一つ咳払いをする。

「口調、乱暴になつても構わないか？」

「……はあ？」

「ああいやそんな怪訝そうな顔をしないでくれ。だから言っただろう？ 力を使つてゐる時は性格変わるって」

「確かに言っていたが……」

「だからな、急に言葉遣い変わったり、変な事を質問してびっくりさせるのもアレだと思つてなあ」

「はあ……」

と、急に坂上が呆れ顔になる。

「別にそんな事程度じゃ驚かないさ。自由に喋るといい」

「……そうか、なら……」まず先ほどから気になっていた事を尋ねる。「俺の正体っつか秘密はバラしたけど、お前の秘密はみんな知つてゐるのか？」

「……」

無言になる坂上。

「……坂上？」

「……言つてない」

名前を呼び掛けると、ものすごく小さな声で返される。

「言っていないって……」

「いやほら……恥ずかしいじゃないか。一人だけ年上だとか、実は『何でも屋』なんて得体のしれないものの一員だったりとか言うのはさあ……」

「……………」

「俺には強要したくせに？」

「うるさい。男と女の秘密は重みが違うんだ」

そっぽを向いて、そう吐き捨てるように言う。

「バラしていい？」

「断固拒否する」

「どうしても駄目？」

「……矢城君は……女の子の秘密を勝手にバラしちゃうの……？」

いきなりすごい女の子声でしおらしく言われてしまった。そんな風に言われたらバラせないじゃないか……。

「女ってズルいな……」

「男の自分を恨め」

俺がバラせなくなっただと思うと、すぐにいつもの声で喋り始める坂上。少し悔しいのでもう少しからかってみようかな。

「坂上って、ああいう可愛い声も出せるんだな」

「……か、可愛い……」

お、意外に効果ありか？

「ああ、お前のさっきの声、めっちゃくちゃ可愛かったなあ。いつもの凜とした声とのギャップで、一際可愛く聞こえた」

「う……………」

おお、坂上がめっちゃ照れてる。すごい光景だ。

「ああ、もう一回聞いてみたいなあ……………」

「うう……………君は、本当に性格変わるんだな……………」

頬を赤く染めた坂上が恨めしそうに言うてくる。

「そっ？ 変わってる？」

「ああ、すごい変ってるぞ……。普段の君ならば、こんな風に女子をからかって遊んだりなんか――」

「からかってないぞ。俺は本当に坂上の事が可愛いと思ってる」

「あう……」

ヤバい、坂上をからかうの癖になりそう。普段は飄々としてるのに、褒められるのに慣れてなくて照れるなんて。

「そ、そんな冗談はいいから、さっさと先へ行くぞっ」

そう言っただけでスタスタと先へ行ってしまおう坂上。逃げられたか。でも十分に楽しんだし別にいいか。

「はいはい。それじゃあまずどこへ向かうんだ？」

「えっと、まずはリーダーに居場所を聞く」

まだ少しきこなく喋る坂上は、ブレザーの内ポケットから小型のトランシーバーを取り出すと、何かボタンを押して操作しだした。「リーダー、聞こえるか？」

一通りその操作を終えると、トランシーバーに向かって喋り出す。「なんだ、薰？」

すると、トランシーバーからノイズ混じりの声が流れる。なかなか渋い声だ。

「そちらに合流したい。居場所を教えてくれ」

『俺は理事長室のある棟の一階にいる』

「？ 何故そんなところにいる？」

『ああ、言っただけだ。誘拐対象には、来宮梢の他に来宮桜も含まれているんだ』

「……初耳だぞ」

『だから言っただけだと言っただけだろ？』

「まあいい。それで、来宮梢はどこにいるんだ？」

『そいつは確か、お前の教室がある棟の一階の倉庫らしい』

「ふむ、了解した」

『ならいいな。もう切るぞ』

「ああ待ってくれ、最後に一つ」

坂上はそこで一拍、息を吸い込む。

「今から私、この計画を失敗させる為に動くから」

「は……？」

「は……？」

……奇しくも、トランシーバーの向こうのリーダーさんと声がハモった。

「じゃあそういう訳で」

『お、おい待てかお——』

——ブツ。

通信を切る音。そして坂上は、無言で手近にあった窓を静かに開けると、そこからそのトランシーバーを大遠投。トランシーバーは箱庭の中に消えていった。——そのトランシーバーが箱庭でプチ遭難していた男子生徒を救った、という話を後日聞いたが、それはまた別の話だ。

今はそれより。

「なあ、坂上」

「ん？　なんだ」

トランシーバーを投げ、清々した、という顔をしている坂上に尋ねる。

「なんでわざわざ裏切るって宣言したんだ……？」

「決まってるだろう。反抗期だからだ」

「……………」

恐るべし、反抗期……。

「ロリコンかと思いきや熟女もいけるとは……心底見損なった」

「……………」

……なんか、リーダーさんに同情したい気持ちになった。というかマジでロリコンだと思ってたのか……。

「さて、まず来宮梢を救出しに行くか」

「あ、ああ……」

何事もなく話を進める坂上に、俺はただ頷く事しかできなかった。



### 第三章：12 複雑な乙女心……？

一先ず来宮さんの救出を優先した俺たちは、まず来宮さんが捕えられているという倉庫に向かう事にした。

そこまで向かうルートは、授業中という事もあるので、まず人気が一番ないこの棟の一階までいってから、一度校舎から箱庭の方へ出て、生徒の教室がある棟に向かう事になった。

俺と坂上は、特別教室のある棟の階段を下っている。丁度今、三階から二階へ降り立つところだった。

「……ん？」

三階からの階段を降り終わったところで、俺は妙な気配を感じた。そう、まるで上の方から何かに覗かれているような――

「！ 身を隠せ坂上！！」

「きゃ！？」

俺は前を歩いていた坂上の体を少し強めに押す。当然、能力を開放している俺に押された坂上はヘッドスライディングをするかのようになり勢いよく前に倒れる。

同時に俺は横に跳ねた後、坂上と同じように前に勢いよく倒れこむ。その一瞬後には、俺たちが立っていたところに銃弾が跳ねた。

「上を取られたか……」

坂上がああ裏切り宣言をしたにしては、妙にすんなりと通してくれると思ったら、上を取るために敢えて通したのか……。上の階の階段からは死角にあたる場所で、立ち上がりながら俺は次にどうするべきかを考える。

（どうする……。俺があいつらなら、階段を塞いだところで、もう一つの階段が違う棟から人を送り、挟み撃ちの形を作るが……）  
多分そうしてくるだろう。現状ではそれが一番手堅く確かな方法だ。

（そうになると、死角は一箇所しかないか……）

でもその道は少し痛そうだなあ……。

「おい、矢城功司よ」

「あん？」

その道以外に通れる場所はないかを考えていると、未だに倒れたままの坂上が惘然とした声で話しかけてきた。

「私を助けてくれた事には礼を言う。……だが、ほかに方法はなかったのか？」

「はあ？ 方法って？」

「だから、別に突き飛ばさなくたって良かったんじゃないか、という事だ」

「え？ ああ、その事か。いや、急な事だったんでつい……」

「つい、じゃない。顔に傷がついたら責任をとってもらうところだったぞ」

「いや、すまん」

俺は坂上に近づいて、その手を取る。そして立ち上がらせる。

「まったく……小ざなところで気が回るくせに、変なところでは気が回らないんだな、君は……」

「気にしないでくれ。……あと、もう一つ気にしないでほしい事がある」

「なんだ？」

「今からお前を抱く」

「ああ抱く——」

ふと、真っ赤になって固まってしまう坂上。

「？ どうしたんだ？」

「お、おお、お前……だ、抱くって……どういう……」

「はあ？ 言った限りの意味だが？」

何をこんなに慌ててるんだ、坂上は。

「そそ、そんな事を急に言われたって……その、心の準備が……」

「いや、すまないが今はそんな事を言ってる暇はないんだ」

俺は坂上に近づく。すると、坂上はビクッと身を固まらせてしま

う。

「何をそんなに緊張してるんだ？」

「緊張するに決まっているだろ……！ は、初めて……なんだぞ……」

そこで、俺の耳が近づいてくる足音を捉えた。その音を詳しく探るために、俺は耳を澄ます。

（人数は……四人か。場所は……違う階段からだな）

だとするならば、すぐに『何でも屋』の奴らはこの階に姿を現すだろう。

「もう時間がない。失礼するぞ、坂上！」

「ひゃう！？」

俺は何故かギョツと目を瞑っている坂上をお姫様抱っこすると、迷わずに窓の縁に足をかけた。

（まあ、二階くらいの高さだったら怪我もしないだろう）

そしてそのまま、俺は窓の縁を蹴って飛び降りた。

すぐに襲ってくる浮遊感。内臓が浮く感じ。その中で、とにかく俺は、抱っこしている坂上を離さない事だけを気にかけた。

地面がけっこうな速さで近づいてくる。

俺の腕に抱かれている坂上は、ギョツと目を瞑ったままだ。

「——ぐっ……」

そして、坂上を抱いたまま、箱庭の外周付近に着地。俺の体重プラス坂上プラス重力加速度分の負担が俺の両足にかかる。痺れるような感覚が俺の体を駆け抜けた。

（……強化してても、けっこうつらいものがあるな……）

それに耐え終わると、俺はすぐに俺達の教室がある棟へと駆け出した。そして、目的の棟の入り口まで着くと、俺は坂上を腕から降ろした。

「……………」

「どうした、坂上？」

俺の腕から降りた坂上は、ものすごく不機嫌そうな顔をしている。

「……穢された。矢城功司に穢された……」

「はあ？」

「騙されて無理矢理に穢された……」

何を人聞きの悪い事を言ってるんだ？

「別に俺は騙してもなければ穢してもないぞ？」

そう言った俺はキツと睨みつけられた。

「うるさい。普通、抱くなんて言われたら……そう思うだろう……」

「いや思わないと思うぞ、普通は」

「うるさい。……何だか今の君と一緒にいると調子が狂うな……」

そんな事を言われても。

「それに、飛び降りるなら飛び降りると先に言え」

「いやもう近くにまで来てたからさ。『何でも屋』の人達」

「うるさい。よい子が真似したらどうするんだ」

「大丈夫だ。こんな真似する奴は悪い子に決まってる」

「ならお前は悪い子だ。……元に戻ったら仕返ししてやる……」

「……坂上、聞こえてるぞ？」

「……当り前だ。聞こえるように言っている」

「その割には精一杯小さな声を出そうと頑張ってたように見えたけど？」

「うるさい。先を急ぐぞ」

坂上はそう言って、さっさと棟の中に入って行ってしまった。

「……女って、よく分かんねえなあ……」

俺は小さく呟きつつ、坂上の後に続いて棟の中へ入って行った。

### 第三章：13 救出

生徒達の教室があるこの棟は、一階が空き教室や倉庫、二階が三年生の教室、三階が一年生の教室、四階が二年生の教室、といった造りになっている。はつきり言って一階を使うことはほぼ皆無。なんでも他の二つの棟が四階建てになっているため、一つの棟だけを三階建てにすると景観がどうかという理由でこの棟も四階建てになったらしい、と、前に桐垣から聞いたような気がする。

とにかく、この棟の一階層は、授業中の時間帯となれば人が通ることがまずない空間となるのだ。

「だからっていきなり襲つてくるとはなあ……」

その廊下で、のびている『何でも屋』の構成員二名。

坂上が棟に入り、俺も続いて棟に入ったその途端、入り口から廊下に繋がる丁字の死角から二人が襲いかかってきたのだ。

「それにしても……武器が鉄パイプってどうよ？」

「……まあ、そういう奴らもいるんだ。気にしないでくれ」

坂上はそう言って、その倒れてる奴らを跨いで先へ進む。

「そう言えば、一つ聞きたかったんだが……」

「私の個人情報に関わることで以外なら受け付ける」

「……………」なにか警戒されている気がする。「……………」『何でも屋』が使ってる銃ってさ、本物なのか？」

それもとりあえず気にしない事にして、坂上に質問を投げる。

「いいや、おもちゃを少しいじった程度のもので、当たっても死にはしない。ただ少し痺れて行動不能になるくらいだな」

「ふーん……けっこう器用なことしてるんだな」

「いやただ貧乏なだけだ」

「……………」

そんな身も蓋もない。

「だからあいつには分からないんだろう。年頃の女子高生が毎日毎

日コンビ二のお弁当やらおにぎりやらで満たされる訳がない事を。

確かに体は満たされるかもしれないが、心までは満たされないんだよ、コンビ二のものじゃあ。……だって、そこに愛がないだろう?」

「いや、店員さんの愛とかが詰まってる——」

「ダメなんだよ、そんな出来合いの愛なんかじゃ。その点、君は恵まれているな」

坂上は少し羨ましそうに俺の事——というか、俺の胃腸の辺りを見る。

「体も心も満たされていそうだ……」

「……………」

……多分、今なかなかいい話をしてるんだと思うんだけど、表現的にいやらしく感じる俺の心は濁っているのだろうか……。

「……とりあえず、来宮さんを探しに行こうか」

「そうだな。この議論はまた後ですとしよう」

……まだ続くんた、この話……。俺は内心溜め息を吐きながら、来宮さんの捕えられている倉庫を目指した。

「さて、目的の倉庫まで着いたのはいいが……」先ほどのトランシーバーの会話で、『何でも屋』のリーダー曰く来宮さんの捕えられているらしい倉庫の扉を前にして、俺は一つの懸念を口にする。「……本来に来宮さん、ここにいるのか?」

「ふむ……こちらからあの広守備範囲の変態に裏切り予告をしてしまった以上、来宮梢がこの中にいる、という確証はないが——ん? どうした、矢城?」

「いやなんでも……続けてくれ」

そこまでぼろくそ言われてるリーダーさんに同情していた、なんて言えるか。……反抗期の女子高生って、みんなこんななのか? つかリーダーさんって本当、どんな人なんだろう……。

「とりあえず、他に手掛かりは何もない。それに、いくらこの時間帯とは言えども、気絶した少女を運ぶのはいささか危険すぎるだろ

う。ここは、この倉庫に賭けてみよう」

「分かった」

坂上の判断に従い、俺は扉に手を伸ばす。その手を、坂上が止める。

「いや待て。ここに来宮梢がいるにしてもいないにしても、待ち伏せぐらいはされているだろう」

「まあ、確かになあ……」

計画の邪魔をする、という事は来宮さんと理事長の身柄をこちらに奪うって事だし。

「それじゃあどうするんだ？」

「そこはそれ。先ほど受け取ったあのフラッシュバンの出番だろう」

「ああ……」

俺はポケットにしまっておいた例の桐垣製フラッシュバンを取り出す。……本当に、パツと見てただの缶ジュースにしか見えない。

「使うのはいいけど、どうやって使うんだ、これ？」

「さあ？ 普通は栓みたいなものを引き抜いて着火させて相手に投げるのだが……多分、そのプルタブで飲み口を開ければいいんじゃないか？」

「プルタブって……」

確かにこれ、飲み口開いてないけど……。

「まあとりあえずやってみろ」

「ああ……」

とりあえず、プルタブに指をかけ、力を入れて開けてみる。『プシュッ』という、ガスが抜けるような音の後に、飲み口から薄い煙があがる。

「うわ、マジで着火された……」

「よし、投げ入れてみるか」

坂上は俺からフラッシュバンを奪うと、倉庫の扉を少し開けて、その隙間からそれを転がすように投げ入れた。そして扉を閉める。時間にして、約一秒後。

倉庫の中から、何かドタバタとした音と、何人かの男の呻き声が聞こえてきた。

「どうやら上手くいったようだな」

坂上はそう言うつと、倉庫の扉を開いて中に踏み込んだ。俺もそれに続く。そして、薄暗い倉庫の中では――

「……なんか、少しデジャヴを感じる……」

呻きながら倒れている『何でも屋』構成員三名と、器用な格好でマットの上に寝かされている来宮さん。そっぴや、この人と初めてあったのもここだったなあ……。

「よし、来宮梢を運び出すぞ」

坂上はそう言つて、変な感傷に浸っていた俺を見る。

「……え？　俺が運ぶの？」

「もちろん。女の子の細腕には箸以上の重たいものが持てない事を知らないのか？」

「……………」

俺の周りにいる女性の方々は、絶対にそんなか弱くはない、と言いたいけど言えない。言つてはいけない気がする。

「……分かった」

俺は溜め息をついて、横になつている来宮さんを背負つ。

「おや、私の時はお姫様抱っこだったのに、来宮梢は背負うんだな」

「……それがどうした？」

「いや、それはつまり来宮梢や湮亜には背負つて楽しめる感触があるつても、私にはないと言われている気がするな」

「そんなもん、時と場合と状況によるだろ」

「つまり私には胸の厚みがない、と言いたんだな？」

「誰もそんな事言つてねえ！」

「というか何だ？　坂上つて、自分の体形気にしてんのか？」

「当たり前だろう、女で体形を気にしない人間はそっぴない」

「ふーん……別に、そこまで気にする体形でもないだろ、坂上は」

「……本当にそう思うのか？」

「ああ。別にただスレンダーな体形なだけじゃん。均整も取れてるし、髪も綺麗だし、なんというか……浴衣とかすごく似合いそうな気がするけどな。ああそれと――」

「いやもういい」

身長も少し高めだし凛々しいと思う、と続けようとした俺を遮る坂上。俺に顔を向けていないけど……多分赤くなつて照れてるな。

「人に自分の事を聞いておいて照れるなよ」

「うるさい。純情なんだ、私は」

そう言つてさつさと倉庫を出て行つてしまう坂上。俺は溜め息をつきつつ、女に対しての背が高く凛々しいっていう言葉は果たして褒め言葉のうちに入るのだろうか、なんて考えつつ坂上の姿を追つた。

### 第三章：14 心配だから

「さて、ここまでは順調だが……」

坂上と来宮さんをおぶった俺は、なるべく人目につかない場所を選んで、どうにか学園長室のある棟の入り口まで到着した。

「ここから先はそうはいかないかもしれない」

「まあ、職員室とか近いしなあ」

「それだけじゃない。あの変態もこの棟にいそうだからな」

「……………」

ついに変態の一言に済まされるようになってしまったリーダーさん。……俺も将来、娘が出来たらこう言われんのかなあ……。

「あいつは変態だが、腕の方は確かだ。銃の使い方とか、日常生活じゃあ使わない様な事とか、私は仕込まれたからな」

「ああ、だからあんなにシューティングコースターの成績良かったのか……………」

「そうだ。だから、いくら人の平均を凌駕している君といえども、気をつけないとやられるかもしれない」

確かに、なんか場数とか踏んでそうだな。もん。

「ああ、わかっ——」

「だから遠慮も容赦も何にもなく殴ってくれて構わない。というより、むしろ全力で殴ってやってくれ。主に頭とか」

「……………」

……………どこまで嫌いなんだ、この人は、そのリーダーさんを。

「さっきから、君はどこか手加減をしているように見えるが、本当にうちのリーダーにはそんな遠慮はいらないぞ」

「……………あー、悪いが、手加減するっていうところは譲れないな」

「何故だ？」

「いや、手加減しないと、多分俺……………歯止めが利かなくなるというか……………」

……本当は、父さんと母さんとの約束。やむを得ずその力を使う事があっても、絶対に手加減する事、というのは。

でもそれを言うのは何か……少し照れるので適当に言葉をぼかす。いやまあ歯止めが利かなくなるってのもあながち間違ってるのではないですが。

「構わん、やってしまえ」

「え？」

「と、言うのは冗談だが……まあしょうがない」

いや今絶対本気の目だったよねあなた。

「手加減してできる範囲で殴り飛ばしてくれ。主に頭を」

「……善処する」

本当に嫌ってんだなあ……。

将来、娘にこうは思われまい——ていうか思われたくない。そう思いながら、俺はそのリーダーさんが潜んでいるであろう棟に踏み入る。

「……静かだな」

「ああ……」

この時間は係の人もないのか、入ってすぐに広がる学食と購買には人がなかった。

ただ椅子と机が規律良く置かれた空間は隠れるにはそこそこいい場所だが、どうやらこの階にはいないようだ。

（流石に来宮さんを背負ったままじゃ闘えないし、保健室に着くまでは出会いたくないな）

俺はそう思い、足音だけを残してさっさと階段へと向かった。それに坂上もついてくる。

階段に辿り着くと、まず上の階の方に意識を向けた。

（なにか覗かれるような視線は……感じないか）

絶対に安全、とはいい切れないが、高確率で上からの攻撃はないだろう。

「どうしたんだ？」

「いや……また上からの奇襲とかないか警戒してた」

「大丈夫だろう、別に」坂上はそう言うと、俺の背中——来宮さんを指差した。「こっちには来宮梢がいるし、あの変態には攻撃できないだろう?」

「……………」

そうか? 普通は攻撃されそうな気がするけど……。

そう思いはしたものの、確かに上の階からは妙な視線を感じないので、俺は階段に足をかけた。そして、駆け出す。一応は安全だろうけど、万が一にでもこんな狭い空間で、しかも上から奇襲なんてされたら、こちらの動きがかなり制限されてしまう。さらにこちらは来宮さんを背負っている訳だし。

来宮さんを振り落とさない程度の速度で、なるべく音をたてないように階段を上り、折り返してさらに上る。

二階に着いたが、そのまま通り過ぎてさらに上り続ける。職員室があるし、何よりもまず安心できない。同じように階段を上り続けた。

三階に着いたら、俺は速度を落として普通に歩くような速さに歩調を緩める。そして、保健室に向かうために廊下に出る。

「……とりあえず、無事に着いたみたいだな、坂が——」

そう言っただけで、初めて坂上がいない事に気付いた。

「……坂上?」

「……なんでいないんだ?」

（はっ!?!）

その事に頭をひねっていると、一つの仮定に行き着いた。

（も、もしか俺……騙された!?!）

ありえない事じゃない。上手く俺を取り込んで来宮さんを運ばせる。それでこの棟まで誘導して、所定の場所——この場合で言えば保健室——にまで俺を誘い込む。そしてこの棟に隠れていた百人くらの『何でも屋』構成員で俺を取り押さえ、黒ずくめのニクいあんちくしょうに変な薬を飲まされて、俺は幼児退行。そう、外見が

来宮さんみたくなつてロリコン疑惑のあるリーダーさんに攫われて、海外貿易の商品として取り扱われて「こんなでも高校生」幼い顔して大胆フテキ」的なキャッチフレーズと共に市場デビュー。サヨナラ僕の日常……っていう展開が俺を待ち受けているに違いない。

「……おい」

ていうかそもそも組織を裏切る理由が反抗期っていうのも怪しいもんな、普通。反抗期ってのは「お父さんなんて、大っ嫌いっ！」とか言われたりするくらいの可愛いもののはずだ。

「……おい、矢城功司……」

そんな普通を鵜呑みにしている俺って……。お人好しすぎるのか、俺は？ いやだけど友達を疑うの、よくない。

「や、ぎ、こ、う、じー！」

「はっ！？」

友達を疑う事の重大さ十分ほど誰かに説き始めた辺りで、俺は我にかえる。そして我にかえた俺の目の前には、息を切らして、すこし頬が赤くなった、猛禽類のような瞳で俺を見つめる坂上薫さんご本人。

「……良かった、俺は正しかったんだ……」

「……何が、正しいかはこの際、置いておくとして……あんなに全力で、走る事は、ないだろう……」

息を切らしている坂上は、いまだ俺の事を獰猛な瞳で見つめたまま、文句を言ってくる。

「そんなに俺、速く動いたつもりはないぞ？」

「黙れ……階段を、六段飛ばしで上る、奴に、普通の、人間が、追いつけるわけ、ないだろう……」

途中からの読点は息を切らしていたからではなく、強調のための読点だったと思う。

坂上はそこまで言い切ると、大きく深呼吸した。スーッと吸って

「そのせいで私は階段を全力疾走して途中で室見成二に見つかって

恥ずかしい思いをしてあいつはあいつで『まあほどほどにな。授業サボるのはいいけど、逢引きは行き過ぎたら処罰されるぞ』とか訳分からん事を言つてどこか行くしそれを追いかけて逢引きじゃない事を懇々と言い聞かせた後また階段を全力で上ってくる羽目になつたんだぞ!？」

——吸つた量とは釣り合い取れないくらいに捲し立てて、また吸つて、

「あーそうか。授業サボるのはいいんだ、あの人の基準だと……」

「理解を得るのはそこじゃないだろう矢城功司ええ貴様は私を侮辱しているのかそうかそうなんだな先ほどの行動から薄々は感じ取つてはいたがもう承知できない大人しく私に成敗される!！」

——やっぱり釣り合わないんじゃないかと思える程の言葉を一息で吐き出す。

「あー、坂上、盛り上がつてるところ非常に申し訳ないんだが……声、大きいぞ?」

「知るかそんな事大体貴様はさっきから私に対しての接し方が不遜だろう年上は敬えというか敬うべきなんだ特に貴様は」

「いやな、ここで大きな声を出されると——」

「ん? 廊下で大きな声出してどうしたの?」

……ほら、白井先生が保健室から出て来ちゃったじゃないか。

白井先生は俺の姿を確認すると、のんびりとした足取りでこちらに向かつて歩いて来る。俺は白井先生に背を向ける。

「いやなんでもないです、白井先生」

「え? 授業中にこんなところで幼女背負つて女の子と痴話喧嘩してるなんて、女の子がすごく首突つ込みたくなるシチュエーションじゃない?」

「いやいいです首突つ込んでくれなくて。」

「いや、若いつていいわね」

「あなたも十分若いでしょうが」

「あら嬉しい。でも、私にはもう夫がいるから、ごめんね、功

ちゃん」

「今の発言の何をどう斜め上に取ったら夫がどうかって話に発展するんですか？」

あと俺の目の前にいる坂上薫さん。なんでそんなに嬉しそうにいやらしい笑みを浮かべているの？

「ふ、ふふ、ふふふふ……いいネタを手に入れた……。矢城功司が保健の白井由衣を口説いた、と……今度桐垣と湊亜に教えてやるう……」

「……………」

俺は一週間後くらいの俺にエールを送った。頑張って逃げてね、未来の俺。

……今はそれより。

「ところで功ちゃん、どうしてもそっちの方を向いてるの？」

「……………」

もう俺のすぐ後ろくらいに立っているだろう白井先生に、俺の瞳を見られない事。

もしも見られたら、非常にマズイ事態に発展するかもしれない。

「功ちゃん？」

「……白井先生、ちよつと来宮さんをお願いできますか？ 貧血が何かで倒れちゃってみたいなんで」

その問いに答えず、来宮さんの容態を見ってくれるように頼んでみる。

「うん、それは先生としてもちろん看病してあげるけど——」

「それじゃ頼みます」

俺はなるべく白井先生と視線を合わせないようにして保健室へと向かい、保健室へ入ると空いているベッドに来宮さんを降ろして静かに横たえた。

「ちよつと、功ちゃん」

「……失礼します」

それに追いついて、声をかけてくる白井先生の言葉を強引に遮り、

俺は保健室を出て行こうとする。

「――功ちゃん」

その足が止まる。止められた。白井先生の、滅多に聞かない鋭い声で。

「正直に答えて。……今、使ってる？」

主語を欠いた曖昧な質問。だけど何を指しているかはよく分かった。

「……………」

俺は少し逡巡した後、頷いた。

「……………」

白井先生の声に陰がさす。何かを諦めたような、何かを認めたような。

「……………」

「……………」

「眩暈とかは？」

「まだ、ないよ」

「これからどこに向かうの？」

「……………」

言っていいか、少し悩んだ。本当に、少しだけ。

「……………」

でも隠し事はできなかった。というか、したくなかった。

「……………」

白井先生が、一つ溜め息を吐くのが聞こえた。それはなんの溜め息だったんだろう。

「それじゃあ、俺は急ぐから」

「うん……………」

でも、かけられた声は温かった。

保健室を出ると、坂上が扉に寄りかかって待っていた。

「お待たせ」

それだけ言っ、俺は階段へと歩く。

「不躰な質問だが……昔、なにかあったのか、あの人と？」

「いや、なにかあったっていうか……」

何かあった訳じゃない。あの人と俺を端的に一つの言葉でまとめると――

「そうだな、過保護な叔母と異常な甥の関係かな？」

「過保護？」

「ああ、過保護」

……能力のせいで、苦しむ俺を見るのが何よりも嫌だった叔母。

俺が笑っていられるように、いつも明るかった叔母。何かと俺の事を気にかけてはドジを踏む叔母。

「まあ……親とかの過保護は時に子供には鬱陶しく感じるものなんだよ」

「ふうん。……恵まれていたんだな、君は」

「まあ、な」

様々なものに恵まれすぎた。そのせいで辛い思いも温かい思いもした。

「だから今回も、俺の事を心配して、心配しまくって、そのせいで今頃コーヒーに砂糖と塩を間違えて入れたり書類の記入ミスなんかをしてると思う」

その姿が目には浮かぶように想像できる。……昔から変わらないもんな、由衣姉さんは。

「だから、心配はかけなくなかったんだよ。俺のせいで自分が失敗するなら、俺の事なんか気にかけなくてもいいのに」

「君は、心配されて嬉しくないのか？」

「……嬉しいさ」

嬉しいに決まってる。だけどそのせいで苦勞するなら、心配なんかなくていい。

それでもやっぱり――心配されたい。

「なんとも厄介な性格だな、君も」

「……気にするな。俺ももう、多分気にしないから」

これも性分。なら開き直って、ガキはガキらしく心配されまくっておこう。

「という訳で、さっきの口説くとか何とかの話は黙っててくれるよな？」

「それはそれ、これはこれ」

「……………」

いい話的な流れで有耶無耶にしたかったが、さっきの事を言う気満々な坂上。人生は時に無情だ。

### 第三章：15 対峙

この棟の四階は、フロアの大半を理事長室が占めていて、理事長室以外に部屋がないせいかな廊下も他の階と比べると少し広めに作っている。この理事長室に普段用がある事なんて滅多になく、この階に来ること自体が少ないため、少し広いこの廊下が少し不思議なものに見えた。

「んで、その中央におわしますのが……」

その中央に、理事長室の扉からも少し離れたところに立っている一人の男の姿があった。

体格も良く、健康そうに少し日焼けした浅黒い肌。着ているなんでもない服の所々は、筋肉によって少し盛り上がっている。それらは、こちらを見つめている男の渋い顔によく合っているような印象を俺に受けさせた。

「ああ。『何でも屋』さんのリーダー、御更木 佑みかい ゆうだ」

廊下の中央で立っている男——御更木は、そう言った坂上に目をやる。

「薫」

発せられた声は、先ほどトランシーバー越しに聞いた声と同じく渋いもので、外見や雰囲気と合わせると、まさにハードボイルドといったような感じがした。

（……ロリコンなんて感じ、全然しないけどなあ……）

思わずそんな場違いな事を考える俺がいた。

「なんだ、リーダー？」

「……何故、俺に歯向かう」

俺の前に歩み出て、御更木と正対した坂上にそう問いかける御更木。

「裏切った理由か？ ふん、そんなの決まっているだろう」

坂上はそう言うと、俺の方を向き、俺の目の前まで来て、俺の首

に腕を巻きつけてきて、まるで俺に寄りかかるようにして――

「こいつと駆け落ちするからだ」

「はあ！？　なに言ってるんだ、坂が――」

「薫。そう呼べといつも言っているだろう？」

「いや今はじめて聞いたからそんな言葉。ていいうか何？　何がしたいのこの子？」

「……貴様」

と、今まで坂上の事を見ていた御更木が俺に話しかけてくる。

「ああ？　なんだよ、今お前に構ってる場合じゃ――」

「薫に何をした」

「――いや何もしてないですから。あと人の話は最後まで――」

「『何』はしてなくても『アレ』や『ソレ』はやったけどな」

「っ――！」

俺の言葉を遮って、よく分からないけどとりあえず不穏当であるう発言をする坂上。その言葉に、いささか以上の衝撃を受けたご様子の御更木佑さん。

「だからちよつと待て坂上。お前、さっきから何を言ってるんだ？

あと俺の話を最後まで――」

「何って、私とお前の愛の営みについての説明をしようとしてるんだが？」

聞けよ！　じゃなくて、

「いやなにを捏造してんだお前は！？」

「照れるな。なにも隠すような仲ではあるまい？」

「したり顔で、わざとらしい程に俺に抱きついてくる坂上。……こいつ、絶対に楽しんでやがる……」。

「いや、ていいうか、それよりも……」

背を向けた坂上の向こう側、俺の真正面にいる御更木からの視線がめっちゃくちゃ痛いんですけど……なんで？

「なあ、坂上」

小声で俺に抱きついた坂上に話しかける。

「演技だ。これは演技、だから照れるんじゃない。演技なんだからこれは」

その坂上はさらに小さな声で何やらブツブツと呟いている模様。ていうか自分が照れるんならこんな事すんなよ。

「……なんか、リーダーさんがすごい目で俺のこと睨んでんだけどその事にツッコミを入れるとややこしくなりそうだったので今は気にしない事にして、俺は坂上に疑問をぶつける。

「ん？ あ……ああ、それはきつと奴がロリコンだからだろう」

「……………」

話が繋がってないと思うのは俺だけか？

「いやロリコンとかはここでは関係ないだろう」

「そうか？ あいつはきつと自分の娘にあたるような私が、どこの馬の骨とも知れない男に抱かれてるから睨んでるんだろう？」

「……………」

あー、大体理解した。うーん、何か違うような気がずつとしてたんだよ。それも、多分、今解けた。

「なあ坂上」

「なんだ？」

「お前さあ……あの人に、なんか、もうこれでもか、つてぐらいに世話焼かれなかった？ あとなにかと心配されまくったりとか、時にうるさく感じるくらいに」

「……よく分かったな。いや、先にロリコンという見識を与えてたんだから、それくらい分かって当然か」

「……………」

俺の推測、大当たり。

そして認定。御更木佑。東家のお父様と同類。つまり親バカ。

「……坂上、お前ロリコンの定義、履き違えてると思うぞ」

「そんな訳ないだろう。あれだろう？ そっいう趣向の人間は、幼児や可愛いくて小さいものに対して愛情を抱いて、大切にしたり可

愛がったりしてやるものなんだろう？」

「……いや、近いんだろうけど……多分違うぞそれ」

それくらいの愛情だったら誰でも持つてる感情だと思うぞ？

「……そうなのか？」

「多分、そう」

坂上は俺に抱きついた姿勢のまま、啞然とした表情を作った。

（坂上のロリコンの知識って、どこから仕入れたものなんだ……）

一方の俺は、そんな事を考えていた。

「じゃあ、あいつのアレは何なんだ？ 私を異常に可愛がりたがるが……」

「ああ、それは――」

「いつまでその姿勢で内緒話をしている気だ、貴様らは……」

親バカだと思う、と続けようとした俺の言葉は、御更木の静かな怒りを湛えた声によって遮られる。

「……おい、あの人すごい怒ってるぞ……？」

「ああ……昔から私に言い寄ってきた男には、同じような感情を示していたよ。そして、その男共はあいつが問答無用で蹴散らしていたなあ……。今まで私を独占したくてやっているのかと思っていたが、今聞いた話が本当なら、何のためにやっていたんだろう？」

とりあえず理解した。話を聞く限り、あの方は絶対に娘の結婚を断固認めない部類の人間だという事を。

ついでにもう一つ。今までのやり取りを振り返るに、あの方は現在怒りの限界点を今にも振り切らんばかりに怒っている事。

「言っても離れないとは、な……。いいだろう、貴様。望み通り、地獄へ叩き落としてやる……！！」

まずい。多分今すぐくままずい状況。このまましていると俺、マジで消される。

「坂上、とりあえず危ないから、保健室にでも避難してくれ」

「ああ、言われなくてもそのつもりだ。なにせこうやって体を張ってあいつを挑発したのも、お前にあいつを向かわせるといふ私から

のささやかな復讐だからな」

……こいつ、さっきの様々なやりとりを根に持っていやがったのか……。

「……なら、保健室で口説いたのどうだの事は——」

「言うがな。みんなに公表するがな。もう地方ローカルで垂れ流すかな」

その上でさっきの事をみんなに、面白おかしく伝えるだと？　こいつ鬼か？

「……『保健室で待ってる』？　『言われなくてもそのつもり』？　『体を張って挑発』？　拳句の果てに『口説いた』？」

そして俺の前方にいる推定三十代前半のあなた。なんでそんな誤解されやすワードグランプリを開いたら予選を突破しそんな言葉のみを取り上げる？

「……く、ふふ、ふはははは……ははははは、はは、は……くくく

……」  
あと笑い方怖いから。そんな渋い顔と声で悪役笑いしないで。

「小僧」

御更木から発せられた言葉。低く、昏く響いたその言葉は、俺の鋭敏になった神経に危険信号を出させるには十分な威圧感があった。  
「坂上、マジで危ないから避難してくれ」

まだ抱きついたままだった坂上を引っぺがし、階段の方へ行くように背中を押す。

「……本当に、本気出さないと負けるかもしれない」

「だから言っただろう？　腕は立つと。まあ、今の君なら負けないだろう。それじゃあ、頑張って勝ってくれ」

坂上はそう言って、階段に向かって歩いていき、

「私たちの将来の為に、な」

意地悪く緩んだ頬をこちらに見せ、とどめと言わんばかりの挑発を残して去って行った。

「……勘弁しろよ……」

正直、これ以上御更木を怒らせないで欲しかった。

### 第三章：16 矢城功司VS……？

「小僧、最期に一つだけ尋ねておこう」

「……何か？」

残された俺は、溜め息をついて御更木の言葉を促す。

「薫とは、どこまでいった……？ いや、薫に何をした？」

「……何も」

もう一つ溜め息をつく。なんて質問だよ。

「嘘をつくな！ 貴様、嫌がる薫に、無理矢理、何を、やったんだッ……！」

「うるせえですよ！？ つーかちよつとなんか今不穏当な言葉混ぜてませんでしたかアンタ！？」

「俺は事実を述べたまでだ……！」

「事実だったら俺は既に国の治安機関のお世話になってますから……！」

「そこは上手く薫に口止めしたんだろう！？ 薫の、は、はは、破廉恥な写真でも撮って脅して……！」

「誰がんな事するかボケ……！ そんな事リアルでやったらテレビデビューだよ嫌な意味で有名人だよ……！ 第一、俺は純愛派だ……！」

「くっ、これだから最近の若者は！ 純愛で何でも済まされると思うんじゃない……！」

「いや済ます気ないから……！」

「き、貴様今認めたな！？ 薫と、そ、その、生命の営みをしたと今認めたな……！」

「認めてねえからそんな事……！」

「言い逃れは許さん……！ ふ、ふふふ……貴様はやはり断罪されるべきだな、他でもないこの俺に……！」

「はあ……！」

「例え世間が貴様を許そうと、俺は絶対に赦さん……！ 裁いてやる

「!!」

「はっ、上等だよおっさん！ さっきから訳分からん事を声高に叫びやがって!!」

「『上等』？ やっぱり貴様認めたな！？ 薫を、て、て、手籠めにした事を!？」

「だあ——!! 違うから!!」

もう嫌だこのオヤジ。なんでこんなに坂上と俺との既成事実を作り上げようとすんだよ……？

「問答無用!! 生まれた事を後悔しろ!!」

そう叫んで、俺に飛びかかってくる御更木。大きな体格に似合わない、かなり素早い動きだ。

「断る!!」

それを、身を低くして前へ足を踏み出し、御更木の下をくぐるようにしてかわす。かわした姿勢のまま、後ろを——御更木の様子を確認する。

御更木はズボンのどこかに隠してあった、一丁の小さな拳銃を俺に向けていた。

「避けようと無駄だ!! 娘をキズものにされた恨み——」その照準を俺に定め、指に力を込める。「晴らさずにいられるか!!」

前へ踏み出した足が廊下についた瞬間、俺は右へ跳ぶ。

——チュンツ!

鋭く小さな銃声の後、俺がいた地点で跳ねる弾丸。確認できた弾道、銃声、弾速。そのすべてがさっき撃たれたものとはまるで違う

「おいお前、それ本物だろ!？」

「何を今更! 薫が受けた傷、痛みはこんなものじゃない!!」

銃口が右へ移動する。着地して御更木の方を向いている俺へ——

「っ! 冗談じゃない!!」

俺は左へ、廊下の壁めがけて跳躍、そして壁を蹴ってやや斜め後ろへ跳ぶ。

俺が通ったところを、少し遅れて駆け抜ける銃弾。

「ええいすばしっこい奴め！！　そうやって薫を、し、使用済みにしたら逃げる気か！！」

「んな事してねえしねえ！！」

御更木との距離は、大体七歩。銃弾なら一瞬、俺なら一呼吸ちよつとで詰められる距離で、睨み合ったままいったん膠着する。

（くっ………どうする、あいつ予想以上のバカだ………）

相手の手には遠距離の対峙で圧倒的有利を誇る武器。

対する俺には……

（透視……サイコメトリー……テレパシー……念写……念動力……パイロキネシス……）

この中で今実用できるのは………念動力かパイロキネシス……。

（でも人間に対して使うのは………）

「ふ、ふふふふ………どうした小僧！　やっぱり薫の事は遊びだったのか！！　体のいい、せ、せせせ、性欲処理の対象だったのか！！」

「うつせえ！！　アンタの発言、さっきから生々しすぎんだよ！！」

「実行したのはお前だろうが！！」

「してねえ！！」

下らないやり取りをしながら、俺は辺りの様子を伺う。

前方、七歩の距離に、銃を構えた御更木。五歩の距離の壁際に、消火器。

後方、多分二歩くらい後ろに、トイレ。六歩くらいのところに、理事長室への扉。

（人間に、対して………）

………そういえば、前に龍鶴に対して使ったような気がするな………。  
「こんな事なら、マシンガンでも装備してくるんだったな！　そうすればお前に、薫で一時の快樂を得た事と、生まれてきた事を同時に後悔させられたのに！！」

「だから変な発言は控えろこの変態が！！」

……なら、無機物に対して使うのは、アリだよな。

（その場合の速さは……そんなに変わらないか。よし……）

決めたのなら迷わずに。礼を言うべきかどうか分らないけど、とりあえずありがとう、龍鷲。おかげで決心がついた。

「変態だど！？」 娘を大事に思う心のどこにやましい思いがあるというんだ！？」

「ねえよ！ 親が子を思うのは当たり前前、正しい姿だ！！」

（『燃えろ』）

御更木の真上の電灯に、念を送る。

（あんまりこういう能力は使ったことないけど……多分大丈夫、このくらいの距離からならできるはず……）

——パリン！

軽い音の後に、ガラスの破片と燃えた電灯の材料が御更木に降りかかる。

「ぬっ！？」

御更木の注意がそちらにいったのと同時に、後ろに跳ぶ。

（『外れろ』）

トイレのドアノブを握り、引く。大した抵抗もなく、ドアが壁から外れる。

その扉を盾に、御更木との距離を詰める。

「——くっ、小癪な……！」

御更木はその扉に容赦なく銃弾を浴びせる。一発、盾にしている扉に当たる度に、銃弾が当たった部分が歪に飛び出てくる。

（あと一步……もってくれよ……！）

扉の左下の端から、赤い置物が見えた瞬間、持っていた扉を蹴り飛ばす。御更木めがけて。

蹴り飛ばした瞬間、すぐに壁際に置いてあった消火器を手取る。桐垣に、必要もないのに何度か説明された消火器の使用手順。

1、上部の黄色い安全栓を抜く。

2、ホースを外し、目標に狙いを定める。

3、上下のレバーを握り――

「そんな事、言われなくなつて思い知つたさ!!」

――目標の視界を潰せ。

4、よい子は真似しないように。

飛んできた扉を跳ね飛ばした御更木の顔面めがけて、消火器から純水が放出される。

「ぬぐお!?!」

避けきれず、それをまともに喰らう御更木。それでも、おおまかな俺の位置を推測したのか、俺のいる方角へ向けられた銃口から発せられる弾丸。

(その角度からじゃ俺には当たらない)

弾丸は俺の右足の近くを通り過ぎて、廊下を跳ねた。

俺は、左手で顔を覆い、右手に持った拳銃を二、三発、明後日の方向に撃っている御更木に近づく。

そして拳銃を持っている右手を掴み、銃をたたき落とす。

「――だから、俺は生まれた事を後悔なんて、絶対にしない」  
がら空きの腹に、膝を入れる。

「かはっ……」

御更木からは力が抜け、そのまま廊下に倒れこんだ。

「……分かったか、この親バカ野郎」

そして倒れた御更木に向かい決め台詞。……誰かに聞かれてたら、相当恥ずかしいけど。

『……分かったか、この親バカ野郎』

「……え?」

どこかから、聞こえてきた、聞き覚えがあるようでない声。少しノイズ混じりで、なにかに録音したものを流しているような……

『――だから、俺は生まれた事を後悔なんて、絶対にしない』

あつれーどこで聞いた声だったけなあーなんか毎日聞いているよ

うで聞いていないような――

「って坂上イ――!!」

階段に繋がる廊下の死角から、顔を半分だけ覗かせて、ものすごく嫌な笑みを浮かべながら右手に携帯電話を持つ坂上を、発見。ついでに音の発信源は、彼女が右手に持つ携帯電話のようです。

「なかなか、かつこいい事を言うじゃないか……」

「お、おお前、いつからそこに隠れてた!？」

「最初から」

「あ、ああ……」

ものすごくご機嫌な坂上と対照的に、体中が熱くなって冷や汗出まくりの俺。

「くくく……いやぁー良い声をありがとうございました」

「……消せ。今すぐ俺の存在をこの世から抹消してくれ……」

「ははははは、なにもそんなに恥ずかしがることはないじゃないか、矢城功司君。君はかつこよく闘っていたよ。ほら、」

坂上が右手に持った携帯電話のボタンを操作する。

『――だから、俺は生まれた事を後悔なんて、絶対にしない』

少しの間を置いて、

『……分かったか、この親バカ野郎』

「な？」

「な? じゃねえ!!」

終わりました。矢城功司の尋常なる生活、ここに終焉を迎えました。明日からは『矢城中二病自演乙功司』の称号と共に後ろ指さされる道を歩んでいきたいと思えます。

「いやまだだ! そうなる前にそのケータイを奪取!!」

「そう来ると思ってブレザーの内ポケットに即収納!!」

動き出そうとした俺より早く、携帯電話を胸の内ポケットに入れる坂上。

「奪えるものなら奪ってみろ、矢城功司よ!」

「……………ッ!」

奪えるわけねえだろ！！ 無理だもつあそこに入れられたら手が出せないよ！！

「はっはっは」

俺が手を出せないのをいい事に、内ポケットに突っこんだまま、先ほどのアレを連続再生する坂上。

（くっ……誰でもいい！ 誰でもいいから、そのスイッチを押させないでくれ！！）

携帯電話のスイッチ（ボタン）を押すことに、確実に爆発する俺の大事なナニか。誰か止めて、この悪夢を。

「さて、これは早速明日から――」

「坂上様。お止め下さい。あなたがやめて下さるのなら、私はできる範囲で何でもやる所存でございます」

「ほう？ なんでもやると？」

「やります。できる範囲なら、罪さえも被れます」

「それでは明日、教室で大告白ライブ。好きな人と嫌いな人の名前をシャウトしてくれ」

「情け無用！？ この悪魔！！」

「それは冗談だとして」

心臓に悪すぎる冗談だ。というか、リアルで冗談じゃねえ。

「そうだな……」

坂上は少し逡巡すると、

「それじゃあ、今から私の事を薫と呼べ」

「……はっ？」

そんな事を言った。

「ほら、『さかがみ』よりも『かおる』の方が短いだろ？ それに『かおる』の方は子音が入ってるから実際キーボードを叩く手間が三回も減る。あと『坂上』だと『さかがみ』なのか『さかうえ』なのか混乱する人が出てくるかも知れないだろう？」

「……………」

最初の理由はまあ分かるが、後の二つの理由がよく分からないん

だが……。

「嫌か？ 嫌なら明日から私の着信メロディがアレになるだけだが」

「薫カオルかおるかを。何度でもどんな風にでも呼ぶから勘弁して下さい」

「ならばこれはみんなには隠しておいてやろう」

坂上——薫は嬉しそうにそう笑うと、上機嫌で歩きだした。

「それでは、理事長に会いに行くか」

「……………」

俺は何となく無然としながら、坂が——薫の後をついて行った。

### 第三章：17 ここにいたいから

銃弾を少し受けたのか、ところどころがへこんだ理事長室の扉を開き、部屋の中に足を踏み入れた俺は、まずこの広さに驚いた。

天井は他の所と同等の高さなのだろうが、他の広さ——横幅とか奥行とかはかなり広い。パツと見まわしただけでも、二十人ぐらいが宴会をするのに困らない程の広さはあるように見える。その広い室内の床は、ただでさえ他よりも綺麗であろう秋葉学園のそれらに、更に輪をかけたぐらいに見事なものだった。窓際を除く壁に沿っては本棚やらの高級そうな調度品が置かれている。見える範囲でのその中身は難しそうな本だったり一昔前の人気漫画だったり、思わず目を奪われる宝石のような置物だったりよく分からない三角錐の置物であつたりと、とにかく一概に言つて統一性がないものだった。

それらの調度品に囲まれるように向かい合わせで置いてある黒いソファーとその間にあるテーブルの向こう側、色々と事務には関係なさげな物が煩雑に置かれた大きな机を挟んでこちらをものすごく不機嫌そうに睨みつけている、布で口を封じられたおばあさん。いや、おばあさんと言つには少し若いかもしれない。

「あれが理事長か…… と言えは初めて会った気がする」

…… 初対面が猿轡さるくつわをされてる姿っていうのも斬新な出会いだよなあ。

「そんな呑気な事を言つてないで、さつさとアレを外すぞ」

薫はそう言つと、さつさと理事長の背後まで移動し、少しかがんだ。

「うーん、これはほとくのが面倒だな……。矢城、これ、千切れないか？」

「どれ？」

俺は理事長の後ろに回り込んで、少しかがんで薫が指すものを見る。

「うわ……なんだこれ？」

「一般的な縄だろう」

「いやそれは分かるんだけど……」

後ろ手に、縄で縛られた理事長の両手。その縛り方。解き方がまったく言っていないほど分からない、ものすごく複雑な結び目が何個もある。

（確かに、これはほどくの時間に時間かかりそうだなあ……）

「これ、千切れないか？」

「あー、多分千切れる」

俺もそっちの方が早いと判断して、若干遊びがあるところを両手で持って、紙を破くように引き千切る。

「……………」

「ん？ どうした、さか——じゃなくて薫」

と、さらに緩くなった部分を引き千切りにかかる俺を不思議そうに見ている薫に気付いた。

「いや……………」

薫は何か少し考えるような間を置いた後、

「てつきり、縄を燃やすものだと思って……………」

「は？」

「いや、さっき、電灯燃やしてたろう？」

「ああ……………」

そういえば見てたんだっけ。俺と御更木のやり取りと、俺の黒歴史……………」

「いやああいう力は、基本使わないんだ」

「何故だ？」

「だから、この状態の時は手加減をするようにしてるし、そもそもああいうの使うの苦手なんだよ」

「ほお。それでも使ったという事は、あいつはそれなりに手強い相手だったという事か」

「うーん、まあ……………」

持つてるものが反則だったりしたけど、それ以上に色んな意味でバカだったしなあ、あの人。

「っと、これで全部ほどけるかな」

微妙に返しづらい話題になったので、話をそらす。

「そうだな、これならもう両手は動くだろう」

薫はそれ以上は特に突っ込まず、立ち上がって理事長の口を封じていた布を取った。

「ふはあ……」

理事長は手と口を開放されると、一つ大きく息を吐き、手首をプラプラとほぐし始めた。

「これで、救出完了……か？」

「そうだな、当初の目的は果たしたし、後は私が廊下でノビてるあいつを持って帰れば万事オーケーだろう」

（ようやくこの騒動も終わりか……）

「はー、苦しかった。まったく、なんだったんだあの男は……」

そう思っただけでホッとしている俺のすぐ近くで、手首をほぐし終わったのか、今度は伸びをしてそう呟く理事長。……なんか、失礼だろうけど、見た目より随分若い口調だな……。

「いやーありがとうねえ、君たち……えーと、二丁Cの坂上薫さんと矢城功司君」

そんな感想を抱いていると、理事長から穏やかな表情を向けられ、話しかけられた。

「ていうか、今すごく普通に言っただけ……」

「……なんで俺の名前を？」

「うーん？ 自分の管轄にいる人間の顔と名前を覚えるのは当然の事じゃないかな？」

思わず疑問をぶつけてしまった俺に、当たり前のようにそう言う理事長。

「管轄って……一口にそう言っても、実際に五、六百人の人間が少なくともいるんですよ？」

「そうかい？ 昔——まだ私が現役だった頃は、何百というお得意様の名前はもとより、趣味やら何やらまで完璧に頭に入れていたもんだよ？ それに比べれば生徒の顔と名前の五百や六百なんて、軽い軽い」

「……………」

その言葉に、啞然とする俺。やつぱり、超一流企業の総帥ともなると、それくらいは常識なんだろうか。

「いやあ、常識って言うか、トップに立つ者としての責務でもあると思うけどねえ」

そんな疑問が顔に出ていたのか、優しそうな笑顔と共にそう諭すように言ってくる理事長。そこに、何か貫禄のようなものを感じた。「ところで……」理事長は俺と薫の顔を交互に見る。「今日のこの騒ぎは、一体なんだったんだい？」

「あー、それはですね……」

「それは私の方から説明しよう」

口ごもった俺の代わりに薫が前に出て、今日のこの騒動についての説明を始める。発端からついさっきの俺と御更木の戦いまで、ところどころ（主に坂上がからかわれている辺り）を端折り、俺の秘密の事は、俺の確認を取ってから、オブラートに包んで話した。

理事長はその坂上からの話を終始穏やかな表情を崩さずに聞いていた。そして聞き終えると、

「君たちもなかなか大変な人生を歩んでるんだねえ……」

そう感慨深げに呟いた。そしてその言葉に拍子抜けした俺。

「え？ あの、感想それだけですか？」

「ん？ 他に何か思う事ある？」

「いや、自分とその孫が危険な目に遭いかけたんですよ？」

「あーそのこと。ん、梢も助け出してくれたんだらう？」

「え、ええ、まあ……」

「それなら何も気にする事はないじゃないか。それにこんな事を仕掛けてくる所なんて高が知れてるし、大体の見当はつけてあるんだ。

それに——」理事長はそこまで言うと、今までの柔和な表情を崩し、こちらがうすら寒くなるほどの笑みを浮かべる。「——大丈夫。私の孫を危ない目に遭わせようとした事は、きつちりと、三倍返しくらいで思い知らせてあげるし」

そして暗い笑い声を上げ始めた理事長に、正直俺はかなりビビった。しかし隣に立っている薫は全然平気そうだし、それを知られることはなんとなく恥ずかしいと思ったので、どうにか平静を装う。

「理事長。それはつまり、今回のこの件についての私と矢城の処遇は不問とする、という認識でいいのか？」

薫がそう言うと、理事長はまた穏やかな表情に戻った。

「ええ、不問にしますとも。というよりも、こちらが礼を言うべきでもあるんだよ。ありがとう、梢を助けてくれて」

「あー、理事長。ちよつといいですか？」

「なんだい？」

「いや……今回の件を不問にする、と言いましても……その、あの扉の向こう側にはけっこうな惨状が広がっているんですが……。具体的に言うと電灯が一箇所、多分配線からイカレちゃったのと、トイレの扉が取り外されてボコボコになっているのと、所々銃弾が跳ねた跡が残ってるのと、消火器が一個ダメになっているんですが……。さらに、その大半は俺がやっちゃった事なんですけど……」

これ、立派な公共物破損だね……。

「その惨状は、あの私を縛った男と闘ってできたものなんですよ？」

「え、ええ、まあ……ちよつと勝つためにやむを得なかったというか、なんというか……」

ああ、こればかりは怒られて弁償ものだろうなあ……。やっぱこの状態になると絶対に金銭問題に発展するよなあ……。

「えーと、そういう訳で、その……すみませ——」

「あっはっはっは！ いいじゃない、そういうの！」

「——え？」

とりあえず謝ってしかるべき処分を受けようとした俺の声を遮る、理事長の笑い声。

「うん、すごく面白い！ そんな漫画的なバトルが私の学園で行われてたなんて……考えただけでもワクワクする！」

「え、ええ？ あの、弁償とかは——」

「あつはつはつは、いらないうらない！ やっぱり男の子はそのくらい元気がなくちゃー！」

「……………」

理事長はなんだかものすごく上機嫌だ。ていうか本当にいいのか！？

「うんうん、桐垣君には毎度イベントの時には楽しませてもらっていたけど、今度は君と桐垣君が組むのかぁ！」

「いや、組みませんから」

多分一方的に巻き込まれたりするんだろうけど……。

「ははは、いいじゃない、楽しみなさいな！ ただ一度の高校生活、楽しんだものの勝ちだよ！」

理事長は上機嫌に笑ったまま、そう言っただけ俺の背中をバシバシ叩く。

（……………なんというか）

ものすごく豪放な人だったんだなあ、理事長って……。

「はは、良かったじゃないか矢城。好きな人を救えて、隠し事はなくなっただけ、この学園にいられるようになって」

「……………」

確かに万事めでたしめでたし、なのだが……本当に俺はこの学園にいていいのだろうか？

またいつか、今日みたいな出来事があった時に、今度は誰か大切な人を傷つけてしまうかもしれない。

そしてみんなに嫌われてしまうかもしれない。

今でも脳裏にこびりついている、あの事件で俺に向けられた東の目。何か怖いものを見るような、得体のしれないものを見るような

視線。

もしもまた、あんな目をみんなから向けられる時がくるとしたら

（それに……）

廊下の惨状。本来なら停学、悪ければ退学にもなるであろう行いだろう。

「なにやら浮かない顔だね。何をそんなに悩んでいるんだい？」

そんな考えが顔に出ていたのか、理事長が先ほどの上機嫌な様子は見せずに、心配そうに尋ねてくる。

「……いえ、別に」

「ふむ……。大体何を悩んでいるかは分かるけど、それはそんなに悩む事なのかい？」

「……………」

そりゃ、悩むだろう。だって、俺のせいで友達にまで迷惑がかかるかもしれないんだぞ？

「別に、それでもいいんじゃないか？」

「え……？」

薫がなんでもないように言った言葉に、俺は間拔けた声を出してしまった。

「別に、友達にならそんな迷惑はかけたっていいんじゃないか？」

それに、少なくとも私はそれを迷惑だと思わないと思うぞ？」

「い、いやでも、もしかしたら次にこの状態になった時には平静を保つてられないかもしれないんだぞ？ 今日以上の厄介事を起こすかもしれないんだぞ？」

「今日の厄介事の発端は私で、君はそれに巻き込まれただけだと思うが」

「そ、そうかもしれないけど……廊下を壊したりしたのは俺だし……」

「だから、その発端はすべて私だろう。それに君は、人間に対して力を振るう時、神経質すぎるほどに気を付けていたじゃないか」

「……………」

……当たり前だ。多分、全力で人間を殴ったら、その人は――

「手加減に手加減を重ねるように、ずっと気を遣っていたんだろう？ 相手の事を思いやってたんだろう？ ふつ、いいじゃないか。」

そんな、人に気を遣いすぎる友達にかけられる迷惑っていうのも」

「……そんな風に、人に気を遣うって言うけど……」

本当は、問題を起こしてここを離れるのが嫌なだけ。両親に、また迷惑をかけるのが嫌なだけ。

「それは君の思惑だろう。私は勝手に、矢城功司は人に気を遣いすぎる人間、と思っておく」

「まあ、そういう事だよ」

そこで、俺と薫のやり取りを黙って見ていた理事長が喋り出す。

「つまり君は『一方的に友達に迷惑をかけるだけ』だと思っているけど、実際に友達は『そんな迷惑の内に入らない。それよりも君という方が楽しくていい』と思っっているわけだ」

「そんなの、薫だけかもしれないし――」

「そうか？ さっき、矢城の秘密がみんなに知れ渡った時の反応を見る限り、みんな大体同じような事を思うだろうけどな」

さっきの、みんなの反応。普通なら気味悪がったりするかもしれないのに、何にも変わらずに、むしろそんな事を気にしていた俺がバカに思えるくらいにいつも通りなやり取りをした。

（そういえば、その時思っただけ……。あいつら相手にシリアスになるのは馬鹿げてるって）

「そう、かな……そうかもな」

「そうだぞ、まったく。君は本当に思い込みが激しいな」

「……うっさい。16年間培われてきた性格なんだ」

「くすっ……」

そのやり取りを見ていた理事長が不意に笑いだした。

「いやあ、若いていいねえ……私も昔を思い出したよ。うーん、あの頃は梢みたいに見えがちゃくて、よくからかわれ――」と、

そこでなぜか理事長の言葉が止まる。「——そういえば、矢城君」  
そして俺に向けられる笑顔。おかしい。柔らかな笑顔のはずなのに、なんだか寒気がして……

「梢に、何かした？」

「は、はい？」

来宮さんに、何かしたって？

「いやあねえ、なんだか、梢が最近、よく君の話をするから。しかもその事を梢に聞くと、何故か、真っ赤になって話を逸らそうとするんだけど……何で？」

笑顔の迫力が上がった……ような気がする。

「え、え？ 俺に聞かれても……えっと、来宮さんとした事は……」  
確か、初めて会ったのが倉庫で、そこでとりとめのない会話して、ロッカーに閉じこも——「……あ」

「なに？ 今の『……あ』ってなに？ なにしたの、私の愛しい梢に？ さあ怒らないから素直に白状してみなさい？ 早く自白すれば罪も軽くなるよ？」

え？ あれ？ なんか罪になること前提で話が進んでませんか……？

「言わないのかい？ はっ……まさか言えないような事をしたんだね？ どこか暗い所に閉じ込めて洗脳したんだね？」

「あ、いや——」

あながち外れていないだけにはつきりと否定ができない。いや閉じ込めようとしたんじゃないやなくて、あれは不可抗力で一緒に入っただけだヨ？

「ああ、可哀想な梢……嫁入り前の体なのに穢されて……。いつも護身用に持たせてる武器も、きつと相手が可哀想だから使えなかったのね……」

……ポケットから出てたアレ、マジでナイフの柄だったのか……。

「だ、だから違——」

「なに！？ それじゃあ同意の上でしたの！？」

「違いますから！　そもそも前提が違います！　なんで俺が来宮さんになにかした事前提で話が進んでんですか！？」

「だってあんなに可愛い梢の事だもの、きっと色んな男に言い寄られて……」

そうして脈絡もなく始まった理事長による孫自慢。延々と朗々と、淀みなく語られる、来宮さんのいいところ可愛いところ。

（……この人も……東家印の親父殿と同類か……）

という事は、来宮さん、悪い虫がよらないようにこのおばあさまに過保護られてたんだろうなあ……。

（だからあんなに初々しい反応したのか？　あの時……）

来宮さんの、小さいくせにしっかりと凹凸があつた体の感触を思い出すという変態行為に及んでいると――

「あつ……」

――不意に、視界が歪みだした。

（あー、まずい……倒れる）

ぐにやぐにやと、天井と床と壁が混ざり合つては溶け合わず、まるでマーブル模様のような世界が俺を包み込んだ。

地に足がついているのに感じる浮遊感。頭がめちゃくちや重くて、喉が乾いて、足に力が入らなくて。

「どーした？　――城――」

「か――ろ悪――？　だー丈夫？」

薫と理事長の声も、どこか遠い。

（多分、力使いすぎて……気を失うつぱい……）

声に出したが、本当に出ていたかは分からない。

その辺りで、マーブル模様の世界に、黒い光がポツポツと浮き出てきた。

眩しい。

そう思つて目を閉じたけど、その光は容赦なく俺の視界に映つては消えていく。

（あー……ここらが限界かなあ……）

頭の中が掻き回されたような感じがするけど、意外と冷静に自分を見ていられた。

（まあ……来宮さんも、理事長も、東の事も救えたし……）  
万事オーケー。もう倒れても大丈夫だろう。

そう思った俺は、ゆっくりとその世界に身を委ねた。

## エピソード：続く日常

### エピソード：続く日常

目を覚ますと、そこは見慣れた教室だった。

「あれ……？」

不審に思っ、辺りを見回す。自分が今いるのは、自分の席。どうやら机に突っ伏していたようだ。教室の中には、先生はいなくて、クラスメートは思い思いにやりたい事をやっている。

（休み時間……？）

そう思っ、時計をしてみるけれど、時計の針が示す時間は、まだ六時間目の授業中の数字だった。

（あ……：そういうば、六時間目は自習だったっけ……）

そこまで考えて、ふと、自分は今まで何をしていたんだろうか、という疑問に行き着いた。

「……………」

思い出せない。でも、なにか怖かったような、温かかったような気がする。

（夢……：だったのかな？）

ずっ、と昔に感じた様な気持ちをしたような気もする。懐かしくて、やっぱり少し怖くて、それでもちよっ、と嬉しかった……

「おや、起きたのか」

そこで、隣の席から声をかけられた。そっちの方を向くと、そこには机の上によく分からない何かの設計図みたいなものを広げた——  
「ん？ 大丈夫か？ 俺の事が分かるか？ 秋葉学園希代のホープ、桐垣秀智だぞ？」

「あ……：うん、分かる」

胡乱な目で、ボーっ、としていたせいか、そんな説明をされてしま  
う。

（希代のホープって……）

自分で言うことかな？　なんて思ったけど、いつもの事なので気にしない事にする。

「ここは……」

「2-Cの教室だが……大丈夫か？」

まだぼんやりとした頭でそんな事を言ったら、また心配された。そんなに心配されることをしたのだろうか？

「うん、大丈夫」

とりあえずそう言うておく。まだちょっと頭がぼんやりしているけれど……。

「それならいいんだが……」

彼はそう言うのと、また机の上の設計図みたいなものに視線を戻す。……これだと量産には向くが……いかんせん威力の方が期待できない……。それにマグネシウムの量も火薬の量も限られるから、不発という状況も起こるかもしれない……。やっぱりコストと手間がかかるが、従来のタイプの方がいいな。ふむ……あいつから感想が聞ければもう少しマシなものが作れるかもしれないが……」

そんな事を呟いている彼を横目に、頑張って今まで自分がどうしていたのかを思い出そうとする。

（確か……五時間目が終わって……）

周りのみんながものすごく眠そうな表情をしていて、特にやる事もないからトイレに――

（あつ……）

そうだ、トイレ。確か、トイレに行こうとして……それで……

「功司君――」

思わず立ち上がって大きな声を出してしまった。周りの目が自分に向けられる。隣で設計図みたいなものに見入っていた桐垣君も、少し離れた席で大人しく自習していた楓ちゃんも、机に突っ伏して

いた氷室君も。

「あう……」

そして恥ずかしくなった私は赤くなって、大人しく自分の席に座る。周りのクラスメートたちは、それで私から関心を失ったのか、それぞれの作業に戻っていく。所々で「やっぱり矢城と東はできてるのか？」とか「矢城……いつか貴様に天誅という名の嫉妬を喰らわせるからな」なんて話をしているようだったけど、聞こえない。きつと空耳、もしくは違う矢城君と東さんの話だろうと思う事にした。

そして、座ってある程度落ち着いてから隣の席の桐垣君に声をかける。

「ねえ、桐垣君……功司君は？」

「矢城は、坂上さんと一緒に悪の組織を根絶やしに出かけたぞ」

かえってきた言葉、ふざけた様な内容だった。けれども、桐垣君は本当の事を言っているようにしか見えない。

「悪の組織って……？」

「さあ？ 坂上さん曰く、リーダーがロリコンらしい。それで、矢城は好きな人が傷つけられたから逆上してその組織を潰すと言い、坂上さんはそれに着いていった」

なんでもないようにそう言って、桐垣君は視線を机に戻す。

「ああ、あと、矢城がどうしようもなく下らない事で悩んでいたぞ」  
そして、思いだしたようにそう言った。

「下らない事……？」

「ああ。はるか昔の事を含めて、自分のせいでまた誰かを傷つけたとか、傷つけることになるのかなんとか」

「……！」

「まったく、そんな事誰も気にしていないだろうに。そんな事で悩むなんて、あいつは本当に善人だな」

桐垣君はそれだけ言つと、設計図みたいなものに何かを書き込み始めた。

（功司君……まだ……あの事を気にしてるのかな……）

それは小学生の頃。誘拐されかけた私を助けてくれた、小さなヒーローの話。助けられたのに、怯えて、お礼も言えなかった臆病な女の子の話。

赤い夕日に染め上げられた道路で見た、泣きそうなヒーローの顔と遠ざかっていく背中。

（私が……私のせいであんな目に遭って……）

ずっと謝りたかった。ずっとお礼を言いたかった。巻き込んでごめんね、助けてくれてありがとうって。

次に会った時には絶対に言おう、と思ったら、功司君は引越してしまっていた。そして、もう一生会えないと思ってた。

『のわっ!?!』

なのに会えた。また同じクラスになった。そして、その再会の一言目、久しぶりに私が聞いた、好きな人の声。

全然しまりがなくて、間抜けに驚いた声。でもそれが、妙に功司君らしくて……。

（また、助けられちゃったのかな……）

さっきまでの記憶。すぐくおぼろげだけど、また功司君におんぶしてもらったような気がする。

（功司君……大丈夫かな……）

私には心配する資格がないのかもしれない。だけど心配だ。また、怪我とかしてないといいけど――

「ただいま戻ったぞ」

そんな事を思っていると、薫ちゃんが教室に戻ってきた。

「うん？ おや、起きたのか、涅槃」

そして私の姿を確認すると、私の席に近づいてくる。

「薫ちゃん、功司君は？」

「ああ、矢城か。あいつは……」

キンコンカンコン……

そこで、六時間目の終わりを告げるチャイムの音が響いた。

にわかに騒がしくなる教室。

「あいつなら——」

薫ちゃんの声は、周りの雑音にかき消されそうな大きさに響いた。

——現在時刻、午後十時。辺りも暗く、なにより静かだった。そんな静寂の空気の中を、俺達を乗せた車は走っている。

（疲れた……）

身体の疲れもちろんの事、精神の疲れも尋常じゃなかった。

俺は目を閉じて、車の窓に顔を寄りかからせる。

——カタン、カタン……

と、眼鏡の蔓が窓に当たってカタカタと音をたてた。

「痛……」

そこで俺は、今自分が眼鏡をしていた事を思い出す。

（ああそうだ……今眼鏡っ娘状態だったんだ、俺）

その事をすっかりと忘れていて、冗談を交えた思考に、自嘲的な感情に浸る。

（だけどこいつをかけなきゃいけない理由は忘れられそうにもない）  
常時手首に巻いてある、プロミスリング——要はミサンガ——に手を伸ばす。

脳裏に浮かぶのは、少し薄いオレンジ色、模様も何もないシンプルな物。触れれば少しくたびれた布の感触。

だけど実際に見えるのは淡い黄色。感触は真新しい布の物。

（あれ、結構気に入ってたんだけどなあ……）

なんて個人的な感傷に浸るよりも。

（また迷惑かけちゃったなあ……）

そう思いながら、謝罪の言葉も出せないどうしようもない俺。勇気がないから面と向かって言えず。

だけど本当は知っている。きつと、望まれる事は謝罪じゃなくて。

ただ俺は、無駄な意地を張っているようなもので。そんな俺だからこそ。何も言えない俺だからこそ。

——幸せに笑っていよう。

——もうこれ以上、誰かに迷惑をかけないように。

……車は静かに走り続ける——

「……あ？」

目を覚ますと、まず見慣れた天井が見え、それを認識した後に頭に割れるような痛みが走った。

「っ……痛たた……」

痛い。かなり痛い。どれくらい痛いかっていうと、上手く言葉にできないくらいに痛い。

その痛みに堪え、横たわっていたベッドから上半身を起こす。途端に目眩が襲いかかってきたが、それも堪える。

「うー……ここは……」

周りを見回してみる。東に面した窓の外は黄昏。部屋の中は薄暗く、見慣れてきた部屋なのになんだか全然違うところにいるみたいだった。壁に面して置いてある本棚には、買ったまま読むのを忘れた小説が三冊横済みにされている。

「……」

はて、俺はなんで自分の部屋で眠っていたんだっけか？

「……痛い」

思い出そうと頭を使ったら、また鈍い痛みが走った。

（とりあえずそれは我慢するとして……）

……確か、何かの夢を見ていた気がする。

どこか悲しくて、どこか辛くて、なんとなく懐かしかったような……。

（いや今はそんな夢の事よりも……）

俺がなんでここに眠っていたか、だ。

普通に考えれば、昨日の夜か今日の昼ごろにでもこのベッドに入って眠ろうとしたからだ、そんな記憶はまったくない。というか、眠る前の記憶がかなりおぼろげだ。

（えーっと、俺は何をしてたんだっけ……）

痛い頭でどうにか眠る前の記憶を思い出そうとする。

（とにかく、こんなに頭が痛いって事は、俺があの状態になったか酒に溺れていたかで……）

だがお酒は二十歳から、という決まり事を愚直に守り続けている俺は酒を飲んだ事がない。でもきつと二日酔いつてこんな気分なんだろうな、父さんの話を聞く限り。

（って、今はそんな事考えてる場合じゃないだろう……）

逸れかけた思考を進路修正。どうにか眠る前の事を思い出そうとする。頑張れ、俺の脳細胞。

（確か……）

力を使った。これは間違いないだろう。じゃあ、なんで使ったんだ？ 確か、俺は五時間目が終わった時にトイレに――

「あ、東……」

思い出した。東が攫われそうになって、それを助けるために使ったんだ……。それでみんなにこの事がばれたけど全然俺が気にしてた事態にはならなくて、坂上――確か『薫』って呼ぶ約束をしたような気もする――と親バカを倒しに行つて……。

「ていうか、トイレで思い出す俺って……」

ましてや好きな人を――

「――って、ちょっと待て」

誰が誰が好きだつて？ 俺が？ 東の事を？ そんなバナナ。ないない、絶対にない。第一、俺は嫌われてるのかも知れないんだぜ？ そんな人を好きになるほど俺はそっちの気はないハズだろう？

そういう弁解を一人、薄暗い自分の部屋でやる事の虚しさを実感した俺は、自分の携帯電話を探すため、ベッドから這い出た。そこで気付いたが、どうやら俺は制服のまま寝ていたようだ。

「あれ、じゃあケイタイ、ポケットに入ってたんじゃない？」

制服のズボンのポケットをまさぐると、そこには堅い感触。

「おお、あつたあつた」

すぐに開いて時刻を確認。あるゲームの背景グラフィックな待ち受けの、下の方に記された数字。

五月二十三日（木）十七時二十三分

「……………」

あれ、確か今日は二十二日じゃなかったっけ？

「はい、違いますよね……………」

…………どうやら、俺は一日中眠り続けていたようだ。なんだかすごくもったいない気分。

俺は溜め息をついて、これからどうするかを考える。

（うーん…………よし。眼鏡、探そう）

とりあえずこの頭痛と、恐らく翡翠色であろう瞳をごまかすための眼鏡を探すことにする。

でも前に外した時、どこに置いたっけ？

「あ……………」確か、引越してきた時に外して、そのまま置いて…………。「母さんがリビングの棚に置いてく、と言った気がする」  
そういえば、前にかける時も同じような感じだった気がする。

（自分の大事なもののくらい自分で管理しとけよ…………）

…………前にも思った気がする…………。

「まあいいや」

そういう自分の性格はキレイサッパリ横に置いておき、俺はリビングを目指…………

…………ピンポン。

…………そうしたら、響くチャイムの音。しかし俺は病み上がり（？）だし、面倒くさいから母さんに対応は任せていいだろう。そう

判断した俺はリビングを目指した。

「あー、あったあった」

リビングに一步足を踏み入れると、とても分かりやすく、机の上には眼鏡が置いてあった。ついでに書き置きの紙が一枚。

『ちよつと買い物行つてきます。あんまり無理しないでね？』

その紙には、そんな事が丁寧な字で書かれていた。書いたのは、多分母さん。俺が起きてくるか分からないけど、一応書いておいたもののだろう。

心配性だな、と思わなくもないけど、確かに一日中寝たきりだったら心配するよな、普通。

——ピンポン。

そこで再度鳴り響くチャイムの音。

「あー……」

ここに書き置きがあるって事は、母さんはいないんだろう。

「仕方ない、俺が出るか……」

あんまり眼鏡しているところとかは誰かに見られなくなかったが、この際しょうがない。ちよこつと寝ぐせとかもあるみたいだけど、どうせ宅配便とかだったらその場一度きりの出会いだろうし、まあこのままでいいか。

俺はそう思つて玄関に赴いた。

そして、扉を開いた瞬間に後悔した。

「おお、眼鏡だ」

「ああ、眼鏡だな」

「なんだ功司、そっちの属性になる気か？」

だってそこにいたのは、一度きりしか会わないであろう宅配便のお兄さんでもなければしつこいセールスのおじさんでもなく、毎日顔を突き合わせるであろう私服姿のクラスメート達だったんですも

の。

「そういう訳で、またの機会に」

俺はそう言つて扉を閉めようとする。

——ガッ！

しかし、それより早く桐垣の足が扉の間に入り、ついで扉を手で掴まれる。

「いいのか？ このまま扉を引けば俺の手を挟むことになるぞ？

一晩中「ごめんね」つて言い続けるぞ？ 雨降らすぞ？」

「うるさい。今、矢城功司は取り込み中……いや最早ここにいるのは矢城功司は矢城功司であつて矢城功司でないもので、一度この家に足を踏み入れたが最後、貴様らを俺ではない俺が喰い尽してしまふだろう。うう、みんな、もう一人の俺が暴れる前に早く逃げ——」

「そうか。では邪魔するぞ」

「人の話を最後まで聞けえ！！」

くっ……痛い中二病作戦は失敗か……！

そうしている間に、さらに扉にかけられる手。

「この恨み、はらさでおられるか」

「落ち着け、同志よ。お前は強い。そんな邪悪に負けるほど懦弱ではないはずだッ！」

上から数えて、七つ。合計して二十八本の指が見え——

「つて一つ手が多い！？」

——ちよつと待て、確か外には桐垣と龍鶴と天笠しかいなかったはずだが……

「ああ、見えちゃったのね」

「見えちゃったって何がさ！？」

「■■■■の事よ」

「聞き取れないよ！？ 今何て言つた！？」

つていつかりアルで怖いから！ 勘弁して下さい！

「……功司君」

「えっ……」

そんなバカなやり取りの最中、ほんの小さな声だが、しっかりと聞こえた声。

そちらに注意を奪われ、扉を持つ手の力が緩む。その隙に合計七つの手に扉を開かれてしまう。

「はーっはっはっはー！　やはり矢城には東さん攻撃が一番効くな！」

「これも愛の力……」

「悔しくなんかない悔しくなんかない悔しくなんかない悔しくなんかない……」

賑やかな面々はさておき、俺の真正面におわすは俯きがちな東湊亜さんご本人。というか本人がいる前でひやかすの、やめていただけません？　あと俺たちが公然両想いみたいなノリも。東に失礼だろうに。

「……………」

「……………」

なんて言葉も頭の中でぐるぐる回るだけで、口は乾ききって、なんの言葉も出てこない。なんで東と対面するだけでこんな気持ちにならなくちゃいけないんだ……？

「功司君」

「あ、ああ……なに……？」

呼びかけられ、かすれそうな声で返す俺。正直一杯一杯です。

「また……」そこで、少し視線を上げて、俺の顔を見る東。「……助けてくれたんだね……」

その言葉に、視線に、不覚にも心臓が跳ねた。

「あ、いや……成り行き、というかなんというか……」  
変にドギマギしたままそう返す。

「でも、あの時みたいにもた助けてくれたんだよね……？」

あの時。東という、あの時といえば、あの誘拐未遂の時のことだろうか。それとも、体育倉庫を抜け出した時？

そんな空気読めない発言をする勇気は俺にはなく。

「お礼、言ってなかったよね……ありがとう……」

「あ、いや……俺の方こそ……ごめん。その……怖い思いさせて……」

照れ隠しに、いつか面と向かって言えなかった言葉を放つ。でもこんな時にしか言えない意気地なしな自分が少し嫌になった。

「くす……」

東は何がおかしいのか、少し微笑んだ。

「くすくす……なんで功司君が謝るの？ 功司君は私を助けてくれたのに」

東は笑い続け、そう言う。

「……………」

対する俺は、少し呆然としていた。

（……よかった……。俺、嫌われてなかったんだ……）

東にはずっと嫌われているんじゃないか。そう思っていたが、今の言葉を聞く限り、どうやら嫌われてなさそうだ。

しかし嫌われていないならいいで、もう一つの問題が起こってくるのだが。

（うわ……東に嫌われてないって思ったら……顔見れなくなった……）

なんでだ？ なんで急に東の事、意識し始めてんだ俺……？

東はまだ、少し笑っているようだ。

そしてその笑顔を直視できない俺。

「昔の事も、今の事も……ありがとね、功司君」

「……あ、ああ……」

そして向けられた言葉にもまともに返せない。

（あー、まずい。色々まずい。なんか俺のアイデンティティーが色んなピンチを迎えてる気がする……）

「あー、その、なんだ」

そう言っ、なんとなくキョロキョロとする。そして、いつもいるメンバーの中、一人がいない事に気付いた。

「あれ？ 薫は来てないの——」

——か。その事を口にした瞬間、俺をとりまく空気が変わった気がした。

「功司君」

少し俯いた、東から発せられる声。低く、腹の底まで響くような、威圧的な声。

「な、なに……？」

本能的に恐怖を感じた。

「いつから——」

東の目元は、前髪に隠れていて見えない。が、ほぼ確実に、なにかしらの負の感情に満たされているのが分かる。

「——いつから、薫ちゃんの事、下の名前で呼ぶことになったの……？」

ズン、と。東から迫るプレッシャーが強くなった。

「え、え！？ か、かか薫と呼ぶようになった経緯でございませうか！？」 それは成り行きというかなんとというかでございまして——」

対する俺は、それに抗えるはずもなく、ただただおかしな敬語で質問に答えるしか術がない訳で。

「こほん。えー、ここで、本日ご欠席の坂上薫様から、お見舞いの電報を頂いておりますので、披露させて頂きます」

「いやいい！ 桐垣、読まないで、絶対にこの場が収集つかない——」

「功司君は黙ってて」

「は、はいいい——！」

桐垣の暴挙を止めようとするが、逆に東の冷たく鋭い言葉に止められてしまった。

「『拝啓、矢城功司様。あなたから受けた恥辱の限りは忘れられるものではありません。いきなり抱かれた事は、私の胸に深く刻まれて消えない思い出になるでしょう。短くはありますが、最期に一つ。公にはバラせない事を隠し撮りして、その人間を縛るなんて、なんて罪な人なのでしょう。責任取って下さい。坂上薫より』以上でこ

ざいます」

「え！？　ちょ——」

「ふうーん」

「鬼畜ね」

「うわ、見失ったぜ、功司？　だがある意味で尊敬もしている」

「ち、違う！　俺は無実だ！！」

「何が違うの？　薫ちゃんの言ってる事に、何か嘘はあるの？」

「え、い、いや嘘かどうかと聞かれますと全て真実なのですが……」

「言い方。言い方ってもんがあんでしょう！？　それだとまるで俺

が鬼畜で変態な男じゃないか！！　ちょ、薫、貴様安全な所から復

讐してんじゃねえ！！

「ふう——ん……」

「変態ね」

「功司、やっぱりお前は尊敬に値する漢だったよ」

「い、いやだから違う！　違うのが違う！！」

「それ本当の事だよね？」

「いや、だから——」

「功司君ってさあ、最近ちょ——っと、調子乗ってるよね。むしろ

乗りすぎてるよね？」

「ま、待って、東、顔！　顔近い！！」

「薫ちゃんにはこれ以上の事、したんでしょう？」

「いやだからそれは勘違い——」

「勘違いで凌辱したのね。羨ましい限りだわ」

「さらっと、危ないワードをいつものように発言する天竺。ていう

かお前のセリフは毎度危ないから本当に！！

「違うから！！　ちょっと外野は黙ってて！！」

「ほお、今助け舟を出してやろうかと思ったが、それもいらないの

か。流石は男の中の漢、矢城功司（鬼畜）だな」

したり顔の桐垣。憎い、憎すぎるしたり顔。ここまで俺の気持ち  
を逆なでしたり顔があっただろうか……！！

「あああああ！！ 違う、援軍は喜んでお受けします！！ あと（鬼畜）はやめろ！！」

「じゃあ、女として東さんに味方するわね」

「関係ない男が加わる話じゃないな」

「そうだな、桐垣。俺たちは功司の部屋に行つて、あいつの変態アイデンティティーの基盤となる大人の教科書でも探しに行くか」

そう言つて、俺の横を通り過ぎて家の中に入つていこうとする龍鶴——つて今何て言いやがつた！？

「そうだな」

「ちよつと待てええ！！ 勝手に俺の部屋に入んなああ！！！！」

「功司君、持つてるの？ そうついう本？」

「え、いや、その……」

言葉に詰まつた俺の間近に、東の満面の笑顔。笑顔なのに、恐怖を感じるのはなんでなんだろう？ ていうかそんな事を幼馴染の女の子に聞かれる状態が理解できないんですけど！？

「さあ、楽しい矢城功司の私室探検の時間だよ」

「わーい」

その桐垣の声に、すごく楽しそうに答える俺を除く面々。

「え！？ ちょ、マジで！？ マジでやめてええええ！！！！」

そう叫ぶ俺の声は、虚しく茜空に響いていった。

……多分、俺はこれから、こんな賑やかな日々を送つて行くんだろつな……。

必死の説得（誠意ある土下座）により、どうにか『第一回矢城功司私室探検（青少年の秘境を暴け）』を中止させた俺は、みんなの笑顔の中、そんな事を思つた。

The story of certain boys and girls daily was once finished.

But, their story is never  
still be following.  
end,

## エピソード：続く日常（後書き）

皆様はじめまして。 檜 楓呂です。 すいません、またペンネーム変えました……。

えー、このあとがきまで読んで下さっているという事は、本編も読んでくれたんだと思います。 まずはお礼を。

ありがとうございます——！！ ここまで読んでくれて、本当にありがとうございます！！！！

いや本当にしません。 途中まったく更新されなかった時期が三か月ほどありましたが、それは大学受験のせいにします。

あああ嘘ですごめんなさい本当はただ自分が怠惰なだけでごさいます正直に言うから見捨てないでえ——！！  
なんてちょこつと錯乱しちゃった僕です。

えーこの作品は、僕が高校一年生の夏に書き起こした物語で、一つの物語として書き終わるまでに二年半もの年月がかかっております。

二年半も経ってしまうと、文章力やら設定やらがどーしても変わってしまうものでして……いや、後者の設定はただ単に僕の力不足といい加減な性格で変わってしまうんですが。

とにかく、最初から読んでみると、なんだかおかしな点が出てくるかもしれません。

ぶっちゃけ、僕その辺確認してません（爆）

いや本当にすいません。でも二年も経つと、初期の設定とかいつの間にか忘れてたりしちゃうんです、僕の脳は。

……今、人間賛歌を題材にした長編漫画の第五部の最初の方のツコミを僕に入れてくれた人。多分、あなたとは友達になれそうです。

こんな感じの、作中に所々ある分かり辛すぎるパロネタは、きっと分からない人の方が多いと思いますが、分かってくれと僕がニヤリとします。いらない特典ですね、はい。

なにはともあれ、これは僕の処女作です。

はじめての事で、色々大変な事もありましたが、そこは持ち前の無駄ポシティブを発揮、また、友達に貴重な意見を貰うという行為でカバーしました。

少しでも楽しんで読んで頂けたなら、名もなき一人の物書きとして、これに勝る喜びはありません。

ついでに、僕はブログを書いているのですが、そちらも良かったらどうぞ。もう趣味出まくりの混沌状態ですが。……あと、ここにURL張るの、罪になりませんよね？（汗）

そんなこんなで、ここまで読んで下さった読者様々に、繰り返し感謝を申し上げます。

僕に、こんなあとがきを書かせてくれてありがとう（↑おい）ええと、あとがきって、けっこう懂れるものなんですよ。だから気にしないでください。

この次回作は一応考えていますが、その前にもう一つの物語をどうにか終わらせたいと思います。

それでは、ここらで。また機会があればお会いしましょう。

ここまで、読んで下さってありがとうございます。東京の片田舎

から、感謝を。

http://blog.goo.ne.jp/alter  
piece

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0251f/>

---

そんな学園の日常

2010年10月8日13時04分発行